
裏探偵 BackDetective

ものかき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏探偵 Back Detective

【Nコード】

N4514S

【作者名】

ものかき

【あらすじ】

裏探偵、それは決して表舞台に姿を現さず、事件を『裏側』にて解決する探偵だ。

そんな探偵に主人公（恐らく最強のアホ）の推理と、その周囲で主人公に巻き込まれるスタントマン（恐らく最強の女性）とスナイパー（恐らく最強の眼鏡）のドタバタ奔走劇をご覧ください！

『このフレーズ、誰が考えた？』

『一言言っておきますが、裏探偵の説明の欄は、かなり美化して。』

『シーツ!ご、ごほん、何でもないよ! (汗) ではなく、後でお会いしましょうか・・・読めますよね?』

キャスティング

1 キャスティング

スタントマンであるヒサギは、撮影開始の合図であるカチンコの音を待っていた。

赤いセダンは、いつでも暴走する準備は出来ている。また、運転手である彼女もアクセルはいつでも踏めるぎりぎりの緊張状態にあった。

赤いセダンの後ろには、撮影用の黒い特別仕様の乗用車が唸り声を上げている。

シナリオはこうだ。ヒロインとなる女性は謎の組織の囲まれている主人公を助けるため、追っ手の黒い乗用車たちを振り切り主人公の元へ駆けつける。

ヒサギは何度も頭の中でシミュレーションをする。重要なのは緊迫するカーチェイスを行うこと、そして主人公を助けるとき、セダンは主人公の目の前スレスレで止まらなければならない。ヒサギはサングラス越しの目を閉じてその瞬間を思い浮かべる。よし、完璧だ。失敗はありえない。

「シーン56 21、テイク1！用意・・・」

緊張感がピークに達する。

「アクシヨン！」

カチンコの音と共に全ての車がアクセルを踏んだ。一斉に唸っていたエンジンが咆哮を上げる。

セダンは咲きに走り出した。その後を猛スピードで黒い乗用車が追いかける。

セダンは蛇行をし始めた。それによって後ろの乗用車と少しだけ差が開く。

しかし、黒い乗用車の人たちはマシンガン・・・の模造品^{レプリカ}を出し、

撃ち始める。

セダンはすかさず対車線に踊り出た！反対の方向に走ってくる車たちがどんどんセダンめがけて走ってくる。ヒサギはそれを鮮やかなハンドル捌きで次々と避けていく。

もちろん、これもスタントのうちだが、手が狂えば衝突は免れないだが、ヒサギは涼しい顔で運転を続ける。後ろの乗用車は反対方向に進む車と派手に衝突し、爆発する。

車と衝突しただけじゃ爆発はしないんだけどな・・・。

ヒサギは運転しながら表情も変えずにそんなことを考えていると、前からは並走する二台の巨大トラックがこちらに近づいている。普通に走っていると衝突は免れない。

するとヒサギはいきなりUターンを始めた。すると車体は遠心力で片方だけ浮いた状態になる。そのまま時計回りに走り、車体を片方浮かせた状態でトラックと向き合った。

セダンはそうして、二台のトラックの隙間スレスレを通った。

もちろん、後ろの車にはそんな芸当は出来ない何台かの乗用車がトラックとぶつかる。これもまたスタントのうちなのだろうが、おそらく今のヒサギのスタントを並みのスタントマンがやろうとすれば、並みの技術と精神が無ければ怪我では済まされないだろう。

早速前方に主人公と思われる男と、それを取り囲む銃を持ったアブナイ人たちが見えてきた。

アブナイ人たちはセダンの姿を確認すると、発砲する。

しかし、セダンはそんなことはお構いなしに問答無用でつつこんだ。銃を撃っていた彼らはギョツとして引かれないように飛びのく。そして、セダンは唐突に急ブレーキをかける。そしてヒサギはブレーキの利いた車のハンドルを切った。

セダンはまるで路上駐車するように後輪だけスピニング始める。キーン、と耳をつんざく奇声を上げながら、後輪は主人公の前スレスレで止まった。セダンと主人公との距離、わずか5？。

「カーツトオ！」

やや興奮気味の監督の声が響き渡った。

あたりが静まる。

「・・・」

沈黙、そして・・・

「OK!!」

ふ・・・と緊張が解けた撮影現場は、いつもどおりのざわめきを取り戻した。

ヒサギは息のひとつも乱さずに車から出てきた。自分の走ってきた道を見てみると、摩擦で出来たタイヤの後がくつきりと地面に残っていた。

ヒサギはサングラスを少しずらしてそれを肉眼で確認すると、何事も無かったかのように歩き出した。

その様子を、撮影人の外から見ている人影がいた。明らかに撮影スタッフとは思えないその人影は、ゆっくりと拍手をして呟いた。

「パーフェクト!」

＊

＊

ヒサギは車に乗り込んでサングラスを取った。

彼女の瞳は深い蒼色をしていた。そして、ひとつに結わえられた髪は、太陽に反射すると綺麗な銀に光る。顔の輪郭はどこからどう見ても完璧なラインだ。どう見てもそこらの女優よりも美しい顔、美しいスタイルだ。なぜ彼女が女優ではなくスタントマンなのか？その謎は映画制作スタッフの中でちょっとした話題になっている。

ヒサギは信号待ちの間を利用して、監督からもらった茶封筒の中身を覗く。

「・・・」

彼女は銀の眉をひそめた。

「・・・くそ。あの監督、給料ケチりやがったな」

美人の口からは無いようなことをはき捨てると、彼女はハンドル

を切った。

彼女のアパートは撮影所からさほど遠くは無かった。

そのアパートはお世辞にも綺麗とは言えるアパートではなかった。

ここに来て、初めて部屋を探すことになったとき、ヒサギは、『汚くても何でもいいから安い部屋を』といったら、不動産屋はここを紹介した。彼女は二つ返事で承諾した。

ヒサギの部屋はアパートの最上階にある。もちろん、そこまでの移動手段は階段しかない。

ヒサギは自分のドアの前に立つ。中に誰かが入ったことがわかるように、ドアの端に誰もわからないように紙が挟みである。安いアパートだとやはり防犯対策がおそろになるため、やむなくこうしている。この紙が落ちていると、誰かが侵入したということになる。

金がたまったら新しい防犯グッズでも買つか・・・金がたまるのはいつかわからないが。

今回は紙がしつかりと挟まっていた。よし、中には誰もいない。

ヒサギはドアを開ける。部屋の中は千切れたベッドシートが引いてあるベッドとテーブル。必要最低限の食料以外何もおいていなかった。

中には誰もいない・・・はずだ。なのにヒサギは即座に顔をこわばらせて警戒態勢に入る。

人の気配がする。

まさか空き巣に侵入されたのでは？だとすれば、空き巣犯はお気の毒だ。この家には何も無い。

ヒサギは足音を潜めながら、部屋の中にある照明スイッチを手探りで付ける。

パツ、と明るくなった部屋。その部屋のテーブルの前で・・・

一人の青年が食事をしていた。

「・・・」

ヒサギは声が出なかった。恐怖ではなく、こういった状況の対処方法が分からないからだ。

青年は、ヒサギが帰ってきたことに気づくことなく、黙々と食事をしていた。

「・・・」

「・・・」

部屋にもぎゅもぎゅという食事をする音だけがしばらく続く。そして。

「・・・」

「もぎゅ・・・ん？」

初めて青年がヒサギを見た。

「気づくのが遅い！」

ヒサギは無意識に叫ぶ。

英国風の高そうなブランドのブラウスの上にベストを着込み、これまた高そうな長いパンツをはいている青年は、ヒサギが買いおいてあったフランスパンを黙々とかぶりついていた。上着と探偵がかぶるような鹿撃ち帽隣の椅子にかけてあった。

ディアスカーハット

年は、今から就職活動に行くような若々しさだ。英国風のベストよりリクルートスーツを着るほうが似合うのではないか。

「・・・」

「やあ」

青年は格好に似合わぬ低めの声で、やっとヒサギに声をかけた。

「・・・そこで何をしている？」

なるべく相手を威嚇しないように努めながらヒサギはそう声をかけた。しかし、実際はかなりドスの聞いた声だ。相手を殴ろうとする左手の拳を何とか右手で抑える。

ここに来て叫ばずに冷静にいられる彼女の精神はすでに鋼のように強靱といえる。

「うん、僕は君を待ってたの。腹が減っていたからちょっと台所にあるものを拝借したよ・・・しかし、ガスが止められていたのは予想外だね、残念だよ。おいしい料理を作ろうと思ったのに」

そういった彼には、勝手に部屋に入ったことに対する『謝罪』とか、

勝手に食料を食い漁ったことに対する『反省』の感情はまったく持つて見られなかった。

「・・・私が警察を呼ぶ前にとっとと帰れ。今なら見逃す」

ヒサギはかなりにらみを利かせながら言った。

「まあまあ、僕の話聞いてよ」

青年はあっけなくヒサギの言葉をスルーして言った。

青年はいつの間にか資料のような紙束を取り出して、それとヒサギとを交互に見る。

「君はヒサギ君だね？」

「・・・」

「職業、スタントマン。家はここで合ってたわけだ。あと、年齢がいまいち正確じゃない。君は今年で何歳？」

「・・・」

どうして不審者のほうが会話の主導権を握っているんだ！？

この男を相手にそんなことを叫んでも意味が無いと悟ったヒサギは、冗談めかしに言った。

「レディに年を聞くのは野暮ってものだろう」

まったくもってらしくないセリフだが、出来るだけ棒読みにならないように言った。

「・・・」

一瞬男は沈黙した。そして、ポンツ、と両手を打つ

「そうか、君はレディだったのか」

「それって冗談か・・・！？」

ヒサギは、今にも青年にとび蹴りを食らわそうかと思っただが強靱な精神力で耐えた。

「ふふん」

そういつて青年は笑うだけだった。

何だその笑みは！？

「あんたは何者だ！？名を名乗れ、名を！」

ここまで来てようやくヒサギは第一に聞かなければならないことを

口にする。

「僕？僕は護身のために本名は明かさないことにしているんだよ、ヒサギ君」

「なれなれしく呼ぶな！」

「まあ、主人^{オーナー}とでも呼びたまえよ。ちなみに職業は映画監督だよ」
どうしてそんなに上から目線なんだ！

ヒサギはそう叫ぶのを強靱な精神力で耐え抜いた。

青年は再びフランスパンにかぶりついた。後でわかったことだが、ヒサギが買いだめしておいた全てのフランスパンは、この男の手によつて全て食い尽くされていた。

「映画監督？嘘は上手に使い。そんなに若いのに監督が出来るわけが無いだろう？」

無意識に語尾が命令形になる。普段はそんなことはないのだが、この男の前ではそうなる。

「人は見かけによらないよ」

「あんたは何歳だ？」

「『レディに年を聞くのは野暮つてもものだろう』？」

「・・・」

頭が痛い。

「・・・で、お若い監督さんはここへ何をしに来た？満足な答えが出ないと不法侵入罪でたたき出すぞ」

「監督がスタントマン（きみ）に依頼をする理由はひとつしかない」
「スタントの依頼？」

「その通り！」

^{オーナー}主人はパチンと指を鳴らす。

ヒサギは、なんだか胡散臭さを感じた。

「じゃあ、ひとつ素朴な疑問」

「なんだい？」

「どうしてスタントの依頼するのに、わざわざ不法侵入をする必要がある！？」

「だって、僕みたいな有名な監督は一步外に出たらあつという間に人々が押し寄せてまともに動けなくなるんだよ？」

絶対嘘だ。ヒサギは本能でそう思った。おそらくはこうしたほうが『楽しいから』そんなことをしたんだ。

「きみにねえ、僕が新しく作る映画のスタントを頼みたいんだよ」「どんな映画だ？」

ひとまず、頭をビジネスの話に切り替える。

「良くぞ聞いてくれました！」

オナ
主人はいきなり立ち上がる。

「僕の今度の最新作は、女王暗殺を阻止するハードボイルドな探偵の活躍を描くサスペンサクシヨン！その名も、『姿無き暗殺者』ハードボイルド探偵、初めての太活躍！』！」

「いろんな映画を取ってつけたような映画・・・」

ヒサギは思わず心の中の呟きを口にする。

「む！君は僕の映画を馬鹿にするのかい！？」

「・・・別に」

「とにかく、今回はサスペンサクシヨンということで、スタントがたくさん必要なのだ！そこで・・・」

「私にスタントを？」

「またまたその通り！」

オナ
主人は人差し指をビシツとヒサギに突きつける。

「・・・」

ヒサギの天秤がゆらゆら揺れる。片方には『不法侵入者の言うことを百パーセント信じないで依頼も受けず、警察に後を任せる』と、もう片方には『この男を監督だとひとまずは信じて、もらった金だけの仕事をこなして、さっさとこの男と縁を切る』。

天秤は激しく揺れた。

私が常人ならどちらを取るか・・・

「あ、そうそう」

オナ
主人は思い出したように言う。

「君の家のガスが止められていたところを見ると、かなりギリギリのジリ貧生活を送っているようだね」

余計なお世話だ！

「そんな君のためにこんなものを用意したんだ」
オイナ

主人は上着の懷から一枚の紙を取り出した。

それは、金額の書かれていない小切手。

「報酬は、弾むよ？」

「・・・」

たっぷりの沈黙。

「・・・まさか、そこに好きな金額を書いてもいいとか？」

「うん？」

「好きなだけ？」

「好きなだけ」

「ゼロをいくつも？」

「それはもう」

バキッ。

ヒサギの脳内天秤が派手な音を立てて壊れた。片方の重みに耐えられなくなっただけらしい。

スタントマンの給料は仕事の危険度のわりに少ない。悲しいスタントマンの性だ。
さが

「乗った！」

ヒサギは主人から小切手を奪い取った。
オイナ

「はや・・・」

彼は呆然とする。

ここで依頼を受ける時点で、彼女が常人ではないことが証明された。

「じゃあ、今から行こうか」
オイナ

主人は立ち上がった。

「どこへ」

「映画の打ち合わせ」

「ああ・・・早いな」

「じゃあ行こうか！君の車で！」

「私のかよ！」

このときから、彼女の運命の歯車がゆっくりと動き始める……。

＊

＊

二人の会話から、時間が少しさかのぼる……。

「やはり、先に来ていたかね」

クラウド・ダイスンは待ち合わせ場所であるオープンカフェで紅茶を飲み終わったところで、待ち人がようやく現れた。

紅茶を見つめていた灰色の目が、待ち人に向けられる。

待ち人はつくづく謎めいた人物だ。いつも上着のフードを目深に被り、表情が伺えないのだ。

ダイスンがわかつていることは、相手が男性だということだけだ。それ以外の情報は一切無い。

しかし、ダイスンが合う人間の中でなじみのある人はほばいない。

職業柄、彼に会いに来る人のほとんどが依頼人で、彼らは自身の素性を明かしながらないからだ。

彼の職業は 殺し屋。彼の暗殺術のすごさと実績は裏社会で知らないものはいない。

彼は灰色の目で依頼者を確認した後、懐から懐中時計を取り出して言う。

「約束の時間に二十分も遅れてきていますよ」

彼は、静かながら芯のある低い声で言った。話の内容に反して、その表情はにっこりとしていた。

「あと少し遅れていたら帰っているところでした」

「現代の裏家業の人間は時間には細かいのかな？」

依頼人は冗談にもからかいにも聞こえるように言った。

「職業柄時間にはうるさいのです。ちなみに、私が帰っていたらあなたは私が殺していました」

「・・・なぜ」

「口封じです」

彼は 無表情に言った。

「・・・よくわかった」

依頼人はダイスの言葉に冷や汗を流しながら席に付いた。

「話は単刀直入にお願いします」

ダイスは眼鏡を押し上げ、開口一番そういった。

「わかっているさ。こんなところで物騒な話をするわけにはいくまい」

依頼人は言った。

「^{ターゲット}標的は誰です？」

ダイスが話を切り出すと依頼人は鞆から写真を取り出した。

「・・・ヨーロッパの小国、イルア王国の女王だ」

「ああ、最近独立を宣言した国ですか」

ダイスは大きく興味もなさそうに言う。

「彼女を、殺^やつてほしい」

「私がこの人を撃つて、あなたに何か都合のいいことでもあるのでしょうか？」

一瞬、依頼人が沈黙した。

「依頼人の事を聞くのはタブーじゃなかったのか」

「そうでした。これはご無礼を」

「数週間後に正式な独立宣言を郊外でやるらしい。やるならその時だ」

「ほう、女王自らが？」

ダイスの目が細くなる。

「ああ。絶好のチャンスだ」

「ふむ・・・」

ダイスはしばし、テーブルに置かれた紅茶に目を落とす。

「いつもとパターンが違いますね・・・」

ダイスの暗殺パターンは大胆でシンプルかつ確実だ。

ターゲット

標的は貴族や金持ちが多いので、いつもダイスは使用人として住居に忍び込み下調べをしたうえで、隙を見て暗殺する。そうするほうが確実で、しかもばれにくい。その結果、ダイスは標的のほとんどもを近場で、しかも一人でいるときに暗殺している。

ターゲット

しかし、今回の依頼は王族の暗殺。先ほど依頼人が言ったように、演説会で女王が姿を現しているときに遠くから狙撃する形で暗殺するのは、失敗したときのリスクは高い。

「やりにくいですね・・・」

ダイスは一人ごちた。

「出来るだろう。もちろんこの依頼が君のいつもの仕事のパターンと違うのはもちろん知っている。しかし私は君のあの噂を聞いた上で、依頼をしているんだ」

「・・・」

「『神眼』 君が狙って撃った銃の弾は、今までで一度も外れることが無く狙い通りに当たる。そう噂されている君の腕なら今回の仕事もこなせるだろう」

「もちろん、この依頼はきちんと受けますよ」

「報酬は払う」

「私は報酬のために働くわけではありません、人の役に立つために働いています」

依頼人は首をかしげた。

「暗殺で人の役に？」

「おかしいですか？」

ダイスは当たり前のように言った。

「私は昔から銃で人を撃つことしか教えられていません。しかし、それで人の役に立てれば意義があるというものです」

「・・・」

「私は存在意義が欲しい。だからこの仕事をしています」

依頼人はダイスの言葉に背筋を凍らせながらも、尋ねた。

「では、どこかの裏組織に身をおいて、専属の暗殺者として働けば

いいのでは？そのほうがこうやって個人に依頼されるより安全だ」
「そうするには少々遅すぎました」

ダイスは即答する。依頼人にはその言葉の意味がわからない。

「どういう意味だ？」

依頼人がそういうと、ダイスはどこに忍ばせていたのか、コンパクトミラーをテーブルに立てかけた。

「？」

依頼人は不思議に思い、コンパクトを見る。ダイスはそれを確認すると、ゆっくりコンパクトを傾けた。鏡に近くビルの屋上が映る。

そこには、数荷の男がライフルをこちらに構えていた。

「これはどういう・・・？」

「あの者たちは私を狙っています。この前の仕事の標的の遺族か部下でしょうね。いや、もしかしたらその人たちに雇われたのかもしれない。」

ダイスはコンパクトを閉まった。

「これで私の言った言葉の意味をわかっていただけましたか？」

ダイスは眼鏡を押し上げる。

「暗殺者というのは、自分の打った弾の数だけ自分の命を狙われているのものです。どこかの組織に入り安全を得るのは、今からではすでに遅すぎます」

「つまり、どこにいても危険なものには変わりはないと？」

「ええ。実際毎日数回派手に襲撃されていますからね・・・返り討ちにしましたが」

ダイスはふっとため息をついた。その様子を見た依頼人はしばらく何かを思案していた様子だったが、やがて口を開いた。

「つまり、組織にいいようがいまいが安全に変わりは無い。ならば組織に身をおいてもいいわけだ。ならば、組織に身をおかない本当の理由は・・・」

そこまで言ったところで、ダイスは人差し指を立てた。

「それ以上はいいでしょう。深入りすると私はあなたを死体にしないで
なくてはなりませんよ」

依頼人はダイスンの言葉の内容よりは、その声音に恐怖を感じ、口
を閉じる。

ダイスンはそれを見ると、紅茶を口に運ぶ。

「私はただのしがない暗殺者です。私に屋根の下は釣り合いません」
ダイスンは紅茶に映る自分を見て言った。

*

*

「いま、どこへ向かっている？」

ヒサギはハンドルを切りながら助手席に乗る主人^{オーナー}に尋ねた。

「ん？撮影現場」

「いや、そうじゃなくて地理的にどこら辺に向かっているのかと聞
いている」

「ふふん、内緒。あ、そこを左ね」

「内緒？」

ヒサギは苦々しく聞いた。心なしか運転が乱暴になっている。遠心
力^{オーナー}で主人の体が右に揺れる。

「いまから詳しいことを説明しておくよ」

主人はのんきに路上で買ったホットドッグをほおばりながら言った。
まだ食うのか。

「ふあふあふいふいふあふあん・・・」

「待て待て待て。言っていることがわからない。まずは飲み込め！」
「ふお・・・」

主人はホットドッグをゴクンと飲み込む。音が聞こえてきそうなほ
どだった。

「まずは今からシナリオの最終調整のために会議を開くんだ。その
ときに君のことも説明しようかと思ってね。以上」

「ひとつも『詳しく』ない」

「まあ、行ってみればわかるけど、ひとつだけ忠告」

「なに？」

オナ主人は、少しの間を置いて言った。

「何があつても君は口出しをしないこと、以上」

「たいそうな忠告」

そういいながらもヒサギは特に反論はしなかった。

金だけの仕事こなせばいいか……。

そういつてヒサギはハンドルを切る。

そして、場所の名前がわからない目的地に到着した。

車を降りた二人は、どこかわからないビルの中に入った。ただ、

二人が招かれざる客ではないということは、ビルのスタッフが二人
オナというか主人に挨拶をしていることでわかった。

相変わらずビルにいても鹿撃ち帽と英国風のベストという格好は浮
ディアストーカーハットく。ヒサギはなるべく他人を装って歩いた。

二人はエレベーターで二階に上がり、多目的室の前に立つ。

「あ、言つてなかったんだけどね」

オナ主人は唐突に言った。

「なんだよ」

「今日の会議は秘密保守のために誰にも知られずに開いているから、
そこら辺ヨロシク」

「ひとつ言いたい」

「ん？」

「そんなに秘密裏ひみつりにしたいなら、格好は慎んだほうがいいんじゃないのか？」

「いま、なぜか失礼なことを言われたような気がするよ、ヒサギ君。」

「

「事実なんだ。しょうがない。私だって横で歩いていて恥ずかしい」

「ほめ言葉として受け取っておくよ」

「……無理してそう言つても、褒めてないからな」

ヒサギがそういうと、主人は思いつきり頬を膨らませた。

主人がドアを開けて会議室に入ると、中は異様に張り詰めた空気だった。

六人が席に腰掛けている。いずれもその殆どは老人に近かったが、その中で一人は若い男性であった。

一番に目立ったのは、長い長方形のデスクの中心ともいえる席に、質素だがヒサギの給料ではとても買えそうに無いドレスを着た、いい意味で高貴な、悪い意味で高飛車な印象を受ける美しい女性だった。

席にいる女性の後ろで、これまた老人の執事が直立不動で建っている。

ヒサギは自分が明らかに場違いな存在だということを悟った。人々の視線が痛い。

「やあやあ、全員ちゃんとお揃いで」

この張り詰めすぎて破裂寸前の風船のような空気に針を打ち込むように『監督』が声をかけた。

お年寄りの一人がそれに答える。

「たいそうな出勤だな、若い『監督』さん。君がいなければ話が始まらないのだがね」

「そうあせらなくても僕は来たから話は始められますよ」

主人がそういうと、老人は黙った。

「さて、変な挨拶は無しにして本題に入りましょうか」

主人は鹿撃ち帽をテーブルにおいて言った。

どうやら自分たちは遅刻したようなのに超マイペースな口調の主人にヒサギはハラハラした。

おい、大丈夫かこの空気……。

「もう、予告の日まで時間がない、『監督』はどういう考えをお持ちなのか」

会議開始早々、席から一番遠い老人が主人に畳み掛ける。すると、

ほかの老人もすかさず言う。

「そうだ、このまま手段を投じなければ、女王の命はすでになくなつたも同然！」

「我々に指示をくれなければ意味が無い」

ヒサギは小声で主人オナーに言う。

「なーんか・・・話がまったく見えないんだけど」

「今、目の前に座ってらっしゃるのは、女王の役をやる女優さんとその執事さん。その周りの老人さんはまあ・・・映画の核心のシナリオをせかす映画のスタッフたちね」

「まだシナリオが出来ていなかったのかよ！」

「うーん、主人公がどうやって暗殺者から女王を守るか・・・そのトリックのシナリオを決めてなかったんだけどね」

「あほ！それで映画が成り立つか！急かすのも当然だ！」

「てへっ！」

主人オナーのその言葉にヒサギは殴ってやりたくなったが、何とかそれを我慢する。

金の分の仕事だ、仕事！

「で？そこのお若い男は誰だ？」

「ああ。女王の護衛を任されている護衛部隊の隊長・・・の役の人」

「回りくどい・・・」

二人が小声でそんな会話をしていると、後ろから燕尾服を来た男が紅茶を持ってきた。

「今度は誰だ？」

「あれ・・・君は誰だったかな？」

主人オナーが不思議そうに男の顔を見た。その目は灰色をしている。

「私は、女王の家事全般を任されている執事でございます。この度はこの会議で給仕をしろとの命令を女王から受けました」

「・・・なるほどね」

主人オナーは納得したのかしていないのかわからない口調で言った。

「監督、聞いておられるのか？」

老人が切羽詰った声で言う。

「ああ、シナリオですね……。一応、頭の中では考えがあるのですよ」

主人は砂糖をたっぷり入れた紅茶を飲みながら言った。

まったく、能天気な……。

ヒサギはあきれる。

「では申されよ」

さつきから時代がかった口調の老人が命令に近い形で言う。

しかし、主人はこう言った。

「いえ……。僕はこのシナリオを当日までここの誰かに公表するとはありません」

一瞬の沈黙。そして……

「何ですと!？」

いきなり老人たちは騒ぎ出した。

まあ、当然だな。シナリオを話さないんだから。

ヒサギは再び、主人の言葉にあきれ返る。

「私たちは、あなたの指示通りに行動するためにここにいるというのに!」

「女王様をどうお守りするつもりか!」

「いえ……。『当日』に女王様は出てきてもらいますよ」

「なんだって!？」

そこに反応したのは若い護衛隊長……。役の人だった。

「私たちだけでは当日に警護しきれないからあなたに依頼をしたというのに!女王自らが壇上に上がるなど、危険すぎる」

「あ、それなら大丈夫」

あまりにも能天気な口調で主人は言う。

「は……?」

言葉の意味を理解できない護衛隊長……。の役者。

「これでわかったかな?ここで君の出番だ」

主人はヒサギに小声で言う。

「どうして私なんだ!？」

ヒサギが小さく叫ぶ。

しかし主人は、『^{オーナー}どうしてそんなことがわからないのか』という視線で言った。

「君がスタントをするんだよ、女王の」

なるほどね・・・。

ヒサギはやつと理解した。ほかの老人や護衛隊長は二人の小声の会話にきよとんとしている。

しかし、仕事の内容がわかったのにイライラするのはなぜだろうか・・・。

^{オーナー}「主人・・・」

「なんだいヒサギ君」

「一発殴っていいか？」

「・・・君はなかなかいい勘をしている」

「は？」

わけがわからない。

「まあつまり、女王の役をしている女優さんがあまりにも危険な演技が出来ないから、そのために君がいるわけ」

納得はいつたが・・・。

「その『危険な演技』^{オーナー}ってなんなんだ？」

ヒサギが聞くと、主人は意味深に笑うだけだった。

*

なかなか、今回の邪魔者は個性派ですね。

クラウド・ダイスンは、紅茶の準備をしながら、そう思った。

彼の視線の先には、二人の人間 ^{ディアストーリーカーハット}英国風のベストに鹿撃ち帽を被った青年、そして、銀の髪に蒼い眼をした美しい女性（性格は美しいかどうか微妙だが）が映っている。

彼はいつもの暗殺パターンに則って、使用人を装って女王に接近し

ている。

そのおかげで、女王が何時に演説のために壇上に上がるか、どこが一番狙いやすいか、などをすぐにわかることが出来た。

しかし、ひとつ誤算もあった。なぜか自分が女王を暗殺しようとしていることが女王を始めとする側近たちに漏れているのだ。確かに抜かりは無かったはず。誰が洩らしたかは知らないが、国は女王の暗殺を阻止するために誰かを雇うことになった。

しかし、まさかこんなに若い二人を雇ったとは・・・。

経験の浅い彼らでは、暗殺などという静かで速やかな犯罪は阻止しにくい。正直ダイスンは二人をかわいそうだと思っていた。

しかし、紅茶を彼・・・『監督』と呼ばれている青年に差し出したときに考えが変わった。

この人・・・出来ますね。

おそらく、そう考えたのは本能に近い。

その考えの通り、『監督』は暗殺を阻止する方法を発表することは無かった。おそらく、盗聴されているのを見越してそうしたのだろう。その判断は見事にあっていたわけだ。隙が無い。

女性のほうはあの『監督』が連れてきたから、只者ではないだろうが、状況をいまいち飲み込めていない様子だった。

まだ自分の正体を疑うものはいない。いつも通りにやれば、大丈夫です。

ダイスンは自分にそう言い聞かせて、紅茶を片付けた。

*

*

「まったく、お年寄りのわがままというのは困ったものだね」

車に乗り込んだ早々、主人はそう愚痴をこぼす。

「・・・」

それを聞いたヒサギはなんとも複雑な表情で言い返す。

「まったく、監督のわがままというのは困ったものだ」

「・・・」

今度は主人^{オーナー}が押し黙った。

「もつと仕事の内容を詳しく話してもらいたいものだ、『監督』？」

「つまり僕のわがままに困っていると言いたいんだね、君は」

「・・・」

主人^{あんた}意外に誰がいるって言うんだ！？

ヒサギは心の叫びをハンドルにぶちまけた。プップー、とクラクシヨンが鳴る。

主人^{オーナー}はヒサギの言葉にかなり不満げらしかった。しかし、言っていることは全て真実なのだからしょうがないとヒサギは開き直る。

「とにかく、私にも自体が飲み込めるように説明をしてほしい」

「では、物分りの悪いヒサギ君のために僕が行おうとしている撮影のシナリオを説明しよう」

主人^{オーナー}はえっへんと胸を張って言う。

立場的に優位になった瞬間に八つ当たりか！

ヒサギはうんざりしながらハンドルを切る。主人^{こいつ}のレベルは五歳の生意気な幼稚園児と一緒にだ！

「一応、僕が考えたシナリオは簡単に言うところだ。ヨーロッパの小国の独立宣言演説に女王自らが立つことになった。しかし、そこに女王暗殺の噂が立つ。なぜ、秘密裏に行われる暗殺が噂になったのかは知らないが、とにかく、国は暗殺をそのまま実行させるわけには行かなかった。そこで！我らが主人公、ハードボイルドな探偵に事件を依頼するんだ！探偵はいつたいどうやって暗殺を阻止しようというのか、そして、どうやって犯人と暗殺の依頼者を追い詰めていくのか！そこが僕の映画の見所だね」

「でも、その肝心な見所のトリックはまだ考えていない、と・・・」ヒサギがすかさずそう言うと、主人^{オーナー}はすぐさま反論する。

「あのねえ、僕だってシナリオは頭の中にあるんだよ！しかし、動くには慎重にならなきゃ・・・」

「慎重？なんで？」

「いや、ちよつとね」

怪しい・・・。

この男はきちんと映画を完成させる気はあるのだろうか？ふとそんな考えが頭をよぎる。もしくは、シナリオは頭の中にあるといっておきながら、全然話が浮かんではないのではなか？ありえる話だ。そう思ったところで、ヒサギは今までで一番引つかかっている疑問をぶつけた。

「そういえば、肝心の主人公の役は誰なんだ？」

「ん？ああ、探偵ね。ふふん、それは見てのお楽しみと行こうよ」
なるほど、そこもまだ考えてはいなかったんだな・・・。

「楽しみに、ねえ・・・」

「とにかく、君は僕が指示するスタントをこなしちゃってくれ。そんなに難しくは無いうつよ」

「それだよ！」

ヒサギは叫んだ拍子にハンドルを思いのほか強く切ってしまった。
主人の頭が窓にぶつかり、『はぎや』という奇声を上げた。

「なんだよ急に、運転が荒いなあ・・・」

主人は頭をさすりながらぶつぶつ言う。

「私はいったい誰のスタントをするんだ？」

「さっき言ったじゃないか、女王のスタント」

「それ、嘘だろう？」

ヒサギは間髪いれずにそういった。

「・・・なぜそう思うんだい？」

主人はほんの少しだけ驚きの混じった声で言った。

「勘！」

ヒサギは即答した。

「・・・なるほど、君はなかなかいい勘をしている」

「それ、さっきも言わなかったか？」

「言った」

「そのせりふを言うということは、嘘なんだな」

「うーん、当たり前からずも遠からず、かな・・・」

「は？」

主人は腕を組む。

「もちろん、君にはスタントをやってもらうが・・・」

「誰のスタントだ？」

「・・・」

そこまでヒサギがいうと、主人は視線を落として微笑した。ヒサギの角度からは鹿撃ち帽のせいで主人の表情がわからなかった。

ヒサギは、なぜかこのときだけ主人に恐怖を感じた。彼の微笑は何か恐ろしい悪戯を考えているときの幼稚園児そのものだ。

ここまで来てヒサギは、この男と一緒にいると自分に災難が降り注いでくるような気がして、思わず背筋が凍った。

いきなり自分の家に不法侵入したと思えば、いきなり小切手に好きな金額を書かせるという破天荒な行動をし、幼稚な態度しか見せないと思えば、背筋も凍るような微笑を浮かべる謎の人物 主人。

まったく、変なやつに仕事を依頼されてしまった・・・。

しかし、プロのスタントマンであるヒサギは、どんな依頼を受けたとしても一度受けた仕事を『途中で降りる』という選択肢は存在しなかった。

最後にヒサギは独り言のように言った。

「まったく、しゃきつとしてくれよ。主人」

それを聞いた主人は一瞬だけヒサギを見ると、すぐに視線を移してフツ、と微笑した。

それはさっきの恐ろしい微笑とは相反して、キザで幼稚な微笑だった。

「しかし、これで全てのキャスティングが終わったわけだ。しっかりと仕事をしてくれよ、ヒサギ君」

「誰に言っているんだ。私はプロのスタントマンだぞ？」

「はは、頼もしいねえ」

そういった後、ヒサギの切ったハンドルで、再び主人は窓に頭をぶ

つけた。

「いっただあ！」

「大丈夫か・・・この監督」

撮影開始！

2、クランクイン 撮影開始

ピリリリリリリ・・・

携帯電話は疲れも知らず先ほどからずっとなり続けている。しかし、その携帯の持ち主はというと、その音を止めようとする気配はまったく無い。

ピリリリリリ・・・

「・・・」

ピリリリリリ・・・

「・・・」

ピリリリリリ・・・

「・・・だあ　！しつこーい！」

携帯の持ち主　ヒサギはベッドから飛び上がって携帯を取った。

「はい！！」

かなり怒気を含んだ声で電話に出る。

「グッドモーニング！いやー、いい朝だね」

電話の相手は、オーナー主人だった。

「あほ！今何時だと思っているんだ！まだ日も昇っていないのにいい朝かどうかはわからないだろうが！」

「・・・」

「・・・」

少しの沈黙の後。

「おお、そうか！」

オーナー主人がそうだったのでヒサギは頭が痛くなった。

「だいたい、電話のコールが十回以上なっても相手が出なかったらいったんあきらめろ！まったく！今何時だ！？」

「そちらの時間で午前四時」

「『そちら』？」

「今すぐ飛行機でイルア王国に来て」

「今私がどこにいるか知っていて言っているのか？」

「ハリウッド」

「何時間かかると思っている？」

「だからこの時間に電話をしたんじゃないか」

「・・・」

ヒサギは黙って眉間を押し当てているが、それが見えない主人はオーナーお構いなしに話し続ける。

「もう次の便で予約取つといたから。今すぐに発つてね。切符とパスポートはおそらく郵便受けに入っていると思う。こっちに着く頃にまた連絡するから。何か質問は？」

「ノー」

「それはよかった。じゃあ待つてるよ」

プツッ、ツー、ツー・・・

ヒサギが携帯のディスプレイを見ると、通話時間は一分となっていた。

それからのヒサギは忙しかった。まず洗面所に飛び込み、朝の支度をした後、郵便受けから切符とパスポートを取り出す。

「あいつ、いつの間にパスポートを作りやがった・・・？」

そうプツプツ独り言を言いながら、ジャケットを着る。一応ボストンバッグに必要最低限の日用品を入れてアパートから飛び出した。

「おい、次の便って何時間後だ？」

ヒサギは切符を見てみると、午前四時五十分あと・・・四十六分。

「私の車じゃ間に合わないじゃないか！！」

そう悪態をつきながら駐車場に言ってみると・・・

「・・・」

いつも車がおいてあるところに、なぜか赤のフェラーリがおいてあった。

「誰のだ？」

近づいてみると、運転席の正面の窓にメモが挟んであった。

『どうせ君の車じゃ間に合わないから、この車をプレゼントします。鍵はもう差し込んであるよ。貧乏性の君のことだからもう一度強調するけどこれは『貸す』んじゃないくて、『プレゼント』です。これをあげたからにはちゃんと予定の便に乗ってください。』

オーナー
主人 』

それを読み終わる前にヒサギは赤いフェラーリに飛び乗っていた。

＊

「いやいや、まさか本当に予定通りに付くとは思っていなかったよ」
イルア国際空港に着いたヒサギの前に主人^{オーナー}が待っていた。

彼はカップのコーヒーを片手に悠長に手を挙げて言う。

ヒサギはもうすでに何回わいたか分からない殺意を再び秘めながらも、言う。

「聞かせてもらおう。なぜこの時間に私をたたき起こして、ここま
で呼んだんだ？」

「そんなの決まっているじゃいか。撮影だよ撮影。今日から撮影開
始^{イン}だよ、ヒサギ君」

「そんなの当日に言わないで事前にここに呼べばよかっただろうが
！」

「そんな細かいことはいいいじゃないか。まったく、最近の若い子は
キレイやすいんだから」

「あんたは爺さんか？」

「その言葉より、もっとほかに言うことはないのかい？」

「・・・」

ヒサギは一瞬沈黙する。何を言えいいかはわかっているが、主人^{じいじ}を相手に言いたくないのが本音だ。

「・・・フェラーリをどうもありがとう」

嫌々、言うヒサギ。

「うむ、よく出来ました」

頭をなでようとする主人をすかさずヒサギは手で払う。

殴り倒したい・・・。

ヒサギはボストンバッグに鈍器を入れなかったのを後悔した。

*

*

「お嬢様、お呼びですか？」

イルア城、最上階の女王執務室。

そこにいる女王が呼び鈴で執事であるダイスンを呼び出した。

「紅茶を入れてくれませんか」

女王はしきりに何かの手紙を読み返しながら言った。

「かしこまりました」

ティーセットを執務室に運び、そこで直接紅茶を淹れる。

「今日はいよいよ演説会ですが、準備のほうは上々ですか？」

ダイスは紅茶を待つ女王に暇が出来ないように話しかけた。

「そうですね、執事長がよく仕事をしてくれています」

ダイスはいつも女王の横にいる老齢の執事の顔を思い出す。老いを感じさせない引き締まった顔に直立不動の姿勢。執事の鏡といってもよかった。

しかし、今日は彼の姿が見当たらない。

「今日は執事長はおられないのですか」

「ええ。今日、執事長 ルイスはどうしても演説のことではなければならぬことがあると言って、今日は別行動を」

「だから私を呼んだんですね。いつもなら彼に紅茶を頼むでしょう」

「あら、私は紅茶を飲みたいときはいつもあなたに頼んでいるのですが。紅茶を淹れるのはあなたが一番うまいと思いますよ」

「これは失礼しました・・・恐縮です」

ダイスはポットから紅茶を注ぐ崇高な香りが執務室に広がった。
「どうぞ」

ダイスがそう言うと、女王は手紙を置いてそれを受け取る。

「今日、私が城にいない間、あなたはどんなさるのですか？」

「私ですか？夜の仕込みのために買出しに出ようかと思いますが」
「・・・」

ダイスは、女王が平凡な話題を出しながら、しきりに手紙に視線を移していることに気づいた。

「その手紙の主を、あなたはぜひぶん大切に思っているんですね」

ダイスは失礼を承知でそう切り出した。

すると、女王はお約束のように顔を赤らめた。

「べ、別にそういうわけでは・・・」

「いえいえ、私が言うのは失礼かと存じますが、その手紙はおそらくあなたの心の支えになるような大切な手紙なのでしょう。もしや、許婚ですか？」

ダイスは、前半を本気で、後半を冗談で言って見せた。

すると女王は、真剣なまなざしで少し顔を伏せた。

「大切な人というのは、意外に近くにいるものなのです」

「はあ」

「あなたには大切に思う人が存在しますか？」

「いや・・・私は」

ダイスは女王の予想外の質問に正直返事に窮した。

暗殺者に大切な人など・・・。

「今日の紅茶も最高です。ありがとうございます」

「お褒めに預かり光栄です」

ダイスは空になった紅茶にお変わりを注いだあと、ティーセットを片付けて執務室を出ようとした。

そのとき、コンコン、執務室の豪華なドアがノックされたかと思うと、外からくぐもった声が聞こえた。

「女王様、『監督』と名乗る方が謁見を望んでおります」

ダイスンの目が光った。

『監督』。国が暗殺阻止のために雇った謎の人物。

「入りなさい」

女王は特別気負った様子もなく、自然体で言った。

ドアが開け放たれ、外から案の定、例の青年と美しい女性が入ってきた。後者はやけにラフな格好だ。

女王のほうへ歩いていく二人に対し、ダイスはまっすぐ出口へ向かう。

ダイスは立ち止まって軽く会釈する。

ディアストーカー

『監督』は、鹿撃ち帽を軽く摘んだ。その時、一瞬だけ視線が合う。彼の黒い目を見たダイスは、一瞬だけ自分の正体がばれたのではないかという錯覚にとらわれた。

まさか。

ダイスはその考えを振り払い、執務室から出て、ドアを閉めた。

*

*

「いやー、こんな演説直前に手間を取らせてしまつて申し訳ないです
ねえ」

ディアストーカーハット

オーナー

鹿撃ち帽を手に持った主人は申し訳なさを微塵も感じさせない声で言った。

「挨拶はいいです。用件だけをおっしゃってください」

女王はあまり二人の来訪を喜んではいなかった。そっけなく言う。

「では、用件だけ」

オーナー

主人は一瞬だけ間を置き、言った。

「今日の演説、スタントを使います」

「・・・？」

女王は首をかしげた。

「スタント・・・とは身代わりを使うということですか？」

「そういうことですね」

「誰が？」

「それは言えません」

「その女性ですか？」

「・・・」

しばらく、二人の間に火花が散った。

「それは出来ません」

女王はぴしゃりと言った。

「なぜ？あなたの命が危ないのに？」

オナ主人は女王を心配するよりは、女王の言葉に興味を持った様子で聞いた。

「演説を聞く国民と隣国には、私の声を直接届ける必要があるのです」

「ほほう、それはなぜ」

「決まっています。私以外のものが演説したら、隣国はこの国の独立をどう思うでしょうか？『重要な独立宣言の演説に国の主君が現れない国』というレッテルを貼られてしまいます」

「ふむ・・・」

オナ主人はあごに手を当てた。考える風なしぐさをしているが、ヒサギには答えがわかってるのに考える振りをしているようにしか見えなかった。

「もちろん、スタントですから姿かたちもそっくりに変装しますよ？」

「いずれはばれるでしょう？」

「演説内容はあなたの言おうとしていることをそのまま言います。

いや、むしろ『声』だけはあなたが出せばいい」

「・・・」

「あなたは命を狙われている。それを忘れていませんか？」

「私には優秀な護衛がいます」

「ほー、あの若い護衛隊長が仕切る護衛部隊ですか」

「・・・」

女王はそこで始めて表情を変えた。

「あの若い人がうまく部隊を動かせますかね？」

「彼を馬鹿にしようというのですか！？」

女王は立ち上がった。

ヒサギは正直驚いている。まさか、この程度のからかいに怒るとは。それを楽しんでいる主人もどうかと思うが。

「いえいえ、ただ僕は演説内容が決まっているこの演説で、わざわざ命を狙われるのを知っていてあなた自らが現れなくてもいいのではと申しているのです」

「・・・」

「どうです、僕に全てを任せてみませんか？そうすれば、演説も成功させ、暗殺犯と暗殺を企てた『黒幕』も突き止めて見せましょう」

「・・・」

「どうします？」

＊

＊

二人は執務室から出た。すかさずヒサギが主人^{オナー}に叫ぶ。

「今の会話はなんだったんだ？」

「え？」

「暗殺とか、身代わりとか、これは映画なのにやけにリアルじゃないか。『監督』であるあんたが、主人公みたいなのをしていいのか？というか、今のは撮影だったのか？」

「うーん、今のは最後のリハーサルだね」

「リハーサル？」

「そう、まだ主人公の俳優が到着していないんだよ。だから、僕が主人公のセリフを代わりに言っただけで最後のリハーサルをしていたって訳だ」

「やけにリアルだったな」

「それが僕の映画の醍醐味」

なんか怪しいな・・・

ヒサギはそう思ったが、自分は無事にスタントを遂げられれば言い訳で、映画がどうなるうが関係なかった。

「はたして、そのリハーサルに私は必要だったのだろうか？」

「ちよつと僕の映画の雰囲気になれて欲しかったんだ。そろそろ君の出番だし」

そんな会話をしているうちに、二人は城から出た。

「さて、そろそろ君にも仕事をしてもらわなきゃね」

オーナー 主人は立ち止まった。

「何をすればいい」

「アクションシーンのスタントだ」

オーナー 主人はそういうと、ヒサギに細長い棒のようなものを放り投げた。

ヒサギがそれを受け取ると、ずしりと重い感触がする。

布の中に入っているそれは 真剣だった。

「こんなのを何に使うんだ？」

「ちよつと殺陣たてのシーンをやってもらいたい」

オーナー 主人はそういうと歩き始める。

「ここで演説のシーンをする」

そういつて主人が立ち止まったのは、広場だった。

直径百メートルほどの広場、真ん中には演壇がある。

かなりの人間がごった返している。ヒサギはここにいる全員が演説を聞く聴衆のエキストラだと思った。

広場を一步出ると、周りには目もくらむような高いビルが建っている。広場はビル街の中にあつた。イルア国は王国といえど経済は発展しているようだった。

「女王は暗殺者に狙われていることになっている」

「私は何をすればいいんだ？どこで撮影をする」

ヒサギが聞くと、主人は先日見せたあの微笑を浮かべた。

「撮影場所は決まっている。撮影内容は・・・ここまで言えばもう

わかるだろう？」

*

*

「まさか、実行日の当日にまで会うことは無かったのではないのですか？」

ダイスはカフェの席で自分の前に座っている男に対して言った。

男は、フードで表情の見えない依頼人だった。

「あなたと会うには今日はあまりにも危険すぎると思うのですが」

「私もそう思った。だが、一つ君に言っておきたいことがあった」

男は言う。なぜかダイスはその声をどこかで聞いた覚えがあるように思えた。

「なんですか？」

「この暗殺計画に、厄介者が潜んでいる」

ダイスは即座にあの二人組みを思い浮かべた。

「ああ、国が雇ったというあの二人なら問題ありませんよ。何かと若いし、見ていると別に私の仕事を邪魔できるようには見えませんか」

「・・・君が誰のことを言っているかは知らないが厄介者は別だ」

ダイスはその言葉に目の色を変える。

「誰なんですか？」

「いま、一人の人物が裏組織を何個も壊滅させているという事件は知っているな」

「はあ、聞いたことはありませんね。聞くからにはその人物に対して何の情報も無く、壊滅させられた組織もその姿は診たことは無いらしいですね」

「ああ、その人物は姿が見えない静けさと、裏組織だけを壊滅させる探偵のような行動から『裏探偵』と呼ばれている。その実態はまったくの謎だが・・・」

「なんでも、噂ではFBIとか、CAIの一員かもしれないし、どこかの国の人型ロボット兵器だという説もありますね・・・ばかばかりですが。それがどうかしましたか？」

「潜んでいるんだよ、裏探偵が。この国に」

依頼人は声を潜めて言う。

「はあ、何のためでしょうね？」

ダイスは興味もなさげに言った。

「もしかしたら、この暗殺をかぎつけてきているのかも知らない。

裏探偵に目を付けられたら最後だ。くれぐれも気を付けてくれ」

「私には、なぜ暗殺のことが外に漏れたのか自体疑問ですね。誰が洩らしたのでしょうか？」

「もう君の近くに潜んでいるかもしれない。大丈夫か？」

「今のところは心配ありませんよ。国が雇ったあの二人がまさか裏探偵だなんてありえません。第一、裏探偵は姿を見せないから『裏』なのですから、あんなに人前に姿を見せることはしないから、裏探偵じゃありません。もし潜んでいたとしても、私はプロです。必ず成功させます」

「それを聞いて安心したが・・・頼んだぞ」

「仰せのままに」

ダイスは優雅に一礼した。

*

*

「さて、僕も準備に掛かりますかね」

オーナー主人は静かにそういうと、広場の屋台アイスクリーム屋さんの店員に話しかけた。店員は、ひげを蓄えて、がっちりとした体格のおじさんだった。

「おっちゃん！特大アイスクリームの三段重ねをひとつねー」

「お、兄ちゃん、あれを食うのかい。腹壊すぜ」

「僕の胃袋は四次元ポケットだよ、おっちゃん」

主人は底まで言うつと声を潜めて店員に顔を近づける。

「それと、例のやつ。頼むよ」

それを聞くと、今まで笑顔だった店員の目が一瞬だけギラツと光った。しかし、すぐに人懐こい笑みに戻る。

「はい、特大アイスクリーム三段重ね！」

「うわ・・・でけ・・・」

主人が苦笑いをしながらそれを受け取ったとき、広場の上空に白い花火が上がった。

ついに、独立宣言の演説が始まったのだ。

＊

＊

現在、演説は滞りなく進んでいる。プログラムによると、女王が現れるのは各大臣の挨拶後、今から二十三分後。

ダイスンは頭の中で現在の状況を整理しながら絶好のチャンスを図っている。

双眼鏡を覗くと、現在は三人目の大臣が挨拶をしていた。挨拶のたびに聴衆から歓声と、時にどよめきが広がる。

ダイスンは現在、広場周辺のビル街のうち、一番背が高いビルの屋上にいた。ダイスンはこの場所がバレないという自身があった。まさか暗殺者が、一番狙撃の難しいとされる、広場から一番遠いビルにいるなど誰が想像するだろうか。

ダイスンは燕尾服のままの格好で、細長いケースの鍵を開ける。

なかには、ライフルの部品が収まっていた。わざわざ、完成した状態でなく、組み立て前の部品の状態で。

この特製ライフルは、部品を細かく分解して持ち運ぶことで、はた目からはライフルだとわからなくしてある。

もちろん、一般人に組み立てることは不可能。ライフルを普段使っている者でも、組み立てることは不可能だ。

もちろん設計図は存在しない。組み立てられるのはダイスンだけだ。

彼は頭の中に設計図が入っている。

しかし、このライフルは欠点があった。組み立てに時間が掛かることだ。

ダイスンが最速で組み立てても五分掛かる。

組み立てが終わると、ダイスンは肩の力を抜いた。ライフル（これ）を持つている時間は出来るだけ短いほうがいい。

時計を見ると、女王が現れるまで十分を切っていた。

ダイスンはひとまずライフルをおいて、静かに目を閉じる。

現在の天気、快晴。湿度、二十七パーセント。風向は南西。風速は秒速二メートル程度。狙撃に支障なし。

彼の銃の驚異的な命中率は、もちろんうでもあるが、やはり、周囲の状況、特に天気や湿度を計算して狙うことによってなせる業だった。

そうでなければ、『神眼』という異名が付くはずも無い。

「さて・・・さっさと終わらせますか」

ダイスンはライフルを構えた。スコープを覗くと、斜め上から壇上が覗ける。

距離はおよそ六百メートル。チャンスは一回、外れればすぐに演説は中止になるだろう。

ダイスンはライフルの安全装置をはずし、音の量を小さくするサブレッサーを付ける。

同時に、壇上から女王が現れるところをスコープ越しに確認した。

彼女はしきりに笑顔を振りまき、演説に望んでいる。

ダイスンは狙いを定めた。演説時間はそう長くない。もたもたしているとチャンスを逃すことになる。

スコープに女王の顔が映る。

悪く思わないでください。私は依頼されただけです。

そう思いながら、ライフルの引き金に白い手袋をした自身の手をかける。

呼吸を整え、止める。が・・・

スコープ越しの女王と、目が合った。

馬鹿な・・・！

女王が、決して向けるはずの無いビルの屋上のダイスンに向かって笑顔を振りまいている。

こちらの存在に気づいている・・・？まさか、ありえない！

ダイスンはもう一度呼吸を止める。

ダイスンとて、^{ターゲット}標的がこちらを向いたぐらいで引き金を引けないほど、暗殺者として落ちぶれていなかった。

引き金を引く。

少しの振動と共に、弾丸が吐き出された。サプレッサーのおかげで音も最小限に抑えられている。

しかし・・・

「きゃああ！」

当たったのは、壇上に置かれた花瓶だった。聴衆の誰かが悲鳴を上げる。

・・・はずれた？

女王は、いまだにスコープ（こちら）側を向いている。弾が当たった様子はない。

なぜだ・・・？確かに狙いはあつたっているはずなのに・・・？

広場はパニックになった。女王は壇上に立っているが、護衛に保護されるのは時間の問題だった。

ダイスンはどうにかして呼吸を整え、ライフルを構えなおした。もう一発だけならまだ間に合う。

しかし、一瞬だけある考えがよぎった。

まさか・・・弾除け？

もしかしたら、あの二人のうちの誰かが女王にうまく変装しているかもしれない。もし、変装したとしても弾丸が当たらなかった理由に説明が付くわけではなかったが、みすみす壇上に本物の女王を立たせるわけがない。女王自身はどうしても自分で立ちたいといって

いたが、やはり、直前に二人が女王に謁見したのは、身代わりを申し出る相談だったのか。体系からして、おそらく変装しているのは銀髪の女性だろうか？

いや、ありえない。この期に及んで身代わり？かたくなに身代わりを出すのを嫌がっていた女王が、いまさら弾除けなど準備するものか？

さまざまな考えが頭をよぎる。やはり一番の謎は弾が当たらなかったことだ。今までの経験で撃った弾が当たるか外れるかは一寸の狂いも無くわかるはずなのに今回は外れた。

しかし、考えている余裕も無かった。身代わりでも女王を撃つ機会を逃してしまう。

もう一度ライフルを構える。

しかし、後ろに猛烈な殺気を感じた。

「・・・」

ダイスは固まった。

まさか、気づかれましたか・・・？

ダイスは恐る恐る振り返る。

「・・・」

ダイスは息を飲んだ。

そこにはあの、銀の髪の美しい女性が立っていたからだ。

*

*

ダイスのいる屋上に着いたヒサギは、目の前に燕尾服を着た女王の執事と名乗る人物が一人だけいるのを確認した。

おいおい、カメラやスタッフが一人もいないじゃないか・・・。

まさか、あの執事が暗殺者の役なのか？

そう思いながら、ヒサギは主人と別れる、^{オーナー}少し前の会話を思い出した。

「撮影内容は・・・ここまで言ったらもうわかるだろう?」

^{オーナー}主人はあの微笑を浮かべながら言った。

「つまり、私が・・・女王が暗殺されるシーンで、スタントをすればいいんだな?」

^{オーナー}ヒサギが言つと、主人はチツ、チツ、チツ、と指を振る。

いちいちキザな奴。

「女王のスタントをするのに、その刀は必要ないでしょ?」

「違うのか? てつきりそうするものかと・・・」

「さっき言っただろう? 殺陣^{たて}のシーンをやるって」

「いったが・・・どうして殺陣を・・・?」

「君がスタントをするのは、女王じゃなくて、主人公の探偵」

「・・・」

「理解してもらえたかな?」

「昨日会議の後の車の中であんたが、私が女王のスタントをする、といったのはやはり嘘だったか」

「『当たり前からずも遠からず』、と言ったよ、僕は」

「回りくどいな」

「女王のスタントはする。でも君じゃない。だから『当たり前からずも遠からず』だよ」

「じゃあ、私はほかの撮影現場に行けばいいわけか」

^{オーナー}「そう、物分りがいいね。ちなみに君の撮影現場はあそこ」

^{オーナー}主人はかなり遠くにある、一番背が高いビルを指差した。

「遠い・・・。何でまたあんなところを選んだんだ?」

^{オーナー}「一流の暗殺者は難しい場所を選ぶんだよ」

^{オーナー}主人は小さくつぶやく。

「で、女王のスタントは誰が?」

^{オーナー}ヒサギがそういうと、主人は後ろを向き、演壇を見る。

^{オーナー}「もちろん、弾が当たっても死なない人間だろうねえ・・・」

^{オーナー}主人は目を細めて呟いた。

「は?」

「いや、なんでもない。女王のスタントは・・・」

「どうして、あなたがここにいるのですか？」

その声が、ヒサギの回想を中断させた。

どうしてもこうしても、監督である主人^{オーナー}がここに行けと言ったから来たまでだが・・・。

「撮影だよ。どうしても、カメラもスタッフも、アクションを出す監督もいないけどな。ここには」

「撮影・・・？」

執事が怪訝そうな声を出す。

まさか、こいつ知らないのか？

「今は女王が暗殺されそうになるのを阻止するシーンみたいだが。あんたはすでに一発撃っているようだな。まあ、実弾じゃないだろうし、当たっても女王は本物じゃないんだから、大丈夫だけど」

「本物じゃない？」

執事はかなり狼狽した様子でそう聞き返した。

「なんだ、本当に何にも・・・」

「じゃあ、あそこにいるのは誰なんです！？女王本人でも、あなたでもないとする・・・！」

「『監督』だよ。あの変装は」

「・・・！！」

執事は雷に打たれたようにショックを受けていた。なぜそこまで落ち込むのか、ヒサギには理解し^{オーナー}かねた。

しかし、まさかあそこで、主人自身がスタントをするとは・・・ヒサギは、再度回想に入る。

「いや、なんでもない。女王のスタントをするのは・・・」

「するのは？」

「僕」

「・・・」

「・・・」

沈黙。

「・・・なんで？」

ヒサギはかろうじて尋ねた。

「それが安全だからねえ・・・」

「どうして撮影で監督がスタントなんかするんだよ？実弾なんか使わない。たかが空砲だろう」

「空砲ね・・・。君にも遠からずわかるよ」

「??」

まったくもってヒサギには主人がスタントをする理由がわからなかったが、主人がスタントをするという事実は変わらない。
だが、目の前の執事は、かなりのショックを受けている。

謎だ・・・。

ヒサギの頭の中に疑問符がたくさん付く。

そのとき、しゃがんでいた執事が立ち上がった。

「裏探偵・・・」

執事が呟く。

「なんだって？」

ヒサギは、執事の異様な空気に身構えた。

「謀りましたね、裏探偵」

執事は次の瞬間、懷から拳銃を取り出して、撃った。

まんまと騙されましたよ・・・！

ダイスは、スタントマンと名乗る銀髪の女性が、女王は弾除けに『監督』を選んだと聞いた瞬間、この二人が世間を揺るがす裏探偵と言っ存在だと確信した。

やはり、あの時女王に自分が弾除けになると申し出ていたのですね・・・！しかも、誰も聞かれない場所で！

しかし、やはり謎は残っている。いくら裏探偵と言っても、自分が

撃った弾丸を避けることなど出来ないはず……！

ダイスは、まず目の前の敵である裏探偵のひとり、スタントマンと名乗る女性を始末することに決めた。

ダイスはすかさずふとことから拳銃を取り出し、撃った。
しかし。

「うへえ！？」

スタントマンは驚いたのか、奇声を上げながら、もっていた細長い筒のような物の外の布から、刀を取り出して……弾丸をはじいた！
「なに……！？」

ダイスは戦慄する。

まさか、そんなことが……！？

「何をするんだ！？」

スタントマンはあわてて叫ぶ。おそらく、弾丸を刀ではじくことが超人技だということを知っていた様子である。

ダイスは、ヒサギの叫びを無視し、続けざまに銃を乱射する。

ヒサギは再度刀を振り、撃ってきた銃を次々と跳ね返す。

「いったいこいつは何者です！？」

ダイスは戦慄した。この世にこんな人間が存在するとは……。

ダイスは、銃を撃つても刀ではじくなどその美女にあせりを感じていた。銃を乱射してけりをつけようかと思っていたが……。

カチン、と弾が切れて引き金の引かれる音だけがむなしく響く。

「あなたは……あなたはいったい何者です？」

ダイスは静かに聞いた。

「それはこっちのセリフだ！いきなり撃つてきやがって……」

それは撃つでしょう！暗殺の現場を見られたのですから！

ダイスは、つい声を出したくなった。

「ここで撮影が行われると聞いたのだが……一向始まる様子がない。撮影現場には執事しかいないし……。まさか、あんたが暗殺者の役を……？」

「は？」

ダイスは思わず抜けた声を出した。

何を言っているのです？この娘……。まさか、裏探偵流の相手を錯乱させる方法なのでしょうか……？

「何を行っているかは知りませんが、あなたが、私が撃つところを見た以上、生かしておくことは出来ません」

ダイスは再び銃を構えた。

「待て待て待て！」

ヒサギは再度銃を構える執事をみて、何とか状況を整理したかった。

「まて、これは撮影じゃないのか？」

「まだ白を切りますか、裏探偵？」

「裏探偵ってなんだ？」

「とにかく、これは撮影などではありません。私は本気であなたを撃とうとしています」

「撮影じゃない？どういうことだ？これは映画じゃないのか？」

そういうと、執事はものすごく驚いた顔をした。鳩が豆鉄砲を食らうとはこのことだ。

「あなたは、何をおっしゃっているのです？ふざけているのですか？」

「ふざけてなんかいない！いたって真剣だ！」

「……」

執事はヒサギの剣幕に黙ったが、ヒサギはかまわずに続ける。

「私はスタントマンだ！『監督』に言われて、ここで撮影のスタントをやってくれと……」

「……」

こんどの執事は哀れみの表情になった。

「あなた……誰に騙されたかは知りませんが、この演説も、暗殺も、全て現実の出来事です。その……大変申し上げにくいのですが……あなたは状況をかなり飲み込めていないようです」

「……」

今度は、ヒサギが黙る番だった。彼女はがっくりとひざをつく。

「わ、私は・・・主人あいつに騙だまされていたのか・・・？」

ヒサギの背後に、殺気だったオーラがたつ。

オーナー主人、許せん。

「とにかく、私は退散させていただきます」

「待て」

ヒサギは去ろうとする執事を鋭く呼び止めた。

「いくら私が騙だまされていようと、暗殺者をみすみす逃すほど、私は馬鹿じゃない」

「・・・」

執事の目も真剣になる。

「つまり、私を捕まえると？」

「そうだ」

ヒサギは刀を構える。

と、そのとき。

「ヒサギ君・・・あれ？」

屋上の入り口から主人オーナーがひょっこり姿を現した。

「あれ・・・まだお取り込み中のようにだったかな・・・」

オーナー主人はばつが悪そうに頭を引っ込めようとする。

オーナー「主人・・・」

ヒサギは殺気の含んだ口調で名前を呼んだ。

ダイスは、ヒサギの注意がそれたその瞬間を見逃さなかった。

脱兎のごとく、屋上の入り口に向かって走り出す。

オーナー「あ、主人！逃がすな！」

「ほえ・・・？」

オーナーダイスは、主人に威嚇射撃をしながら、退かせる。

オーナーチュイン、といくつかの弾丸が主人のそばスレスレに当たる。

「うつ・・・」

コンクリートを撃ったことで巻き上がった粉塵が、主人オーナーの目に入る。

「主人！」

その間に、ダイスンは姿を消していた。

ヒサギは主人に駆け寄る。

「おい・・・大丈夫なのか？」

「う・・・ぶ、ぶふぁ！コンクリートのカスが口に入ったぁ！」

「・・・心配した私がバカだった」

「それより、暗殺者は？」

「逃げられたよ」

「そうかい・・・」

主人は立ち上がる。

それを見たヒサギは、深いため息をついた。そして。

ジャキツ。

「じゃき？」

ヒサギが、主人の首筋に刀を向けていた。

「ぎゃー！何すんのヒサギ君！？」

「さあ、これがどういうことか、説明願えるか・・・？これは、撮

影でもなんでもないんだろう？」

主人は、もしここで白を切り『いいえ』と答えれば、自分の命がな

いのはいやでも良くわかった。

「・・・てへっ」

とりあえず、ごまかす。

「・・・」

ヒサギに睨まれた。

主人は肩をすくめる。

「とりあえず・・・カフェで作戦会議と行こうか・・・」

主人の映画撮影事情

3、主人の映画撮影事情

「で？」

ヒサギが鋭く叫んだ。その視線の先には、ティーカップを揺らす主人^{オナー}がいる。

主人^{オナー}が選んだカフェは、静かで洒落た場所だった。全体的に穏やかな雰囲気^{オナー}が醸し出されている・・・ヒサギの席以外は。

「今から私の質問に答えてもらおうか」

そういうヒサギのオーラは、カフェの雰囲気とことごとく離れている。

「はい・・・」

主人^{オナー}はちからなく答えた。こんなところで蛇に睨まれた蛙の気持ちを味わうとは。いや、あるいはメデューサに見られ、石にされた哀れな者たちの気持ちか。

「まず、あんたは何者だ？正直に、答えるように」

ヒサギは『正直に』のところでかなり口調が強くなる。主人^{オナー}は帽子を脱いで言う。

「僕は誰だと思う？」

「知らん、詐欺師か？」

「違うよ」

「じゃあ何だ？」

「説明しづらい」

「さつさと・・・」

そういつてヒサギはテーブルを叩く。ドン、とティーカップが数ミリか浮いて、ガシャンと鳴る。

「答える」

「・・・」

オィナ
主人はこんなところで主人に怒られる犬の気持ちを体験した。首を引つ込める。

「その・・・僕は探偵を生業としていまーす・・・」
力なくいう。

「探偵だと?」

「はい、そーです」

「やはり監督じゃないのか!」

「さようで」

「・・・」

「・・・」

「続きは?」

ヒサギは短くいう。

「その・・・僕はそんじょそこらの探偵と違って、『裏探偵』という名で仕事をしていまーす」

「語尾は伸ばすな」

「はい・・・」

ヒサギは盛大なため息をつく。

「で、その『裏探偵』というのは、どんな探偵だ?ほかの探偵と何が違う?」

「僕は主に、表に姿を現せない裏社会に属する組織や、おおっぴらに動けない国家などを依頼者として扱っています、はい。そこが普通と違うでしょ?」

オィナ
主人はちよつと得意げになる。

「・・・で?」

しかし、ヒサギはそれを黙殺する。

「僕は、裏組織が主に顧客ですから、おおっぴらには自分の姿をさせないわけだね。だから、人前には必ず変装して現れる。誰にも本当の姿を見せない。さらに、その依頼の内容も口では公表できないようなものばかりで、ICPOとか、警察にも目を付けられているわけでした姿を現せないわけですよ。で、僕は変装して依頼を

受けるわけで、僕の本当の姿は誰も知らない。それで『裏探偵』と呼ばれてるわけです、はい」

「じゃあ、あんたが監督で？これが撮影って言うのは、全て嘘・・・」

「『当たり前からずも遠からず』」

「はあ・・・」

ヒサギは、一年間の疲労がどっと押し寄せてくる感覚に陥った。手を額に当てて脱力する。

「次の質問だ。なぜ私を騙してまでこの問題に巻き込む？今までの状況と交えてひとつももらすことなく、自分の知っていることを全て説明しろ」

「この仕事は、僕にイルア王国がひとつの依頼を持ってきたことから始まったんだ」

オナナ 主人は、そう前置きをして切り出した。

「イルア王国の独立宣言の演説が行われる時期に伴って、女王の命を狙っているという噂が出始めた。その噂が本当なら、おそらく暗殺者は演説のときに暗殺をするだろうと思って。それを阻止するために国は僕を依頼した」

「ひとつ質問」

ヒサギは席にふんぞり返りながら手を挙げた。

「はい、ヒサギ君」

オナナ 主人は、教師口調でヒサギに言う。

「イルア王国は、あんたを『裏探偵』と知った上で、あんたに依頼したのか？」

「おそらく、知らなかったと思う。実を言うと、この事件は僕から近づいたんだ」

「は？」

「僕はイルア王国に暗殺の危険があると聞いて、『監督』を名乗って僕に依頼をしないか、と誘ったんだ」

「だから国の大臣はみんなあんたを『監督』と呼んでいたのか・・・」

なぜそんな回りくどい名を・・・」

「それは・・・ねえ・・・」

オナ
主人は口ごもった。

「・・・まあいい。続きをはなせ」

「具体的な依頼内容はこうだ。女王を暗殺者から守るために具体的な対策案を練って、それを実行してほしい。つまり暗殺を阻止してほしい。そして、暗殺をけしかけた奴、つまり暗殺者の雇い主を明らかにする。実にシンプルな依頼だ」

オナ
そういうと、主人は紅茶を口に含む。

「僕が練った作戦はこうだ。まず、暗殺者が女王を狙うのは演説のときだと確信していた」

「一番、狙いやすいからか。」

「そう」

「しかし、もうすでにまわりが、女王が狙われることを知っている時点で『暗殺』とは呼べないけど」

「ごもつとも」

「・・・」

馬鹿馬鹿しい。

『・・・』のなかにヒサギのそんな感情が主人^{オナ}にひしひしと伝わってくる。

「とにかく、僕は、来る演説会^{きた}に向け準備をした。まず、この仕事は一人では無理と判断した。女王を守るのと、暗殺者を追い詰めるのは一人じゃ無理だからね。そこで・・・」

「私に白羽の矢が立ったわけか・・・」

ヒサギが苦々しいいながら主人^{オナ}を睨む。

「その通り！」

オナ
主人はそんなヒサギの視線などまったく気にせずに、パチンと指を鳴らした。

「そこで、僕は君に協力を頼もうとしたんだが・・・君はプロのスタントマンだ。僕が暗殺阻止の手伝いを依頼したところで、君は承

諾してくれないと思った」

「・・・」

「君はスタントの依頼以外うけないでしょ？」

「まあ・・・」

「そこで、僕はこの一連の事件を全て『映画の中の出来事』と信じ込ませて、その映画のスタントを依頼するということにした」

「つまり、詐欺まがいのことをした」

ヒサギが、ケーキを食べていたフォークを主人^{オーナー}に指した。

「どう取るかは勝手だけど」

主人はヒサギが指したフォークをやんわりと手で払う。

「だから、あんたが依頼を受けるとき、わざわざ大臣に『監督』と名乗っていたわけか。そうしたほうが、私がいるときでも大臣たちと話しやすい」^{オーナー}

今なら、なぜ主人^{オーナー}がヒサギに会議のときに口を出すなといったのが納得できる。ヒサギが喋って、変なばろが出ないように黙らせていたのだ。

「今、彼らは君のことを僕の助手だと思っている」

「都合のいいことにな。あんたは両方を二重に騙していたわけか。

私には、自分を『監督』だと名乗り、この事件を映画のシナリオだと思わせ、スタントの依頼をした。女王側には、自分が『裏探偵』

だということを隠し、私をあんたの助手だと思わせた。実に巧妙に」

「そゆこと」

主人は何皿目になるかわからないケーキをほおぼる。

「では、次の質問だ」

ヒサギは、いつになく真剣な口調で言った。

「あの女王の執事は何者だ？」

「あの執事君が、暗殺者だ。あれは裏社会でも名を連ねる有名なスナイパーだね。銃を使わせて右に出るものはいないだろう」

「おい、そんなやつと鉢合わせになるのを知ってて私を屋上に行かせたのか？」

ヒサギは思わず立ち上がる。

「まあ、それはおいといて」

主人は『小さく前へならえ』のしぐさをして、その両腕を右に動かし、『それはおいといて』のしぐさをする。

「何がおいというた・・・」

ヒサギはしぶしぶ座る。

「彼は『神眼』という異名を持つ指折りの暗殺者」

「神眼・・・？」

「神の眼。彼の撃った弾は外れたことがない。その命中率にちなんでの名だろうねえ・・・今回はその名にそぐわず、弾丸は外れたみたいだけど」

主人ことともなさげにそういった。

「そこだよ！」

ヒサギは叫ぶ。

「どうして、『神眼』と評されるやつの撃った弾丸が外れた？いや、それ以前に、なぜあんたが女王のスタント・・・じゃなくて、身代わりになった？スタント・・・身代わりという面では、同姓の私のほうが女王に化けやすかった！」

そう畳み掛けるヒサギに、主人は微笑する。
その瞬間、ヒサギは戦慄した。

ああ、またあの笑みだ・・・。

*

*

まったくの誤算です・・・。

ダイスは裏路地に身を隠しながら、冷や汗を流す。

まさか、ありえないと思っていたあの二人が『裏探偵』とは・・・。

ダイスは、これからどうするかを悩んでいた。仕事が失敗した今、

やるべきことが彼には思い浮かばない。

「しくじったな、『神眼』」

背後から声がした。

ダイスは歩を止める。

「ああ、あなたですか」

ダイスは極力冷静にそういった。

ダイスのこと言葉に、陰に隠れていた依頼人が一步踏み出た。相変わらずフードのせいで表情が見えない。

手には拳銃が握られていて、その標準がダイスにぴったりと定められている。

「なんだか、状況が物騒ですね」

声ではおどけているが撃たれたときのために全身の緊張を高める。

「どうする？これで女王を始末する機会が皆無だ・・・どう責任を取る」

「さて・・・どうしましょう？」

「このまま私が、君を撃つて警察に突き出せば、暗殺未遂ということとで、刑務所暮らしか、最悪死刑だが」

ダイスの額に汗が流れる。

「何をおっしゃいます？あなたが撃つたら私は警察に突き出される前に確実に死ぬでしょう」

「まあ、そうだ」

「今すぐ撃たないってことは、何か私に言いたいことでも？」

「・・・」

そういわれた依頼人は、静かに銃を下ろす。

「最後のチャンスだ。裏探偵を始末して来い」

「いつになく命令口調ですね」

「そんな無駄口を叩く余裕があるのか？」

「・・・たしかに」

「実質君も、彼らに邪魔をされて失敗したわけだ。彼らを殺^やれば、ひとまず今日のことは不問にする」

「寛大な判断、どうも」

そういうと、依頼人は影のように消える。

「ふー・・・」

ダイスンは肩の力を抜いて、大きく深呼吸をする。

あのひと
依頼人は何者ですか・・・？

ダイスンはひとまず、眼鏡をはずして眉間をつまむ。

「まったく、どれもこれも私の判断ミスですかね・・・」

そこには、『どれもこれも、裏探偵のせいだ』という念が込められていた。

「とにかく、あの二人を・・・撃てばいいのでしょうか？」

静かに一人ごちると、彼も影のように消えた。

＊

＊

「答える。あんたは何を考えている？」

ヒサギは、微笑をしたまま答えない主人オーナーに静かにそういった。

「・・・では、質問を変える」

ヒサギはあきらめて紅茶に口を運ぶ。三年分の疲れがどっと押し寄せてきた。

「私がない間、あんたが身代わりで出ていた演説会はどうなった？」

「『神眼』の撃った銃弾が外れた後、演説会はパニックになった。

そこで護衛の人たちがまず、僕　つまり女王を避難させて、その後
に大臣と、ギャラリーを避難させた。つまり即座に中止したという
わけだね」

「なるほど」

「そこで君のところへ駆けつけた」

「いや、『邪魔をしに来た』」

「・・・」

ヒサギの言葉に、冷や汗をかきながら紅茶をすする主人オーナー。

「・・・捉え方は人それぞれだね」

「開き直るな」

すかさずヒサギが言う。

「じゃあ、説明してもらおうか？『神眼』の銃弾が外れたわけを」

「あのねえ、自分で自分が仕掛けたトリックを話すのは禁忌タブーなん」

「さつさと言え」

ヒサギは主人オーナーの言葉を遮って、猫も逃げ出すような鋭い眼光を向けた。

「・・・はい、しゃべります・・・」

主人オーナーでさえもその眼光に耐え切れない。

「僕は、撮影のためにビルに向かった君と別れた後、アイスクリーム屋さんに寄ったんだよねえ」

「アイスクリーム屋？」

ヒサギは、主人オーナーの予想外の発言に思わず間の抜けた声を出した。

「また話を枝道にそらそうとしているか？」

「違うよ」

主人オーナーはあわてて首を横に振る。

「アイスクリーム屋さんに特注のドライアイス製造機を貸してもらった」

「ドライアイス？」

再びヒサギは眉をひそめる。

「また・・・なんで」

「まあ聞いてよ。僕はそのドライアイス製造機を暗殺者がいるビルと、演壇の間を丁度はさむビルの屋上にせっちんぐする」

「セッティングだろ」

「そうそう。そうするだけであら不思議。『神眼』が撃った弾丸は僕には当たらないってわけだよ」

「なぜだ？」

「今日の気温は高かった。ただでさえ僕と暗殺者の間にはむあんと

した熱い空気が張り詰めていたのに、そこにマイナス70度の大量なドライアイスの冷氣が吐き出されたら、どうなる？」

「温度の違う空気の層が出来る」

当然という風に答えるヒサギに、その通り！と主人は指を鳴らした。

「温度差の違う空気の層の中では・・・光は屈折するんだよ」

「・・・なるほど」

ヒサギが神妙な顔つきで答えた。清らかな蒼色をたたえる目が丸くなる。

「つまり『心眼』は、光が微妙に屈折している空間で、微妙に位置のずれた女王、つまりあんたを狙っていたわけだ」

そういうながら、ヒサギはライフルを構えてスコープを覗き込むしぐさをした。

「そう、だが弾丸は直進する」

主人はそういつて、両腕を頭の後ろで組んだ。

「さすがに『神眼』と名の付くスナイパーでも、位置のずれた標的を撃つことなど出来ないだろう」

「なるほどね・・・」

ヒサギは頬杖を付いて主人を見た。先ほどから聞けば聞くほど、この裏探偵はかなり用意周到にこの事態への準備を進めていたのだ。しかも、イルア王国の女王や大臣、ヒサギまでをも利用して。今までも十分怪しかったが、ヒサギは今まで以上に彼に対して警戒心を強くした。

初めて会ったときから彼（彼女？）のことを観察し続けていたが、いまだに特徴という特徴を見せずにいる。

ヒサギには勘というか、ほとんど本能に近い形で、一緒にいる人の性格やしぐさ、特徴（年齢やら家族構成やら）をある程度推理することが出来た。それによって今までに自分の仕事の手助けにもなっていたのだ。ほとんどが金ヅルを見分けるために使っていたわけだが。

だが、今日の前にいる裏探偵と名乗るこの人は、年齢や国籍はおろ

か、性別すらもわからない。一番ヒサギを混乱させているのは、彼の声だった。

声というのは、唯一無二。誰にもまねできない一人一人固有の特徴だ。ヒサギも、少なからず相手の性格を『声』で推理してきた。しかし、主人^{オーナー}の声は見た目の年齢に似合わず静か、というか低いというか、この声で先ほどから幼稚にはしゃぎまわっているのを聞くと、気分が悪くなる。ボイスチェンジャーが掛かっているとでも言おうか、なんだか声の主が彼ではなくほかの人間のものだという錯覚までしてくる。

「あんた、私の前でやっているその姿は、変装か？」

「ん？何でそう思うんだい？」

そういう主人^{オーナー}に、ヒサギは正直に先ほどの『声』に関する自身の考えを話した。

「なるほどねえ・・・やはり君にはほかの人間にはない鋭い勘・・・というか本能が備わっているみたいだね」

「何が言いたい？」

「僕のこの姿が変装なのか？答えは『当たり前からずも遠からず』だね」

「またそれか・・・」

「僕がこの姿を気に入っていることは確かだけど。これだけは言える」

その瞬間、彼は今までに何回か見せたあの微笑をたたえ、言った。

「僕は誰にも自分の本当の姿を見せたことがない、ということだ」

ヒサギは、主人^{オーナー}が見せるこの瞬間だけ、背筋が凍る。自慢ではないが、ヒサギはスタントで培って経験で、恐怖はほとんど感じない感性になっているのだが、彼だけは例外だ。今まで違和感があつた『声』が一瞬だけ自分の声になる瞬間、このときに彼は、今までの人懐こく幼稚な存在とは違い、冷たく、人間離れた遠い存在に見える。

「・・・」

ヒサギは主人^{オーナー}を睨み付けた。

「あんた、自分が何者かはつきり出来ないのか？」

そういうと、彼はどこから戻ってきたかのように急に人懐こい笑みを浮かべて言った。

「無理」

「・・・まったく」

ヒサギは盛大なため息をついた。その姿さえも一枚の絵画のように美しい。

「これからどうするんだよ。女王の暗殺を阻止したのはいいが、問題は暗殺者の雇い主だ。そいつを抑えておかなければ仕事は完遂しないんだろう？」

「うーん、そうだねえ」

「お客様」

いきなり彼らの会話に割ってくる人がいた。二人が同時にその方を向くと、カフェのウェイターが立っている。

「お客が立て込んでおりますので、そろそろ席を譲ってもらってよろしいでしょうか？」

二人は顔を見合わせた。

外に出て、最初に言葉を発したのは主人^{オーナー}だった。

「僕の考えだと、彼・・・『神眼』はもう一度僕らの前に現れると思うんだ」

「はあ？」

ヒサギは主人^{オーナー}の声にうんざりしたように言う。

「マジかよ・・・」

「さて・・・どうしたものか・・・」

主人^{オーナー}はそういったものの、顔はすでに次の策を講じているという顔だ。とヒサギは思った。

「それで？ヒサギ君はこれからどうするんだい？」

「なにが？」

いきなり話を振られて語尾がいつもより上がる。

「僕が依頼した『スタント』は、実はスタントじゃなかったわけ？」

「私は騙されたわけで」

「しかし一度は『裏探偵』のスタントとして屋上に向かってくれたわけ？」

「・・・たしかに、『神眼』に裏探偵と勘違いされたわけで」

「もう君の仕事は完遂したことになるわけ？」

「・・・何が言いたいわけ？」

ヒサギはうんざりしたように語尾を上げて言った。

「君はもうこれ以上僕の捜査に付き合わなくて言い訳で？これから『神眼』のこともあるし、危険なことも多いわけ？」

「その言い方もいい」

「・・・」

ヒサギの言葉に、次の言葉もその言い方にしようとしていた主人^{オーナー}は一瞬黙り込んだ。

「僕が思うに、君は僕の助手にふさわしい人だからまだいて欲しいというのが本音だけど、これ以上危険なことは押し付けられない。

今ここでコンビを解消して、君はハリウッドにもどるかい？」

「・・・」

ヒサギは今までで一番真剣なまなざし^{オーナー}を主人に向けた。

「それ本気か？」

「うん」

「・・・」

再びヒサギの心の天秤がキイキイきしみながら激しく揺れていた。油を差しておかなかったのをひどく後悔する。

今、ひとつの天秤には『今までかなり主人^{オーナー}に振り回されていたわけだが、当初の目的どおり依頼が終わったらとつと縁を切る』。

もうひとつは『一度受けた依頼を一度は完遂したものの、気分良く終わるために最後まで付き合う』。

「あんたは俳優としてはまだまだだな」

「はい？」

主人は^{オーナー}抜けた声を出す。

「『ハリウッドに戻るかい』とか言っておきながら、私をまだ利用したいって暗に言っているようなもんだろう？素直にまだいてくれって言えばいいものを・・・」

ヒサギは大げさに首を振る。

「さて、どうしたものか・・・」

「・・・」

ヒサギがそういうので、主人は^{オーナー}無言で一枚の紙を取り出した。

「ちなみに・・・」

「・・・？」

「追加報酬は、もつとはずむよ？」

ギシ、バキッ。

ヒサギの天秤が再び音を立てて壊れた。油を指していないせいで派手な音を立てながら。

「乗った！」

ヒサギは主人の手を^{オーナー}がっちり組む。しかし、心では泣いていた。

貧乏性め・・・恨むぞ！

世の中は全て金で動いている。それを再認識したヒサギであつた・・・。

4、『神眼』の暗殺事情

「見つけましたよ・・・」

路地に建っている二人の裏探偵　銀髪の美女と主人と名乗る^{オーナー}青年を遠くで見ながらダイスはつぶやく。

ダイスは店と店の間の細い路地に身を潜めると、取り出した拳銃^{サイレンサー}に消音器を取り付けると、そのまま懐に入れる。

もう一度そつと裏探偵のほうを覗くと、美女が青年から離れるとこ

るだった。青年は一人になる。

これはダイスンにはもってこいの状況だった。銃弾を刀ではじくという離れ業をやって見せるあの厄介な美女がいなくなるとは好都合だ。

青年は歩き出した。それに合わせダイスは動き出す。

ダイスンと裏探偵との距離はおよそ10メートル。近すぎる気もするが、路地に人々がごった返しているおかげで気づかれない。イルア王国は小国で国土面積が狭いわりに、人口密度が高い国で有名になりつつある。もともと複数の国が連合して出来た王国であり、連合する前のそれぞれの国の人口は多かった。

そんなイルア王国の知識を頭の中で反すうしながらダイスは尾行を続ける。相変わらず裏探偵は人ごみの中を自然体で歩き続ける。この余裕、自分が狙われることを知っているのか、知らないのか。無防備なのかそれとも罠か。

ダイスは隙をうかがいながら再び頭の中ではある人の言葉を思い出す。

『暗殺とは常に、ターゲット標的が死ぬ瞬間まで、いや、死んだ後にも自分が殺したと悟らせてはならない。誰にも気づかれずにやれてはじめて暗殺といえる』

これはかつて、ダイスの師匠が言った言葉だ。

もう何十年も昔のことですが・・・。

ダイスは暗殺のいろはを叩き込み、完璧な暗殺者に育て上げた彼の師匠の元から逃げ出した。その後、おつてくると思っていた師匠の消息はぱったりとわからなくなった・・・風の噂では死んだとも聞いている。

あまりにも昔のことで、なぜ自分が師匠の元を逃げ出したかはまったく覚えていない。その後ダイスは雇われ暗殺者になった。名前の知らない誰かから依頼を受け、殺す。師匠がいなくなった後でも彼は師匠の言葉を忠実に守り、暗殺をするときは気づかれぬように使用人に化けて標的と二人きりになったときに静かに殺した。

たとえどんなに遠くからでも弾が当たるその銃の腕と、受けた依頼は失敗せずに完遂することで、彼の名前は通り名と共に裏社会で有名になっていった。

しかし、ダイスンはなぜかひとつの組織の元で雇われる専属の暗殺者にはならなかった。いつしかもう暗殺業でしか生きていけないにもかかわらず、それだけは出来なかった。

その時、今まで人ごみの中を歩いていた裏探偵が、道をそれ始めた。これは格好の機会だ。人ごみのおかげでかなり距離は近かったし、人目がいないところだと銃も撃ちやすい。

前を歩く裏探偵はまだダイスンには気が付いていない様子である。彼はすかさず距離を縮める。ダイスンが懷に手を入れた、その時。

「おっと」

いきなり裏探偵が立ち止まってそういった。

「今握っているものを出さないほうがいいよ」

彼は背中を見せたままそういった。

まさか、また気づかれた・・・？

ダイスンの額に汗が流れる。裏探偵は続ける。

「君がそれ撃つ前に、僕の助手が君を撃つ」

「なんですって？」

助手・・・先ほどの女性とは別れたのではなかったのですか？

ひそかに狼狽する彼に、裏探偵は振り向いていった。

「後ろを見てみなさい」

ダイスンは言われたとおり後ろを向くと、そこにはやはり屋上であった美女が立っていた。彼女は先ほどまで来ていなかったジャケットを着ている。彼女もジャケットの懷に手を入れていて、彼女がジャケットをめくると、黒光りする拳銃が見えた。

まさか、私が尾行している間に、彼女は私を尾行していたというわけですか・・・？

「敵の意表をつくのは探偵学の基礎だね。残念。僕を暗殺するのは無理ってわけだ」

「・・・」

ダイスはまたも完敗した。これでは、依頼を完遂できないで終わる。・・・つまり、それは死を意味した。

「よくわかりましたね、私がつけていることを」

「依頼に失敗したら裏探偵を討つ。これは僕の長年の経験で、一番ありえることだったからさ。今回もそうかなっと思つて」

「・・・なるほど」

ダイスは懐に入れていた手を放した。

「私の負けです。どうします？私を警察に突き出しますか？それともここで殺しますか？」

「答えはどちらもノー。僕が聞きたいのは君の依頼人が誰かということだけ」

「残念ですが、それはお答えしかねます。私は死んでも依頼主のことは喋らないようにしているのです」

それに対してヒサギがあきれて言う。

「さつさと喋ってしまったばいいものを。どうせ私たちが殺^やらなくとも依頼人に始末されるのがオチだ」

「・・・それ以前に気になるのは、君が依頼人を知っているかどうか（・・・）なんだ」

裏探偵が割り込む。

「・・・」

「依頼人が匿名希望さんだったら、答えられないわけでしょ」

「・・・」

ダイスの沈黙を主人^{オーナー}は肯定と受け取った。

「こういうのはどうか？」

主人^{オーナー}は鹿撃ち帽を人差し指で押し上げていった。
^{ディアストーカーハット}

「暗殺なんて陰気くさい方法じゃなくてさ、正面から決闘をしてみようじゃないか」

「はい？」

ダイスは間の抜けた声を上げる。ついでにヒサギも意味がわから

ないといった表情をする。

「君が勝ったら僕は君に関与しない。依頼主に殺されるなり、ここから逃げ出すなり、好きにする。ただし、僕らが勝ったら君は僕らに協力してもらう。君は依頼人の知っていることを話し、逮捕に協力する。悪くない話でしょ？」

「はあ、決闘・・・とおっしゃいましたも・・・」

ダイスは困惑を隠せなかった。この瞬間だけダイスは、暗殺者ではなく普通の成人男性のように見えた。

ヒサギはうんざりした様子で、主人^{オナー}に詰め寄る。

「決闘って、誰と誰がするんだ？」

ヒサギがそういうと、主人^{オナー}はまずダイスを指差して、そしてヒサギを指差した。その瞬間、ヒサギが主人^{オナー}の胸ぐらを掴んだ。

「何で私がそんなことに付き合わなきゃいけないんだ！相手は暗殺者だぞ！一般人の私が太刀打ちできるわけがないじゃないか！」

「・・・」

「・・・」

場になんだか気まずい沈黙が流れた。

きっかり五秒後、主人^{オナー}はてをポンツと打って、

「そうか！君は自分を一般人だと思っていたのか！！」
といった。

「・・・」

その言葉にヒサギも沈黙する。

「普通一般人が、銃で撃った弾丸を真剣ではじき返せますかね？」
そこに畳み掛けるようなダイスの言葉。

「・・・」

放心したようなヒサギに主人^{オナー}はポンツと肩を置いて。

「大丈夫。心配しなくても君は最強のスタントマンだ。暗殺者にも十分太刀打ちできる」

「・・・」

＊

＊

「ルールは簡単。どんな手を使ってでもOK。とにかく相手を倒す。

オナー

主人の声は、裏路地で反射してよく響いた。彼らのいる裏路地は、細い通路がいくつもあって、家についているはしがついている。

地面にはごみもある。

ヒサギは叫んだ。

「その『倒す』っていう基準はどのくらいだ？どこまでやれば『倒した』になるんだ？」

「・・・」

その言葉に主人は一瞬沈黙して、

「相手のライフがゼロになったら」

と言い返した。

わかった。まじめに聞いた自分がバカだったよ。

ヒサギは大きなため息をつきながら、ジャケットのなかにある拳銃を確認した。

そのしぐさを見たダイスンがふざけて言う。

「『一般人』であるあなたが、銃を使えるんですか？」

『一般人』のところでひどく語調が強調されている。そのダイスンのからかいには取り合わず、ヒサギは冷静に言った。

「現代のスタントマンは射撃も必須スキルだ」

「わざわざここまで持ってきたんですか？この国は銃刀法違反の取締りがありますよ？」

「馬鹿、これは主人が無理やり押し付けたんだよ！」

オナー

ヒサギは主人を睨んだ。当の本人は知らん顔だった。目をそらして口笛を吹いている。

「まあいいや。とにかく、あんたを黙らせればいいわけだ」

「銃では私に勝てません」

「それはやってみなくてはわからない」

二人の間に火花が散った。

「はい、用意はいい？」

二人はにらみ合いながらうなずく。

「じゃあ、スタート」

何の休みもなしにすぐさま主人^{オーナー}は言った。

「・・・」

「・・・」

二人は動かなかった。

「・・・主人^{オーナー}、何かもうちょっとため（・・・）みたいなものはないのか？」

ヒサギが言う。

「そう？じゃあ・・・」

しばらくの沈黙。

「スタート！」

その瞬間、目にも留まらぬ速さでヒサギはジャケットから拳銃を抜いたが、その拳銃をダイスンの一発の弾丸が弾き飛ばした。

「・・・はやいつ・・・」

いきなり手持ちの武器を失ったヒサギは全速力で走った。その背後にダイスンの撃った弾丸が当たる。

「リボルバーであの速さかよ・・・！」

リボルバーは本来一度弾丸を撃てば、ハンマーを下げて次の弾丸を装てんしなければならなので自然と連射が遅くなる。しかし、ダイスは目にも留まらぬ速さで連射をしている。しかも、相当口径のでかいリボルバーらしく、どこに当たってもおそらく『倒れる』だろう。

ヒサギは路地の曲がり角の向こうに身を隠した。その後をダイスンが追う。

ダイスンが曲がり角を見ると、そこには誰もいなかった。どこに隠れたのか？

用心して、忍び足で歩いていると、いきなり目の前が暗くなった。はしごにぶら下がっていたヒサギが懸垂のように体を揺らし、上からダイスンを蹴った。するとダイスンのリボルバーが弾き飛ばされる。

「銃がなくなればこっちのモンだ！」

ヒサギは空手の突きやけりをダイスンにかます。しかし、ダイスンはそれらを見事に避けている。

「暗殺は何も、銃だけではないのですよ！」

ダイスンは一本のナイフをヒサギに投擲した。しかし、ヒサギもそれを難なくかわす。

ヒサギの背後でキン、とナイフが壁に当たる音がした。二人の動きが止まる。

「・・・使用人だから投擲武器も銀ナイフだと思ってた」

「ああいうので人を殺せると思いますか？ドラマかアニメの見すぎです」

「確かに。でも私が見たのはドラマでもアニメでもなく・・・」

ヒサギは戦闘体勢を取る。

「映画だ！」

ヒサギは一気に間合いを詰める。ダイスは再びナイフを投擲、しかし至近距離では思ったように投げられない。間合いを詰めるヒサギにダイスは後ずさりして距離をとるが、間に合わない。ダイスはナイフを握ってヒサギに向けるが、ヒサギはダイスの手を握ってひねる。するとナイフはダイスの手を離れ、ヒサギの手に入った。

「あれ・・・？」

ダイスは瞬時にもう一本のナイフを出し、奪ったナイフで攻撃してくるヒサギを迎え撃った。キン！と小気味良い音が裏路地に響く。

「・・・」

「・・・」

二人は再び止まる。二人のナイフはぶつかったまま力チカチと鳴っている。どちらの力も互角だった。

「・・・銃さえなくなればあんたを簡単に倒せると思っていたんだが・・・」

ヒサギがナイフを持つ腕の力を弱めずにそう言った。

「私も、銃を持っている間ならあなたを簡単に倒せると思っていたのですが・・・」

ダイスンも力を弱めない。しかしヒサギはナイフを持った腕を大きく振って、ダイスンと距離をとった。

「・・・」

「・・・」

お互いに一步も引かないが一步も踏み出さなかった。二人はわかっていた。お互いの力量がほぼ互角だということ。

先に動いたのはヒサギだった。姿勢を低め、一気にダイスンに詰め寄る。ダイスンはヒサギが振ってくるナイフをはじきながら後退していった。

しかし、背中にドンツ、と衝撃が走る。壁にぶつかった。

しまつ・・・

そう思った瞬間、ヒサギのナイフがダイスンののど元に突きつけられる。

「・・・これ、私の勝ちじゃないか？」

静かに言うヒサギ。しかし、

「それはどうでしょう？」

ヒサギは腹部に何かを突きつけられた。

「・・・」

それは、ダイスンの握っている拳銃だった。

「まだ銃を持っていたのか？」

「切り札は最後まで取っておくから『切り札』なんでしょうね」

銃はしっかりと装てんされていて、ダイスンが引き金を引くだけで撃つことが出来た。

「・・・」

「どちらも、動くことが出来ない。力量が互角な以上、恐らくヒサギがナイフでのどを切るのと、ダイスンが銃で撃つのは同時なはず。もしここで動けば、共倒れになる。」

「この場合、勝敗はどうなるんでしょう？」

「ダイスンがぼつんと言った。」

「知らん、主人^{オナ}に聞いてくれ」

「・・・」

「・・・」

沈黙。その時。

「そこまでだ」

二人のどちらでもない声が裏路地に響いた。

背後から響いたこの声に、ヒサギは思わず振り返る。

「え」

目の前に広がったのは、銃を持った何人もの男。

「あれ・・・？」

いまいち状況が理解できないヒサギだが、ダイスンはこの声を何回も聞いていた。

銃を持った男たちの後ろから現れたのは、フードを被ったダイスンの依頼人だった。

「なにをやっているんだ？『神眼』とうたわれた腕を持つ暗殺者である君が、こんな裏路地で決闘か？」

依頼人がそういう。相変わらず表情は見えなかった。

「・・・」

答えないダイスンの代わりに口を開いたのはヒサギだった。

「丁度いい。依頼人さんか。今私はあんたを捕まえるために動いている。まさか自分から来てくれるとは好都合だ。だが肝心なときに主人^{オナ}がいらない。どこいったんだあいつは・・・」

「この状況でこんな口を聞けるとは、肝のすたわったお嬢さんだ」
「お、おじょう・・・!？」

ヒサギは憤慨して絶句した。

依頼人は表情のわからない顔をダイスンに向け、言う。

「言っただろ『神眼』。その二人を始末できなければ、待っているのは死だ。チャンスは与えたはずだぞ？」

「あいにく・・・そのチャンスを裏探偵につぶされたんですよ」

「そうか、それは残念だ」

そついうと、銃を持った男たちが近づく。

「連れて行け」

ヒサギはこれを聞いて慌てる。

「ちょ、ちよつと？連れて行くのは二人とも？」

「古今東西、こういう場面に出くわした人間が見逃された例は存在しないんだよ、お嬢さん」

「おい・・・あんたまた私をおじょ・・・うわ！」

ヒサギは最後まで言えなかった。いきなり銃が突きつけられたからだ。

「こういう場合、おとなしく捕まったほうが身のためなのか？」

ヒサギは呟いたが、答える人はいなかった。

*

*

「そもそも、私が先にナイフを突きつけたんだから、私の勝ちに決まってるじゃないか」

倉庫の中というのは、人の声がよく響く。

「なにをほざいているのです？あのかの場合、先に倒したほうが勝ちなので、お互い武器を突きつけたあの状態では、私のほうが早くあなたを倒せました。だから私の勝ちに決まっているじゃないですか」

ダイスの声も、ヒサギには十分すぎるほどよく聞こえた。だが、こんなに近くで声が聞こえるのに、ダイスの表情はヒサギからは見えない。

二人はあの後、どこかの倉庫に詰め込まれ、背中合わせに縄で縛られた。

「なにをいつているんだ？あんたが引き金を引くより私がナイフを振るほうが早いに決まっている」

「自身の腕の過信はいけません。常識的に見てもナイフを腕で動かすより引き金を引くほうが簡単で早いです」

「暗殺者であるあんたに、『常識』という言葉を使って欲しくない」「それを言うなら十分あなたも非常識ですね」

「・・・」
「・・・」

沈黙の後、二人同時にため息をつく。

「どれもこれも、主人が決闘とか言う西部劇のような幼稚なことを思い浮かばなければこんなことにはならなかった」

「それは否定しません。しかし、あなたはそんな裏探偵の一員なのでは？」

「馬鹿を言うな！私は雇われたただけだ！あいつに進んで協力するやつがいたら額をこすりつけて尊敬したいもんだ！」

「・・・私はあなたに額をこすり付けなければ・・・」
「だから違うーう！」

「・・・」
「・・・」

「どれもこれも主人のせいだ」
「・・・」

二人は再び沈黙する。ヒサギはこのとき五年分の疲労をこの短時間で感じていた。

そして、先に口を開いたのはヒサギだ。

「そろそろ、喋っちゃえばいいのに・・・依頼人のことを」

「・・・」

「今から始末されるんだから。喋ってもいいだろう？」

「それは出来ません」

「あんたも頭の堅いやつ・・・」

「すぐそばにいるんですから、自分で確かめればどうです？」

「ふん・・・」

ヒサギは、依頼人の『声』から、ある程度の推理はめぐらせていた。性別は男性、年齢は張りのある声の割りに四、五十代と高齢。常に人に指令を出しているのに慣れている口調から、地位や立場上ではかなり上の人間である。そのことから、依頼人はある程度の『表の顔』を持っている。

しかし、この声は今まで聴いたことがないからなあ・・・

「あんたは、どうして暗殺者なんかやっているんだよ？そんなことをしなくても生計はいくらでも立てられるだろう？たとえば・・・そう、執事とかね」

「私は今までの人生の大半を人を殺して生きていたので、いまさらまっとうな職に就けるとも思えませんね」

「はあ・・・だからあんたは頭が固いつて言ってるんだよ！」

「私は自分にしか出来ないことをすることで存在意義を見出しているのです。誰も私に暗殺の依頼をしにこなくなったら、私は存在意義がなくなる」

「ふん。存在意義に貪欲、てか？」

「はあ・・・一般人ではないあなたには理解が行かないでしょうね・・・」

「あんただって一般人じゃないだろう！っていうか、一般人にも到底理解できないだろう！」

ヒサギがそう叫んだときに、重い扉が開かれる音がした。

二人は言い争いをやめてその音のしたほうへ向く。

外から現れたのは、やはり二人を拉致した依頼人とその部下たちだった。

「さて、最期の会話は終わったか？」

依頼人は二人の前に立つなり、開口一番そういった。

「あいにく、私たちは敵同士なのでろくな会話はしていませんよ」
口を開いたのはダイスンだった。

「そうか、それは残念だ」

すると依頼人は、部下に何かを呟いた。部下は縄で背中合わせに縛られている二人の腕を持つ。

「立て」

そういいながら部下は腕を持ち上げて二人を立たせた。

「どうする？これでは二人ともあの世行きだ。それとも、あんたはあの世行きを望んでるのか？」

ヒサギは挑戦的に言った。

部下は縄を引つ張つて、二人を依頼人の目の前まで歩かせた。

二人は背中合わせに縛られているので、実に歩きにくい。

「今足を踏みましたよ」

「そつちこそ、その高そうな靴が私の靴の上に・・・」

二人は何とか、足がもつれないように依頼人の前に立つ。

依頼人が目の前にいるのにその表情は、いまだにわからない。

「さて・・・」

依頼人は言う。

「どちらから先に死ぬ？」

二人は、目線だけで顔を見合わせる。そして同時に、

「そつちから」

「・・・」

「・・・」

「あんた、依頼が失敗したから死んでもいいんじゃないのか？」

「それはそうですが、あなたより先に死ぬのはごめんです」

二人の間に火花が散る。

「では」

依頼人がそういうと、部下がダイスンの使っていたリボルバーのレ

バーを上げる。

「ダイスン、依頼を失敗した君から死んでもらおうか」
部下はリボルバーをダイスンの額に構える。

「おいおい・・・」

ヒサギは、そういいながら窓に目をやる。

「・・・」

いま、何かが見えた気がした。

「何か言い残すことはないか？」

「・・・」

ダイスンは淡い微笑を浮かべた。

「そうですね・・・『後ろをご覧になられては?』」

そういわれて、依頼人はハッとして、後ろを振り向く。

そこには・・・

「諸君、ごきげんよう」

裏探偵がいた。

*

*

「な・・・なぜここに!?!」

一番狼狽したのは、依頼人だった。

「なぜって、そりゃ・・・君が拉致ったそのスタントマンの銃に
発信機を埋め込んだのは、ほかならぬ僕だからねえ・・・」

「・・・う、撃て!」

「待つて、待つて」

裏探偵はあわてて腕を前に突き出したが、それを止める依頼人では
なかった。

ダラダララ!と弾丸がいつせいに吐き出され、裏探偵に向かってい
く。

倉庫内がホコリで見えなくなるまで撃ちまくった。

「……」

「……」

「死んだか……?」

依頼人は恐る恐る聞く。

「……やだなあ……」

背後で声がした。依頼人はあわてて後ろを振り返る。

そこには、先ほど撃ったはずの裏探偵がダイスンとヒサギの前で立っている。

「僕はこの二人を引き取りに來ただけなのに……」

「な、なぜ生きている!？」

「なぜって、そりゃ……弾丸は数じゃないんだよ。狙い撃ちしなきゃ、当たるものも当たらない。ねえ、クラウド君？」

いきなり話を振られたダイスンは、ハツとしてすぐに答える。

「まあ……そうですね」

「ホコリが舞い上がった隙に回避させてもらったよ」

依頼人は鹿撃ち帽に積もったホコリをはたいて落とした。

「それに……」

依頼人はテーブルに置かれたナイフを持ちながら言う。

「君らごときじゃあ、僕を殺せない」

「なんだと……?」

依頼人はナイフを振り下ろした。二人を縛っていた縄が解かれる。

「それじゃ、僕の助手と重要参考人を返してもらおうよ。死なれたら困るから。ついでに君の顔も拝ませてもらおうかな? 依頼人さん？」

「……」

依頼人はひとしきり沈黙した後、肩の力を抜いてふつ、と笑った。

「君は、ここをどこだと思っている? 敵の陣地にこのこ入ってきて、生きて出られるとでも？」

「あはは! 君こそ、僕を誰だと思っているんだい? 裏探偵たる者が、何の準備もせずにここに乗り込むとでも？」

「なに……?」

「君はサプライズが好きかい？」

そう裏探偵が言った瞬間、依頼人の背後で爆発音が響いた。

「なんだ！？」

一気に倉庫が炎に包まれる。

「爆弾だ！」

「火を消せ！」

部下は一気にパニックに陥った。

「主人！私たちはどうやって出るつもりだ！？」

ヒサギが主人に詰め寄る。

「窓から逃げろ！窓の下に車を置いてある！」

そういつて、主人は窓を指差した。窓の位置は高いが、そこまでに木箱が置かれていて、いけないことはない。

ヒサギが先頭を走り出す。その隙に、奪われていたダイスンのリボルバーと自分の銃を取り返す。その後を主人はダイスンを引っ張りながら走る。

ダイスンは困惑する。

「わ、私は・・・」

「今は僕についてこようよ。何か言いたいことがあるなら、後で言うんだね」

「・・・」

主人が窓の下を見ると、ヒサギはすでにオープンカーのエンジンを入れていた。

「それ！飛び降りろ！」

「うわあ！？」

そういつて、主人は問答無用でダイスンの腕を強引に引いて、ダイスンを窓から放り出した。

「ちょ・・・」

ダイスンが言葉をつむぎ出す前に、背中が車に激突していた。最後に主人が飛び降りる。

「ヒサギ君、出してくれ」

「シートベルトは締めるよ！」

そういうと、ヒサギはオープンカーを走らせた。

「おい、どこに向かえばいいんだ!？」

「あ・・・そこまでは考えてなかった・・・」

「なんだと!？追っ手がもう来てるのにか!？」

ヒサギがサイドミラーを見ると、後台ほどの乗用車が追ってきている。

「君なら追っ手を振り切れるだろう!？スタントマン、ヒサギ君？

これは映画のワンシーンだ！」

^{オーナー}主人は後ろの席でダイスンと身をかがめながらはしゃいで言う。

まさかこれを予想して、行き先をきめなかったのか・・・？

^{オーナー}主人の幼稚さに、ヒサギの額の血管が浮き出た。

「君の力を見せてやれ！」

「なにが『見せてやれ』だ!これは映画じゃない！」

そういつているそばから、サイドミラーが銃で壊された。後ろの車から銃を連射してくる。

「まったく、あっちも映画だと思っているのか!？」

ヒサギたちを乗せた車とその後の車が、倉庫が並べてある道を駆け抜ける。

ヒサギは車をUターンさせ、追つての車と向き合った。

「おい、暗殺者!タイヤを撃つてくれ！」

ヒサギがダイスンのリボルバーを本人に放り投げながら叫ぶ。

「弾が三発しかありませんが・・・」

「ひとつも外れなかったら、三台を撃沈できる！」

「・・・」

ダイスンが主人^{オーナー}を見ると、期待にきらめかせた目をこっちに向けてくる。

「・・・やるしかありませんね・・・!」

ダイスンは席から立ち上がり、リボルバーを構えた。

ダ、ダン！

何の準備もなしに即座に引き金を引いた。ヒサギと主人^{オーナー}には、銃声が二発分しか聞こえなかった。しかし、前を見ると、確かに三台の車のタイヤがはじけ飛んでいた。

「すげ・・・」

「さすが『神眼』」

ヒサギと主人^{オーナー}が思い思いに感想を口にする。

「後の二台はどうするんです！？」

オープンカーと二台の車は向かい合っている。このままでは激突は免れない。

しかし、ダイスンがそう言うや否や、ヒサギはブレーキを思いっきり踏み込んだ。タイヤのきしむ音が鳴る。席に立っていたダイスンは、前につんのめりそうになる。

そして、ヒサギはすぐにオープンカーをバックさせた。

「主人^{オーナー}、しゃがまないと後ろが見えない」

「は、はい・・・」

ヒサギはハンドルを片手に持って、体自体は後ろを向きながら器用にバックを続ける。

バックしながら運転しているはずなのにオープンカーは追っ手の車を引き離している。

「なんで、バック走で車を引き離せるのです・・・？」

「そこらへんはヒサギ君の技術だなあ・・・」

車を十分に引き離れたところで、急にスピンをしてバック走から通常の運転に戻る。

ダイスンと主人^{オーナー}はスピンの遠心力で体が放り出されるのを防ぐのに必死だった。

「飛ばすぞ！」

道から伸びている一本の橋に向かってオープンカーは爆走する。

「僕、酔いそう・・・」

主人^{オーナー}はぐったりしながら呟いた。

＊

「追っ手はもう引き離れたみたいだね・・・」

席から後ろを覗いた主人は安堵のため息と共にそう言った。

オープンカーは先ほどの荒い運転と違って、ノロノロとゆっくりな運転に変わっていた。

しばらくの間、三人は無言だった。しかし、その沈黙を破ったのはダイスンだった。

「適当に降ろしてくれませんか？」

「ん？」

「・・・」

ダイスンの言葉に、二人はそのほうを見た。

彼は、車を止めなければ今にも飛び降りそうな勢いだ。

「ヒサギ君、脇で止めて」

「まったく、私はタクシー運転手か・・・？」

そっぴいながら、ヒサギはオープンカーを滑らかに脇に止めた。辺りに人は誰もいない。

ダイスは車から降りて、直立不動の姿勢で主人オーナーに向く。

「ひとつ、主人あなたに頼みたいことがあります」

「なんだい？」

「・・・私を、殺してください」

「・・・」

「・・・」

耳が痛くなるほどの沈黙が流れた。ダイスンの言葉に、二人とも次の言葉が浮かばない。

「ひとつ、不謹慎なことを聞いてもいいかな？」

主人オーナーが静かに言う。表情はいつもと変わりはないが、声には有無を言わせぬ張りがあった。

＊

「なんでしよう？」

「死にたいのならばなぜ自分でやらないで僕に頼むのかな？」

「自殺では、死んでも死に切れないからです」

「では、なぜ死にたい？」

「私は、暗殺でしか生きていられません。その暗殺に失敗したので
すから、私にはもう存在意義がない」

「依頼人のことも喋らないで死ぬのかい？」

「出来れば」

二人の会話にヒサギは心のそこからあきれ返って手を額に当てた。

「まあ、頭の固いこと・・・」

「ヒサギ君」

^{オーナー}主人はそう言ってヒサギに一瞥をくれることで黙らせた。

「うん、では僕も君にひとつ頼みがあるんだけど？いいだろう、君
の願いを聞き届けるなら僕の頼みごととひとつ聞いてもらっても」

「私に出来ることなら」

ダイスンがそう答えるのを見て、^{オーナー}主人は間髪入れずに言った。

「じゃあ、紅茶を淹れてくれ」

「・・・はい？」

「紅茶。もう一度飲みたいんだけどなあ」

「はあ、でもここにはティーセットも何も・・・」

「車のトランクのなかにあるよ」

「・・・」

「・・・」

これには二人とも絶句した。^{オーナー}

^{オーナー}主人はさも当然という風に言う。

「淹れて、くれるよね？」

「・・・かしこまりました」

ダイスは優雅に一礼した。

ダイスは、車の助手席に座って待っている主人に、^{オーナー}ティーカップ

を差し出す。もちろん、ここにはテーブルなどありはしないので、車のトランクの上で作った。

とつてもティーセットの足場が悪かったですね……。

そんなダイスンの苦勞を知らない主人は、満足そうにティーカップを受け取る。

「今回はロイヤルミルクティーにいたしました。お口に合えば幸いです」

「ふーん……」

主人は興味津々な様子でティーカップをのぞく。

「君も座れば？」

ダイスンは主人そういわれたので、黙って運転席に座った。

主人がティーカップに口を付けた瞬間、「なにこれ、うまつ」と叫んだ。

そして、しばらくは無言でミルクティーを口に運ぶ。

「ところで、僕は君がどんな生活をしてきて、どんな過去があったかなんてまったく知らないから、君が『存在意義』に執着する理由は全く持ってわからないんだけど」

主人はやぶからぼうに一息でそう言った。

「は、はい」

ダイスンは少なからず困惑する。

「だけど、君は暗殺で誰かに頼られなくても、十分に存在意義を見出せると思うんだけどねえ……」

「あなたにはわかりません」

ダイスンは思わず一瞬の隙もなしにそう言った

灰色の目が静かにゆれる。

「私は、暗殺以外に能がない人間です。いまさらそこから抜け出すだの、罪を償うなどの奇麗事には無縁なのです」

「僕はそれが言いたいんじゃないんだ。僕が思うに、君は誰かに頼られなければ怖い、しかし誰かに身を委ねることも怖いのでは？」

「……なにを……」

「君は暗殺を依頼されながら生きている、しかし、ひとつの組織に身をおかない。それは人が怖い、人に身をゆだねることが怖いんだ」
「・・・」

「しかし、誰かに頼られなければ怖い。誰かに身をゆだねるのは怖い。それじゃ、矛盾するではないか。そこに来て僕は、君の過去がこの相反する二つの矛盾を可能にしているのではないかと思う」

オナ主人は、まるで世話話をするかのように言う。そこには『同情』とか『哀れみ』とか、そういった感情は皆無だ。

「君は、心の支えにしていた誰かに裏切られたんだね？」
「・・・」

ダイスの灰色の瞳が大きく揺れた。

「暗殺しか知らなかった君が唯一心の支えにしていた人間。誰だろうねそれは？しかし、その人に裏切られたせいで君は、誰かのためにいたい。しかし、裏切られたショックから誰かに身をゆだねることが怖い。この矛盾したことが起きる。ある意味一種の対人恐怖症ってやつだね」

「やめてください！」

ダイスは今迄で一番荒げた声を出した。

「そんなことはもうどうだっていいのです！あなたが私のことを推理したところで、この生活は変わりはない！そうです、私は自分に疲れたんです！だからもう」

オナ主人は手を挙げてダイスを制した。

「僕は君の事でひとつだけ信じていることがある」

「そんなものはない！あなたは私の気持ちなんか理解できない。今更同情しなさらなくて結構！」

「人の心を理解できる人間なんかいないさ。もし出来たなら、その人はもう『人間』じゃない。僕が信じていることはもっと別のこと」
「なんなんですか？それは！」

「君の紅茶を淹れる腕」

オナ主人はティーカップを目の高さに持ち上げる。

ダイスンは絶句した。口を半開きにして呆然と主人を見る。

「は・・・？」

「どうだい？クラウド君。僕と協力して依頼人にぎゃふんと言わせ
ないか？『私は暗殺ではなくても、存在意義を見出せませう！私は紅
茶を淹れる腕で人に頼られて見せます』・・・って？」

主人は、本気半分、冗談半分の口調で言った。

「・・・」

「それでももし嫌なら・・・しょうがない。残念だが僕は君に引き
金を引くしかない・・・」

ダイスンは無言で、右手で両目を覆うように被せて、うつむいた。
しかし、だんだんと肩が震える。

「ふふふ・・・」

口からは小さい笑い声がこぼれた。

「ふふふふ・・・」

それにつられて主人も笑う。

「あははは・・・」

「はははは・・・」

二人の笑い声はだんだんと大きくなって、ついには二人とも爆笑し
た。

「あははははは！」

「いひひひひ！」

「あははは！あー自分が馬鹿馬鹿しい！あはっははは！」
ダイスンが大声でそんなことを言った。

「いひははは！ははは！はっ、げほっ！」

主人はむせる。

二人の笑い声が誰もいない道路中にこだまする。
車から離れていたヒサギは、その声に銀の眉をひそめた。

「なにやってんだ？あいつらは・・・」

しばらく五分ぐらい、二人は笑い狂った。

*

*

「ヒサギ君、もう車に乗っていいよ!」

「まったく、やっとか!」

やつのことで車に乗ることを許されたヒサギは、運転席に滑り込んだ。

「で?どこに行く?」

「レストラン」

「また食う気か?」

「もちろんそれもあるけど、そろそろこの事件に終止符を打たなくてはね」

「もう暗殺事件の首謀者はわかつているのか?」

「確信はない。しかし、候補は絞り込めた。あとは・・・」

そういった主人は助手席から後ろにいるダイスンを見る。

「君の話を聞かなくてはね、クラウド君?」

「いいですよ。私の知っていることなら全てお話します」

「よし!」

^{オーナー}主人は前に向き直って、ヒサギはエンジンをかける。

「いざ行かん!レストランへ!」

「大げさ・・・」

すかさずヒサギのつつこみが飛んだ。

4 クラックアップ 撮影終了!

「で?」

人がごった返すレストランの中で、ヒサギが不満そうにそう切り出した。

^{オーナー}帽子を脱いでいる主人の目の前には山のように積み上げられた皿が置いてある。

「いつまで食ってる気だ?そろそろ本題に入りたい!」

ヒサギはコーヒーを無造作に置いていった。ガチャン、とカップがなる。

「・・・」

ダイスは無言で放心。葬式の『チーン』という音がBGMで流れていてもおかしくない。

「クラウド君、どうしたの？」

オーナー主人は心配そうにヒサギに聞く。

「人が多いところは初めてで、苦手になったんだと」

「へー・・・」

オーナー主人はようやく最後の皿を置き、ナプキンで口を拭いた。

「さて、作戦会議と行こうか。クラウド君、冥土から戻っていらっしやい」

「・・・はっ！これは、失礼いたしました」

何とか三途の川を逆流して戻ってきたらしいダイスは、ピシッと背筋を伸ばす

「それで・・・あんたはどこまで掴んでるんだ？もう首謀者が誰か突き止めているんじゃないのか？」

「うん。後もう一押しって所。そこで、クラウド君」

「呼び捨てでかまいませんよ」

「ん？そう。じゃあクラウド。君が暗殺を実行するまでの経緯を全て話してくれないかな？」

「はあ、私の・・・ですか？」

ダイスはひとしきり考えたあとに、口を開く。

「まず、暗殺の依頼あなたをされたのが、三週間ほど前だったでしょう？依頼人のことは主人あなたの推理の通り、何も知りません。あの格好ですからかおもわからない始末です。しかし、それが依頼するに当たって彼が提示した条件でしたから、飲み込むほかなかったのです」

ダイスはよどみなくすらすらと喋っていく。

「あの城の使用人として訪れたのが二週間前です」

「かなりすんなりと使用人として登用されたな」

ヒサギがコーヒーを口に運んで言う。

「それは君が一流だからかな？」

「いえ、丁度あの城では最近、使用人が一人解雇されたばかりで人手が足りなかったとおっしゃっていました」

「・・・」

^{オーナー}主人はあごに手を当てる。

「そして、私は女王の身の回りのことを任されました」

「そのときの女王の様子は？」

^{オーナー}主人が即座に言う。

「やはり独立宣言の演説会の準備を忙しくなされていました。しかし、準備のほとんどを執事長と共にしていました」

「執事長・・・私たちが打ち合わせに行ったときに女王の後ろにいたあの爺さんだな・・・」

「そうです。あと、女王はしきりに誰かと文通をしていましたね」

「「文通？」」

二人は声を合わせる。

「いまだき文通ね・・・」

「いや、城の中では携帯が使いにくいのかもね。相手はわかる？」

「いえ。しかし手紙を大事に読んでいらしたので私の考えでは、おそらく大事な人・・・許婚とかそういう人なのでは？」

「ふーん？」

ヒサギが興味なさ気に唸る。その横で静かに目を閉じる主人^{オーナー}。

「依頼人・・・暗殺の阻止・・・失敗・・・始末・・・」

ぶつぶつと独り言をつぶやく主人は、^{オーナー}はたから見れば危ない人に見える。

「うん・・・そうだ、演説会の間取りは？誰がどこに座っていた？」

「間取りですか？演壇は、広場のステージのように段差が上がったところに取り付けられていました。その後ろを連合国の要人たちが一直線に座っており、ステージの段差の下に執事長が立っておりま

した。具体的に要人たちの座っていた場所も言いますか？」

「いや、それはいい」

「しかし、ひとつ気になることが」

「なんだい？」

ダイスは一瞬间を置いて、話し始める。

「なぜあそこまで演説会に自分が出るとおっしゃっていた女王様が、直前になってあなた方に身代わりにをお任せしたのか・・・それが腑に落ちないのです。わたしは、あそこに女王様自身が出てこられることを信じてビルの上から狙うことを決心したのですが・・・」

「いよいよこれは・・・」

そう呟いて、主人はポケットから何かを取り出した。

「それは？」

ヒサギが聞く。

「僕が君たちを助け出すときに、倉庫で落ちていたのを拾ったものなんだけどね？」

主人はそれを二人に見せた。

「カフスボタン・・・？」

「そう。しかも特別な、ね」

そういつて主人は微笑した。そして、立ち上がる。

「よし、いくよ！」

「どこへ？」

ダイスがあわてて問うた。

「もちろん、城へ」

*

*

「わざわざこの城にいらしたということは、一連の暗殺の首謀者を捕まえてきたということかな？」

城に、会議で集まったメンバー全てが集まっていた。そのうちのー

人がそう言った。

「もちろんです」

主人は脱いだ帽子を手でもてあそびながら自信満々にそう答える。
全員が席でどよめく。ヒサギは主人を見てこんなに大見得を切つて
大丈夫なのか、という表情をした。

ダイスは席に着いた人たち全員に紅茶を配った。その後は女王の
後ろで執事長と共に立つ。

「僕は元々、人の前で長たらしく推理を披露することはあまり好み
ません。推理の披露は探偵の自己満足でしかありませんからね。で
も、今回は特別です」

主人はそう前置きをした後、静かに目を閉じて切り出した。

「まず、この女王暗殺計画の首謀者を特定するのは、どんなに頭が
回らない探偵でも簡単なことだということを言っておきます。この
計画は初めから無理が多いといってもいい。それだけは知っておい
てもらいたいですね」

そして、裏探偵は目を鋭く見開いた。

「結論から言います。この一連の暗殺計画の首謀者はあなたですな
？」

全員が裏探偵の視線の先を追う。その先には・・・

「女王陛下？」

裏探偵が諭すように問いかけた。

「・・・」

沈黙が流れる中、ヒサギだけが場違いな声で小さくつぶやいた。

「ええ？なんで？」

裏探偵、表舞台での推理エンディング

「いったいどういうことか？まあ、聞きたいことはたくさんあるでしょうが、今は僕の話の黙って聞いていただけたら嬉しいですね。順を追って話しましょう」

人々の視線が再び裏探偵に注がれる。

「まず、手口を話す前に、なぜ女王が女王自身を暗殺しなければならなかったのか？それを説明しましょうか。」

裏探偵は立ち上がる。

「女王は何らかの理由で死にたかったのではないのでしょうか？いや、もつと正確に言うなら自分が死んだと周りに思わせたかった。そこで考えたのが一連の女王暗殺計画。自分が暗殺され、死んだと思わせるためにこの計画が練られた」

裏探偵は歩き出す。

「ではどうしたら、自分が死なずに女王が死んだと思わせるのか。一番簡単なのは誰かに女王の代わりに死んでもらうこと。いわば、この事件は『女王暗殺計画』ではなく、『女王の替え玉暗殺計画』といったほうがいいでしょう」

裏探偵は部屋をうろろしながらよどみなく喋り続ける。

「さて、長い前置きになりましたが、早速手口を紹介しましょう」
全員が固唾を呑んだ。

「まず女王は、この計画を一人では無理だと判断し、協力してくれる人間を探した。その人は後に『依頼人』になる人です。その依頼人は執事長・ルイスさん・・・あなたですよね？」

「ええ？執事長が依頼人？」

これにはダイスンが驚きを隠せない。毎日顔をあわせている人間が、あの依頼人とは・・・

「執事長が依頼人という根拠はいろいろあります。まず、女王の計画にすんなり協力してくれる人物はあなたぐらいしかいません。ほ

かのお要人に頼んだりしたら、怒られるのがオチですからね。そして二つ目、これは女王暗殺を依頼された暗殺者に聞いた話ですがもちろんここで誰が暗殺者かは言いませんが 依頼人は暗殺者と会話をするときフードを被って表情が見えないようにした。つまり、暗殺者とは一度どこか出会っていて表情が見えたら困る、つまり城の中の人間ということ。そしてもうひとつ、僕と僕の助手・ヒサギ君は依頼者と接触する機会があった。その時の依頼者の声はじめて聞いた声だったんです。城の中の人物で会議のとき声を聞いたことがない人物、それは執事長しかいません。以上の理由で依頼人女王の協力者は執事長と言えます」

裏探偵はしばらくの間、壁に掛けられた絵を見つめた。

「女王はまず、ルイスさんに本物の暗殺者を雇った。またこれが『神眼』と呼ばれる厄介な暗殺者を雇ってしまったわけですね。しかし、死ぬのが女王じゃなくても替え玉に死んでもらわなくてはならなかったから、雇うのは本物の暗殺者でよかったわけですね」
ダイスンが気まずそうな顔をする。

「さて、暗殺者に依頼をした執事長ルイスさんは、今度は女王が暗殺される、という噂を流した」

「なぜそんな回りくどいことを・・・」

ヒサギがそういいかけて、主人が鋭くこちらを見る。
オーナー

「質問は後で受け付けます」

「へいへい・・・」

「暗殺の噂が流れると、これは大変！演説が近いというのに女王に死なれては今までの苦勞がパア！あわてた要人たちは女王に影武者を演説会に出席させることを進言する。しかし、女王は自分が出るとの一点張り。そこで要人は裏探偵を雇った。暗殺をどうにか阻止してくれと」

裏探偵は絵から目を離し、再び聴衆に向き直る。

「さて、どうしても影武者を演説に出さないといい張っていた女王は、演説直前になって僕たちに影武者をさせることに決めた。もち

ろん、ほかの要人や聴衆、暗殺者にすら女王が本物じゃないことは知らない。さて、ここまでは順調」

「ここまで・・・？」

若い護衛隊長が小さくいう。

「ここから計画が大きく狂います・・・なんと、僕たちが邪魔をしたせいで暗殺者が暗殺に失敗してしまったのです」

ダイスンがますます気まずい表情になる。

「もし、暗殺者が狙撃に成功し、影武者が死んでいたらどうしていたか？まず、待機していた執事長が撃たれた影武者に寄り添って女王がお亡くなりになられた！と叫ぶことでしょう。そして、ルイスさんは誰にも協力をさせないで一人遺体を運んだ後、誰も遺体に近寄らせなかった。もちろん司法解剖も断る。女王が影武者だとばれたらまずいでもんね。そして、女王が亡くなったと国中が悲しみにくれているうちに本物の女王を逃がす・・・とまあ、そんな計画だったでしょうね。そのためにいちいち演説会に本来なら必要ない執事長が出席した。しかし、女王の替え玉は死ななかった！」

芝居がかった声で裏探偵は叫んだ。

「内心で女王はあせっていた。替え玉が死ななかったらこの計画はおじゃん。そこで依頼人が暗殺を失敗した暗殺者に『裏探偵を始末しろ』と詰め寄った。そして、僕たちを始末した後にくっきり暗殺者も殺せばいい。しかし、それがあだになった。今僕たちはここで生きているし、あなたがたの偉大な計画も暴露している。どうです？女王陛下？」

「なるほど・・・暗殺の噂が立ち込めているというのに私を使用人としてすんなり登用できたのは、私が暗殺者だと知っていたからなんですわ・・・」

ダイスンが小さく呟いた。

「では、この計画を実行することにした動機はなんだったのか？まあ、それは恋煩いというわけですかね？」

裏探偵はさも当然、といった風に恥ずかしいことをさらりと口にし

た。

「これは僕の推測ですけど、あなた、護衛隊長さんに恋していますね？」

「推測というか、九割方そうだろう。見ればわかる」
ヒサギが追い討ちをかけるように言った。

再び芝居がかった裏探偵の声。

「ああ、どうしてもふたりで一緒にいたいのに、女王という身分のせいで心置きなく喋ることすら許されないのね！」
そして急に真顔に戻る。

「つまり、あなたは駆け落ちをしたいがためにこんな壮大な、無謀な計画を立てた。そうじゃないんですか？女王陛下？」

「茶番ですね」

女王は、裏探偵が言い終わらないうちにそう投げ出した。

「あなたの推理は、我が執事長がその『依頼人』とやらだという仮説の上で成り立っています。先ほどから根拠が曖昧すぎるのです。進んで協力？別に協力するのなら城の人間でなくとも出来ます。適当な報酬を払えばね。フードを被っていた？裏社会に住んでいれば、顔を見せたがらない人間なんてごまんといます。聞いたこともない声？城の中の人間だけでも、聞いたことのない声の人物なんて何人もいますね。演説のときに彼がいた？当然でしょう。私の執事なのですから。あなたは状況証拠だけで私を犯人だと決め付けています」
一気にまくし立てた女王の顔を、裏探偵はニコニコしながら見ていた。

「なにをそんなに笑っているのです？」

女王が鋭く言う。そんな女王の声とは打って変わって裏探偵の声は張りが無い。

「証拠か・・・これがあつたりするんですよね・・・」

「なんですって？」

そういうと、裏探偵はポケットからカラン、と何かをテーブルに置いた。

カフスボタンだ。

「このカフスボタン、王家の紋章が刻まれていますよ？しかもこれ、女王の側近しか付けられないらしいじゃないですか！ねえ、ルイスさん？自分の燕尾服の腕、見てみたらどうですか？」

執事長・ルイスはあわてて両腕 カフスボタンが付いているところを見た。

「・・・右腕のカフスボタンがひとつ無い・・・」

ダイスンが静かに、しかし全員に聞こえるように言った。

「これが、『動かぬ証拠』というやつですか？」

裏探偵が嬉しそうに言った。

「どうです？女王陛下？」

そのとき、誰もがこの裏探偵が王手をかけたと思っていた。しかし・・・

「あーあ。せつかくの計画が・・・」

女王は、まるで別人のように、そう言った。

「せつかく女王という退屈な仕事から逃れて、ハネムーンにいけると思ったのに、ごめんね？」

そういつて女王は護衛隊長を見た。護衛隊長は複雑な顔をしている。

「では早速、お縄を頂戴しましょうか？女王陛下？」

ドスン、と席に乱暴に座った主人はオナーいった。

「ふふ・・・」

すると女王は、座っている全員の目の前に置かれた長いテーブルの上を歩いて、裏探偵に近寄った。カッン、カッン、とハイヒールの音がテーブルの上で鳴る。

お行儀が悪い、と注意する年老いた要人たちも、今は放心したようにその様子を静かに見ていた。

「ねえ、知っていらして、若い探偵さん？この国の憲法を」

女王はしゃがんで頼杖をつき、主人を見下ろす。オナー

「この国では、王族は女王しか裁けないという決まりがあるのよ。」

つまり、女王は女王しか裁けない」

「・・・」

主人はまっすぐに女王を見つめる。

「私が自首しない限り、どんなことも許される唯一の存在なのよ、

私は・・・だから・・・」

そう言つて女王は主人のベストの懷に手を入れた。そこから、サウンドレコーダーを取り出す。

「こんなもので私の告白を録音しても、何も役に立たないの。わかるかしら？ ぼうや？」

女王はサウンドレコーダーをテーブルの上に置いた。そして、再びテーブルを歩いて自分の席に戻ろうとする。

沈黙。ハイヒールの音がしばらくむなしく響いた。

「・・・ねえ、知つていらして？ 若い女王さん？」

沈黙を破つたのは、主人だ。女王の口調をまねて言う。女王は、立ち止まつて怪訝そうに振り向いた。

「この世界には、どんな国家権力も通用しない、独自の権限を持つたIDAという組織が存在する」

「・・・IDA？」

「そう、国際探偵協会、略してIDA。彼らは君のような、国家権力を振り回しておきながら逮捕できない者たちを逮捕できるんだ。

国にも政府にも、どの機関にも属さない権力を持った組織」

「・・・」

女王はいよいよ裏探偵に詰め寄る。その前に主人はサウンドレコーダーをベストにしまった。

「ぼくは、ここへ来る前にIDAの知り合いに連絡しておいたんだよ。至急、この城に来るようにね？」

そういつて主人は窓辺に寄りかかった。外には城の外を埋め尽くすように車が待機している。そこには、IDAとしっかり書かれていた。

主人は窓を開けて、一人の人間に叫ぶ。

「ほら、約束の証拠だよ！受け取れ！」

そういつて、サウンドレコーダーを投げた。受け取ったのは、すらつとしたモデル並みのスタイルに、メガネがクールな印象を与え、そして、スーツがさらにインテリを際立たせる男だった。

「あなた！なにをしたの！？」

女王はあわてて声を荒げる。しかし、すでにとき遅し。

「彼は、トリス・レンブラント。IDAのなかでもゾディアックと呼ばれる指折りの探偵の一人だ。君を逮捕するために来た探偵」

「なん、ですって・・・！？」

女王は怒りで言葉に詰まった。

「ねえ、女王陛下。本来ならこんな簡単な推理で犯人がわかってしまふ事件に、なぜ裏探偵の僕が捜査に乗り出したと思う？」

「う、裏探偵・・・？」

「こんな事件、それこそIDAに任せて、もっと大きな事件を相手にしてもよかったんだ」

ヒサギにはわかった。彼の声がだんだんと鋭く、冷たいものになっていくのを。

「君は、くだらないこの計画のために、替え玉一人を犠牲にしようとしたんだ。それが僕には許せない」

口調こそ、淡々としていたが、そこには静かな炎が燃え上がっていた。

ヒサギはやつと理解した。なぜあの時、女王のスタントを自分にやらせないで、彼自らがやったのか・・・。もし失敗すれば、ダイスの弾丸を受けていたにもかかわらず。

万が一弾が当たっても、自分以外に犠牲者を出さないためだったのか・・・。

「さて」

裏探偵は上着を羽織り、鹿撃ち帽ディアストーリーカーハットを被った。

「ヒサギ君、行こうか」

「もう行くのか？」

「後はIDAにでも任せておけばいいさ。クラウド、君もさつさと辞表を出してしまいなさい」

「は……はい」

裏探偵は颯爽と扉を開け放った。姿が消えるまで一度も後ろを振り向かなかった。

「あ、ひとつ言っておくけど女王陛下？僕は君よりも長く生きている。『ぼうや』じゃないんだ」

かくして、女王とその執事は逮捕された。

探偵であるトリス・レンブラントは実行犯である暗殺者を探したが、すでに行方をくらませていた。

なお、イルア王国は再び分散し、ヨーロッパの各国に吸収された。そのため、現代の人々の記憶からイルア王国の名は消え去っていった。

「……また裏探偵に先を越されたな……」

城で事項処理をしながら、トリス・レンブラントはそう小さく呟いた。

裏探偵は、IDAの中でもうまく情報を把握し切れていない。あの時、裏探偵の姿を見れたのは奇跡といってもよかった。

しかし、僕は彼を逮捕しなければならぬ……。

裏探偵は事件解決のためにさまざまな犯罪をしてきた。不法侵入、銃刀法違反、公務執行妨害など……。

殺人を犯していないのは不幸中の幸いだが、犯罪者を野放しにするIDAでもなかった。しかし、そんなIDAも裏探偵に頼っているのは事実だった……今回のように。

「彼は、いったい何者なんだ……？」

5 エンドロール

人使いの荒い探偵の助手から解放されたヒサギは、今日もフェーリで仕事から帰ってきていた。助手席には新聞が置いてある。見出しは恒だ。

『IDAがまたもや快挙！イルア王国女王逮捕』

手柄がすっかりIDAのものになっているな……。

そう考えながらヒサギはハンドルを切った。アパートの最上階まで階段を使う。しかし、ヒサギの息は切れない。ちなみに、変人に不法侵入されたそのときから、ドアを最新セキュリティのものに変えた。これであいつに入られることも無いだろう。ヒサギは鍵を出してドアを開ける。

ガチャ。

「あ、ヒサギ君。お帰り！」
ボタン！

幻覚か……？いま、忌々しい鹿撃ち帽と、ディアストーリーカーハット燕尾服の暗殺者がいたような……。
ガチャ。

「なんでドアを閉めるのさ！」

向こうからあけてきた……！

「なんだよ、まったく……」

ヒサギは仕方が無いので中に入った。ほかに家がないからしょうがない。

「なんのようだ！？あんたらは！」

「なんだよ、うまく事件が解決したから打ち上げでもしようかと思つたのに……」

オーナー主人がわざとらしくシユン……とする。

テーブルの上には、紅茶と数々の茶菓子が置かれていた。

「これ全部クラウドが作ったんだよ。おいしいから食べてみなつて！」

「そんなことより、この前の事件がIDAとやらの手柄になっているのはなぜだ！？」

「僕は裏探偵だよ？ヒサギ君。表に姿は現さない。かの有名なシャーロック・ホームズもワトスンにこう言った。『世の中というものは実際になにを為したかの問題じゃない。肝心なのは世間の人に、何かをなしたと信じさせることだけだ』」

「いや・・・どうだけでも・・・」

「いいじゃない。君は報酬をもらった。僕は事件を解決できた。クラウドは暗殺から足を洗うことが出来た。万事OK。悪いことは何も無い」

ヒサギはダイスを指差していった。

「あんた、暗殺者を辞めたのか？」

「はい。おかげさまで」

「どうやって金を稼ぐ？」

「もちろん、執事として」

「こいつの？」

「はい」

「クラウド、ひとつ言っていなかったことがあるんだけど・・・」
「なんででしょう？」

「ぼく、家を持っていないんだよね・・・」

「・・・は？」

「・・・」

「では私はどうしろと・・・？」

「ごめん、執事は無理だね」

「・・・」

「そんなことより、早くここから出てくれ！」

「ヒサギ君、あーん」

「うわ！ケーキを押し込むな・・・もぎゅ・・・」

「どう？」

「うまい」

「さあ、食べよう！クラウド、ほら座って！」

「いや・・・私は・・・」

「おい、クッキー取ってきてくれ」

「はいよ!」

「自画自賛はあまり好きではありませんが、これはいい出来栄です」

「さて、次はどの事件に乗り出そうか?」

「もう、私を巻き込むな・・・」

「もう君も裏探偵の一員じゃないか!」

「誰が一員だ!」

「あの、私はどこで働けばいいのですか・・・」

「成せば成る、成さねばならぬ、何事も!」

「逃げないでください!」

しばらく、マンションの最上階の部屋では話し声が絶えなかった。

END

裏探偵、ショートストーリー1 お酒は楽しくほどほどに (前書き)

二話目のためのショートストーリーです。

裏探偵、ショートストーリー1　　お酒は楽しくほどほどに

「ヒサギ君が消えた！」

「はい？」

主人がわーわーわめいている中でのその言葉にダイスは反応した。
「クラウド、ヒサギ君がどこにもいない！」

ワインの品質を確かめていた手を一瞬だけ止めたダイスは、すぐにまた手を動かす。

「アレがいなくなることなどしょっちゅうではありませんか」

「あのねえ、クラウド。ヒサギ君がいまどういう状況か分かってる？」

「知る必要ありませんね」

「やけ酒をしにゆくって言っていたんだよ？」

固まった。ダイスの全ての動きが止まる。

実に嫌ーな予感が頭をよぎる。屋敷の掃除中にゴキブリを見てしまったようなあの感覚。つまり、放っておいたら後でトラブルの大所帯をつれてくるようなヤバさだった。後々暗がりを見たら屋敷中に繁殖した、といった風に。

しかしダイスは再三手を動かした。ワインがすっかり密閉されていることを確認すると、ワインセラーにしまう。

「私にはどうしようもできません。残念ながら」

『残念ながら』をものすごく強調して言う。

「クラウドお、ヒサギ君を探しに行って来てよお」

いきなり主人はダイスに猫なで声で近寄る。

「丁寧に断ります！」

そんな主人をサツ、とさりげなくかわして、ダイスはきっぱりと言った。

「あれは好きにさせておいて良いでしょう」

「どうしてだよお」

「私はあなたの執事ですが、アレの執事ではありません」

「僕が頼んでるのに」

ダイスは、ひょんなことから主人^{オーナー}の執事を名乗っている。

しかしながら、今彼はとあるお店でワインの点検を行っている。それはなぜかというと・・・。

「ぶっちゃけると、面倒なトラブルに巻き込まれたくないのですよ。見て分かるとおり、誰かさんのせいで私は今職が無い状態なのです。だから今はこうやってワインの点検で生計を立てている状態なのです。忙しいので、これ以上私にトラブルを持ち込まないでくださいますか」

特にアレに関するトラブルには、という部分をダイスはあえて飲み込んだ。

『誰かさん』はダイスの反応に口を閉ざした。そして、どうにかして話題を都合のいいほうに持って行こうと模索する。

「クラウドって、ワイン扱えたんだ」

「成り行きでどうしてもソムリエの資格を取らなくてはならなかった時があったもので」

「じゃあ、今それが役立つているんだね」

「・・・ええ、誰かさんのせいだね」

「・・・」

やはり、今のダイスはどうやっても話題がそっちのほうにいつてしまう。どうやら、いつかの主人^{オーナー}が言い放った『執事は無理だね』宣言をよほど根に持っているらしい。

主人^{オーナー}は途方にくれた。会話が続かない。

その間にダイスはワインの入っていた木箱を持って背を向けた。これ以上駄々をこねられたらこっちも困りますからね、という念をこめて。

しかし、背を向けて歩き出した瞬間、ゾッ、と不意に背筋に悪寒が走った。いきなり誰かに背後を取られたような感覚。

ダイスがあわてて振り返ると、そこにはいつもと変わらぬ主人の

姿。しかし、彼がいままとっているオーラの色は 黒。

「クラウド、命令だよ。ヒサギ君を探してきてね」

「い、いや、しかし・・・」

いきなりの豹変ぶりに少なからずうろたえるダイスン。いや、口調も表情も何にも変わってはいないのだが・・・なんでこんなにも身構えてしまうのか。

「嫌かな？」

ダイスンの狼狽に付け込むように主人はすかさずたたみ掛ける。

何だこれは、嫌がらせですか？

ダイスンは言いようの無い怒りを覚える。結局私に行けって言ってますか！

「なぜ私なのですか。あなたが行けば（そしてふざけなければ）被害は最小限ですむと思うのですが・・・」

括弧のなかを最小限のポリウムに抑えてダイスンはささやかに抗議した。そうです。自分で行けばいいじゃないですか。

しかし、主人はその言葉を待っていたかのように、にっこりと笑って、こう言った。

「だって、そのほうが面白いじゃないか」

ブチッ

その瞬間、ダイスンは懷にしまつてある拳銃で撃つてやろうかと本気で思った。

「主人」

「なんだい？」

「撃つてもいいですか？」

「やめておきたまえ。僕はまだ死にたくない」

主人の言葉の態度の前後に激しくギャップがあったような気がしたが、ダイスンはあえて無視する。

「わかった。今から面倒なことに首を突っ込みにいくクラウドのために、ひとつだけ僕が忠告をしてあげよう」

「誰のせいで『首を突っ込みにいく』と思っているんですか」

主人はダイスンのささやかな文句を黙殺する。ダイスンはダイスンで銃を抜きた衝動を必死に抑えた。

主人は十分にもったいぶった後、こう言葉をつなげた。

「あのね・・・」

ダイスンには、ヒサギがどのバーによるかは大体の予想が出来ていた。なぜなら、それらのバーを紹介したのは、ほかならぬダイスン自身だったからだ。

「あの時は、私も無知だったのですね・・・」

思わずため息がこぼれた。酒を飲んだ後のヒサギの行動は思い出したくない。いや、思い出せない。少し前に、何かのきっかけでヒサギが酒を飲んだその瞬間までは覚えているのだが・・・。

どうやら、その後の記憶はダイスンの心の奥底に堅い鍵をかけて封印しているらしかった。

ダイスンは重い足取りで暗い路地の地下にあるバーを見下ろす。チラツと横を見ると、そこには間違いなく赤のフェラーリが停車している。ヒサギの車だ。

「間違いないようですね・・・」

できれば、間違っていて欲しかった・・・。

ダイスンはバーのドアを開ける。

カラン、カラン、ドアについているベルが小気味よく鳴った。

「なんだよてめえ！」

店に入った瞬間、いきなり飛び交う怒声。ダイスンは一瞬自分にそういわれているのか、と思ったが、そうではなかった。

声のしたほうを見てみると、バーのカウンターの奥のほう、そこに何人かの人に向かい合って何かを叫びあっている。

片方はなかなか体躯のいい大男だ。その横にはふたりほど腰巾着が

くつついているようだ。

そして、もう一方は、ダイスは決して認めたくないし自分の『神眼』の異名を呪いたくなかったが、確かにヒサギだ。

大男が叫ぶ。

「てめえ、なんか俺に文句でもあんのかよ！」

「だあかあ！こんなバーのと真ん中で、大声で品の無い騒がれ方をされたら迷惑なんだよお！」

ヒサギは見事なほどに酔っていた。語尾がものすごく伸びて言葉がいつも以上に汚いのからして、泥酔、ベロベロだ。ほんのり顔が上気して赤みを帯びている。あなたが一番、品がありませんよ。

「すみません、少し聞きたいのですが・・・」

ダイスはバーの店員を呼び止める。

「あそこのアレは今日何杯ほど飲んだのでしょうか？」

ダイスがヒサギのほうを指すと、店員は納得した様子で、

「ああ、あちらのお客様ならウォッカのボトルとカクテルを数杯・・・あと、シヨーチューという日本の酒を飲んでましたね」

「焼酎・・・？ウォッカとカクテル・・・」

あいた口がふさがらない。アレはビール一杯で酔う女ですよ！？

「うるせえ！」

ドガン、と椅子が派手に転がった。大男が蹴ったものだ。ああスタントマン、あなたいったいどんな禁句を口にしたというのですか！「てめえ、女だからって黙ってりゃあ！」

そういつて、大男はヒサギを殴りつけようとする。しかしヒサギはヒョイ、とそれを千鳥足ながらも楽々とかわす。大男が体勢を立て直す前にヒサギは相手に殴りかかろうとした。

いけません！彼女は空手（以下もろもろ）の有段者です！握りこぶしも凶器に・・・！

ダイスはあわてて二人の間に割ってはいる。ヒサギの拳をパンツ、と手のひらで受け止め・・・

なぜか、ダイスは酒を顔に浴びた。

「・・・あの、あなたなぜ、私にウォツカをふっかけているのです・・・？」

めがねが酒にぬれてよく見えないが、ヒサギが空いた片方の手でウォツカの入ったグラスをダイスンにぶっかけたらしい。

ヒサギは酔っ払いながらダイスンに言う。

「おい、執事、邪魔すんじゃないよ。あの男にかけるつもりだったんだよ」

「はあ・・・あなた、正気じゃありませんね」

ダイスンはため息と共に言った。いつでもあなたは正気じゃありませんが、いまはそれがもつとひどいですよ。

顔に受けた酒がくさい。ダイスンは大男のほうを向いた。大男はヒサギがまさか自分の拳を避け、殴り返してくるのが予想外だったらしい。腰を抜かしたままの姿勢で動かない。どちらかというと、拳が避けられた衝撃より、ヒサギが殴りかかるときの殺気のほうにののいたらしい、とダイスンは推測する。

ダイスンは大男に言う。

「あなた、今日は帰ったほうがよろしいようです。これは人間ではないので。ええ、対処は私がしておきます」

「・・・ちっ・・・そうする」

「・・・いま『ちっ』と聞こえましたが、まあいいでしょう。ここで引くのは賢明です。よろしい。

「はなせよ」

ヒサギはダイスンの手をふりほどいた。彼女はカウンター席に座りなおし、うつ伏せになる。

「何やっているのですか、あなたはいいたい」

「うるせえ。飲んでんだよあっち行け」

「このままじゃあなた死にますよ」

酔いづれますよ。

「誰が死ぬって？」

「あなた以外にいます？」

「私は酒じゃ死なんよ・・・それとも、誰かが私を殺しにでも来るのかよ」

ヒサギはそう突拍子も無いことを言っただけ酒をグイッと一杯。

ダイスは「これはまずい」と思って、ウォッカのボトルとグラスを取り上げた。

「あなた、もう飲まない方が・・・」

「うるっさい！酒よこせ酒！」

「あなた本当に死にます！」

そういつた瞬間、うつ伏せになっていたヒサギがパツ、と起き上がった。

顔には満面の笑みを浮かべている。

ダイスはゾクツとした。そして、先ほどの主人との会話が一瞬でよみがえった。

「クラウド、ひとつだけ忠告」

「なんですか？」

「あのね・・・」

一瞬間を置く主人。

「ヒサギ君が酔った状態で満面の笑みを浮かべたときは・・・気を付けなよ」

いきなりヒサギはカウンターの下からつばの無いサーベルを取り出した。

「いつ!？」

いきなり抜刀されて、思わず叫ぶダイス。この女、正気ですか!？

「どこに隠し持っていたのです!？というか、あなた刀以外にも武器が使えたのですか!？」

ヒサギはその質問には答えず ちゃんと聞いていたかどうかさえ定かではないが ふっと息を短くはいてサーベルを突き出した。

「ちょ、ちょ・・・っ!」

ダイスはかろうじて避けた。ヒサギの動きが止まる。
数秒。

「うー」

ヒサギはひとしきり唸って、ドシャツと倒れた。

「……はい？」

ダイスの目が点になる。まだ私は何もしていませんが……。サーベルがカシャン、となって床に落ちた。ダイスが恐る恐る見てみると、ヒサギは寝ていた。スースーと規則正しい寝息を立てている。

酔いが回りきったら寝るのですか、この女は……。

ダイスは途方にくれた。いったいコレをどうしろと？

「ほら、しっかり立ちなさい！自分で歩けるでしょう！？」

ダイスはヒサギの腕を肩に回して櫓を飛ばした。

ヒサギは半分寝て半分起きている状態だ。足取りがふらふらしている。

ダイスとヒサギはもつれ合いながらもバーの階段を上る。

「ほら、フェラーリまでもう少し……」

ダイスは最後まで言葉をつむげなかった。そこには、ダイスにとってあまりにも残酷な光景が広がっていた。

フェラーリは壊されていた。

「………なんですか、これは……」

いろんな箇所が派手に壊されている。フェラーリだった痕跡はおろか、この状態を見た人にコレをフェラーリだといっても、これ車だったの？というに違いない。スクラップとなんら大差ないからだ。あの大男たちがやったのだらう。仕返しにしてはやり方が卑怯だ。小心者のすることである。

「………かついで帰れと言いたいのですか……？」

今日は厄日だ。とことんツイていない。ああ、主人がくれたフェラーリが……。

「・・・うーふふ、私のフェラーリがボロボロだ・・・」

酔いつぶれながら笑うヒサギを、ダイスは冷ややかな目で睨んだ。

幸いなことに、ヒサギのアパートはそう遠く離れていなかった、が、そんなに暑くないはずなのに、ヒサギに肩を貸しながら歩いたせいでダイスは汗だくになっていた。

ドアの前によやくたどり着くと、ダイスは鋭く叫ぶ。

「スタントマン、鍵はどこです？」

「うー・・・う？」

「カ・ギ・ですよ！どこです！？」

「うー・・・鍵？」

「そうです！」

「・・・ぐー・・・」

寝た。ダイスは主人のときのように再び銃を抜きなくなった。懷に手を入れたくなる衝動を必死に抑えるダイス。

耐えなさい！酔っている人の戯言をまじめに聞いてはいけません！・・・と自分に言い聞かせる。

「まったく、しかたがありませんね・・・」

ダイスは大いに気が引けたが、やむをえずヒサギのジーンズのポケットに手を滑り込ませた。誰もここに通りかからないかダイスはヒヤヒヤした。決してそういったやましいことではありませんからね！と自分に言い聞かせる。

四つ目のポケットに入っていた鍵を拝借して、ヒサギを支えつつ、鍵を鍵穴に差し込みドアを開ける。

ダイスは部屋の中をのぞく。相変わらず必要最低限の生活用品以外に物を置いていない殺風景な部屋だ。

この年頃の女性というものはもっと物が多いのではないのですか？そう思いつつヒサギをベッドの前に連れて行く。するとヒサギはまるでベッドに吸い寄せられるかのようにボーン、と仰向けに倒れこんだ。

まったく、あきれたものです。いい年をした女性が・・・ああ、コレは人間ではありませんでした。

ダイスはベッドからはみ出ている片足を戻してやり、タオルをかけてやる。

改めてヒサギの顔を見ると、月の灯に照らされた顔の輪郭はおとぎ話に出てくるエルフだ。黙っていれば美しいのですがね。

・・・待てよ。

「今ならどんなことを言ってもあちらはノーコメントなのですよね」
ダイスの心の呟きが思わず声に出た瞬間、どんぴしゃのタイミングでヒサギが突き出した腕がダイスのみぞおちにヒットした。

「ぐう・・・？」

思わず鳩尾をさえぎる。なんなのですか！？この女は！

「やってやったぜ！あの女、今頃ぼろぼろの車を見てどんな反応をするかね・・・！」

裏路地に大男の言葉と、ふたりの腰巾着の笑い声が響く。

彼らは、レンチやスパナといった工具を使ってフェラーリをボロボロにしてやった。あのおかしな女へのささやかな仕返しである。

「あの女、あんな高価な車を持ちやがって。俺のが似合うつての！」

「それはものすごい自信だね」

「ああ！？あの女よりは乗りこなしてやる・・・ん？」

そういえば、いま俺に話しかけてきた声は聞きなれない声だ。大男は振り向く。いつの間にか腰巾着が一人になっている。

「ああ？」

「こつちだよ」

大男が声のしたほうを振り返ると、腰巾着のうちの一人が立っている。

「何の真似だ？」

「それはこっちのセリフだつて。あのフェラーリは僕があげたつていうのに」

そういった腰巾着の一人は、大男がした一瞬のまばたきのうちに、英国風のベストに鹿撃ち帽ディアストーカーを被った青年の姿になっていた。

「てめえ、だれだ？」

「別に知らなくても良いでしょ？ どうせ僕のことを思い出せないぐらいに痛い目にあうんだから、今から。ねえ？」

「ひっ……」

裏路地に一人の男の叫び声がこだました。

疲れました……。

ダイスはヒサギを寝かせたその足で再びバーに戻っていた。カラン、カラン、と小気味よいドアベルの音が鳴る。

「あ、お疲れ」

オーナー
「主人？」

バーのカウンターに主人が自然体で座っていた。

「わざわざ来たんですか？」

「うん。どう？ 僕のお気に入り、レモン・チェロでも一杯？」

主人のその言葉に、ダイスはふっと肩の力を抜いた。

「そうですね、では一杯だけ。お酒は楽しくほどほどに、といいますしね」

その後……。

ヒサギはその日にあった恐ろしい出来事をきれいさっぱり忘れていた。

そして、ダイスンは問題の起こしたバーの掃除をさせられ、ヒサギとのかの騒動は、彼の中でトラウマとなり、そのことを聞かれるたびに胃が痛むと言う。

そして、その日の新聞の見出しには、乱暴で名を轟かせていた犯罪者が瀕死の状態で見つかったという。彼の証言によると、謎の異国人がなんとも恐ろしいことをしたというが、真相は謎のままだ。

「ほんと、お酒はほどほどにしておかないとね」

END・・・？

裏探偵、シヨートストーリー2 くの女性、最強につき(1) (前書き)

この小説が、推理というキーワードで引つかるのに『文学』なのは、シヨートストーリーに推理のかけらも無いからです！

裏探偵、ショートストーリー2 〰かの女性、最強につき(1)〰

その女性、最強につき。

「違う・・・」

道端にて、とある女性は筆をもつ手を止めた。

「違う」

スケッチブックを両手にもち、わなわなと震える。そして…

「ちっがーーーーーっ！っ！」

それを型紙ごとやぶりすてた。

「違う、違う、違うわ！私が描きたいもの、私が求めているのはこんなものじゃないのよー！」

わからない人のために説明しよう。

女性は道端で自画像を書いてあげていた。モデルはたまたま通りすがった女性だった。が・・・。

「・・・」

いま、その女性は口をあんぐりと開けた状態にある。いきなり似顔絵を破ったのだ無理もない。

「あのー・・・」恐る恐る、モデルは声をかける。

しかし、そんなモデルに、女性は衝撃の一言を放った。

「あなた、残念ですけど私のインスピレーションを刺激するようなプロポーションは持ち合わせていませんね。帰ってください結構！」

「・・・」

「ああ、私のインスピレーションの泉を潤してくれるような完璧なプロポーションの持ち主はいないかしら!?」

彼女は眼をつるつるさせながら、五本指を両手で絡み合わせて悲痛に叫ぶ。

そんな中。

「ん？」

彼女は人ごみの中にひとりの女性を見つけた。銀髪を長く伸ばした女性である。

「こ、これは・・・！」

すらりとした長い四肢、完璧なスリーサイズ。そして、彫刻のような美しい顔立ち・・・。

「き、来たわっ！」

彼女は叫んだ。

「そうよ、あの人こそ私のインスピレーションの泉に新たな湧き水を注ぎ込んでくれるわ！どんな案が沸いてきた！そう、あの人ならどんな服を着せても美しいでしょうけど・・・そう、あれとあれ、そしてあの靴を組み合わせ・・・あ、ちょ、ちよっと、どこへ行くのかしら？待って、待って私の湧き水　　！」

彼女は手元においておいたデッサン用の筆記用具と、その他もろもろをリュックの中に詰め込み、銀髪の女性に向けて猛ダッシュした。

なんだか、一瞬背中に悪寒が走ったように思えた。スタントマン・ヒサギはあわてて辺りをサングラス越しにくまなく見渡すが、周りに怪しい輩は見当たらない。

ヒサギは最近、怪しい人間に対する防衛本能が強くなった。危険人物に要注意！特に、英国風ベストに鹿撃ち帽を被った青年とかは超危険人物だ。

その影が存在しないことを確認すると、ヒサギは買い込んだ食材の入った紙袋を持ち直し、メモをもう一度確認した。

すでにほとんどの買出しは終わろうとしている。が、残っているのは洗車用を使うワックス類か・・・。

ヒサギの二代目の愛車である赤いレトロ調なカマロも、そろそろ洗車が必要になる頃だ。（この前まで愛車だった赤いフェラーリは、

殉職なされた。」

ヒサギはメモをしまい、店に向けて歩き出す。さつさと買い物を済ませて家でくつろぎたい……。

「お待ちなさい！その人！」

そう、誰かに呼ばれることも無く一人で静かな時間……いま、誰かが私を呼び止めなかったか？

「そう！その銀髪でサングラスをした人よ！待って、待って！行かないでー！」

ヒサギはぎょつとして振り返った。もちろん、聞きなれない声である。

しかし、これだけは感じる何か非常によくないことがおきそうな予感……。

ヒサギを呼び止めたのは、ボブカットの黒髪の上におしゃれなベレ一帽を被り、上品かつ質素な服に身を包んだ小柄で華奢な女性であった。

「……誰、さん？」

久木は少々たじろぎながら聞く。しかし、女性はその質問には答えず、ヒサギの両手をガシツと掴んだ。

「見つけましたっ！私の理想の女性がつー！」

「……は？」

この人は、いったい……？

「初・開・店！」

ディアストーカー

英国風ベストに鹿撃ち帽を被った青年　ヒサギから超危険人物に指定されている主人が叫んだ。
オーナー

「あまりはしゃがないでもらえますか？邪魔をしに来たのですか、あなたは」

はしゃぐ主人の横でそう言ったのは、黒い長髪を後ろに束ね、黒い

スーツを着込んだめがねの男、クラウド・ダイスンだ。

いま二人は、とあるレンガの建物の地下に続く階段の手前にいた。そこに、椅子やテーブル、そしてワインの入った木箱などが次々と運ばれている。

そして、ダイスンもまたそれらを運んでいる途中だったのだが、主人がはしゃぐせいで気が散ってしまう。

「だって、お店だよ！？ついに開店だよ！？」

「いえ、まだ機材も設置していない状況ですよ？何より従業員を雇っていませんし」

「いいじゃない、これから増やしていけば」

主人は、再び目を輝かせながら地下への階段を子供のように駆け下りる。

そこに地下に入ると、目に入るのはガラスのドア。そこにはこう書いてある。

『ワイン W I N E バー B A R バックス B A C C H U S 』

主人が店を出そう！と唐突に言ったのは、十日前のことである。

それを聴いた瞬間、ダイスンの眼鏡がずり落ちた。

「店を開く？いったい何の話をしているのです？」

彼はずり落ちたフレームの無い眼鏡を指で押し上げて聞き返した。

「誰が店を開くのですか？」

その問いに、主人はすかさずビシツ、とダイスンを指差した。

「・・・はい？聞いていませんよ、そんなこと」

「いや、だってね？君はこの前、職が無いだとか、どこで働くか、とかいろいろ言ってたじゃないか」

「重要なのは『あなたのせいで』働けない、ということですが」
「・・・」

主人は、0.4秒ほど表情を凍らせて、あわてて咳払いをする。

「それでね、君はソムリエの資格があるといっていたじゃないか。

そんなたいそうな資格を持っているのなら、これは活用するほか無いよ！このままじゃ、あれだよ？何とかの持ちぐされ？」

「しかし・・・資金も場所も、スポンサーも都合よく見つかりませんか？」

「うん」

「・・・どなたです？」

「僕」

「・・・はあ」ダイスは表情を変えずに言う。

「こういう冗談にはどう反応すれば・・・」

「ひどい！冗談なんかじゃないよ！？本気で僕が場所も資金も準備してあげるのに！冗談なんだなんて！」

「いえ、あの」

「もういいもん！見てなよ！十日以内に店を開けるようにしてやるからねっ！」

主人はそう言つて、猛スピードでその場を去った。

しかし、まさか本当に十日でここまでするとは思っていなかった・・・。

主人の財力と破天荒さには驚きとため息ものである。しかも、ワインバーという発想は、ダイスのことを知っているからこそそのチョイスである。

「本当に、これほどのおおぼれに預かってよろしいのでしょうか？」

「それ、いまさらだよね」

「・・・」

ごもつとも。

「よし、ではヒサギ君を連れて来て、三人で開店のパーティーでパアツと飲もうじゃないか！」

「やめてくださいっ！アレにアルコールは厳禁ですっ！」

ダイスは声が裏返るほどに叫んだ。アレが酔った日には、この店が開店した次の日に修理をしなければならぬ・・・。

しかし、ダイスンがその旨を訴える前に、すでに主人はかなたへ消えていた。

胃が痛い・・・。

一方、ヒサギはなぜかレストランにいた。

その謎の女性は先ほど、ヒサギの両手をがっちりと掴んだまま最寄りの店へ彼女を引きずり込んだ。

「お昼はもう済ませた？」

女性はきらきらした目でこちらを見つめてくる。

「い、いや・・・」

「じゃあ何でも好きなものを選んで！」

女性はヒサギにメニューを握らせる。もちろん、ヒサギは彼女の剣幕にたじたじだ。

「あ、あんたはいつたい・・・」

「あら、この際私のことはどうでもいいじゃない！」

「よ、よくな」

「ウェイターさん！」

女性はヒサギをさえぎって大声で叫ぶ。

「・・・」

ヒサギが啞然と固まっているのをよそに、女性はメニューを勝手にウェイターに頼んでいく。

「いつたい、この人は・・・」

「ねえ、あなた名前はなんと言うの？」

女性はヒサギにグイッと顔を近づけて言った。

「ヒ、ヒサギ・・・」

「まあ、ヒサギさん！美しい名前ね！ピッタリよ！」

女性は自分の名前ひとつでなぜか感動して手を組む。いったい何がピッタリなのかヒサギには到底理解しかねた。

「ねえ、ヒサギさん？職業は何をしていらして？」

「ス、スタントマン・・・」

「まあ！あなたのような美しい女性が、顔を出さない皮肉な仕事を！？あ、でも、アクションシーンやカーチェイスとかをやるならかつこいいわ！天職ね！」

息継ぎをせずによどみなく喋る女性。よくもまあそこまで息が持つな、とヒサギは半ば感動してしまった。

「いいわ、いいわよ！あなた！一緒にいるとインスピレーションの泉が、いまや滝へと変わっていく！！」

意味がわからない。

そこへ、丁度ウェイターが料理を運んでくる。

「あら、来たわね。食べて食べて！ここは私が払うから！」

「は、はあ・・・」

なんだかわからなかったが、とにかく手をつけないと何か恐ろしいことが起こりそうなので、仕方なくヒサギは料理に手をつける。

女性はそんなヒサギの姿をニコニコしながら眺めている。

この女性はいたい何者なのだろうか？監督？映画撮影関係者？いや、しかしそれならさっきのように職業を聞いてくるようなことはしないはず・・・。

まさか、詐欺師？私を騙そうとしている？もしくは、ただの暇人？しかしながら、ヒサギはこの女性に逆らうことが出来ない。彼女の本能とか勘とかいう、いわゆる第六感が、勝手にこの女性を恐れ多き人物として認識してしまっている。なぜだ！？

チームを組む数匹の犬が、姿を見ただけでリーダーを決めてしまうような感覚だ。それに逆らうことが出来ない・・・。

「うーん、やっぱり食べているときもかわいいわ、ヒットよ！」

そういつて女性はカメラを取り出し、ヒサギを撮る。ヒサギには何がヒットなのか到底理解できない・・・。

この人はいったい・・・？

裏探偵、ショートストーリー2 ㄱかの女性、最強につき(1)ㄱ(後書き)

次回、謎の女性の正体に迫ります！

裏探偵、ショートストーリー2 かの女性、最強につき(2)

ヒサギに超危険人物として指定されている主人は、狗の嗅覚並みに鋭い推理力でヒサギの居場所を突き止めた。

それを世間では『ストーカー』と呼ぶが、それを気にする主人ではない。職業柄、人や動物を尾行しまくっているのではいまだストーカー行為など痛くも痒くもない。一般人が聞けば実に悲しいことだが。

ヒサギはどうやらこの店の中にいるようだ。彼の推理から、彼女は現在昼食中という結論が出る。

「ヒースーギー君！」

主人は飛び上がりながら店に入る。前方に目的の人物 ヒサギの姿を確認。しかし……。

(ひいやあああ!?)

主人は小声で叫んだ。なぜ、なぜあの(・・)人が !?

「ヒ、ヒヒ、ヒサギ君!? なぜこの人と一緒にいるんだい!?’

主人は思わず変装をするのも忘れて二人の座るテーブルに現れた。

「主人?’

「あんた、なんでここにいのよ!?’

カメラを持ってヒサギを激写していた女性は、現れた主人に向かって叫ぶ。

「……知り合い?’

ヒサギは面食らって、訝しげに聞く。しかし、主人はそのヒサギの問いには答えずに叫んだ。

「ヒサギ君、この人がどんな人かわかっているのかい!?’

横で女性が「何よ、その危ない人みたいな言い方!」と突っ込む。

「知らない」ヒサギは慎重に答えた。

「君、知らない人について言っちゃだめじゃないか!’

私はいつからこの人にそんなことを言われる立場になったのだろ

うか・・・？

「ヒサギ君、この人はね」

「待って、あんたが言ったら変なことを言いそうだから自分で自己紹介するわよ！」

「はぁ・・・」

ヒサギは果然と二人の会話を見守る。

「私はクレア・ホームズと言うの。よろしくね、ヒサギさん！」

「はぁ・・・よろしく」

「ヒサギ君、この人は危険だよ！離れなさい！」

「失礼ね！私はヒサギさんと一緒にランチをしているのよ、邪魔しないで頂戴！」

「なぬ！？ランチ！？君はヒサギ君をどうするつもりだい！？
僕の助手だぞ！」

「ふん！どうせまた勝手に自分で助手だ助手だほざいてんでしょ
うに！！ヒサギさんがかわいそうよ！ねえ！？」

クレアはそういつて、ヒサギをギュ、と抱きしめる。普通のヒサギならここで、全力で抱きしめた手を振り解くのだが、この人にはなぜかそれが出来ない。

「やめなさい！初対面のヒサギ君に何をやっているんだい、君は！
？」

「うるさいわね、性別不明のくせに！性別不明が一番信用できない
のよ！」

「何を言っているんだ君は・・・」

「ふん、この世の中は全てにおいて女性が勝っているのよ！女性
LOVE！女性万歳！性別不明ごときが女性に扮するなんてありえな
い！」

「ひどいボロクソだねえ、クレア。しかしヒサギ君とは僕のほうが
付き合いが長いんだよ？」

「愛に時間なんて関係ないわ！私のヒサギさんへの愛は誰にも負け
ない！」

「いやいや、今あつたばかりでしょ、まだあつてから一時間もたつてないでしょ」

「あら、負け惜しみ？それとも、負け犬の遠吠えってやつ？」

「僕は何にも負けていない！勝負だ！クレア・ホームス！僕のヒサギ君への信頼のほうが愛よりある！」

「それは聞き捨てなら無いわね、私のヒサギさんへの愛のほうが強いに着マあッテルでしょう！いいわよ、この際きっちりと決着を付けようじゃない！」

「・・・」

ヒサギはただ二人のやり取りを昼食と共に眺めていた。

「・・・で」

ダイスは短く区切つて。

「なぜそのような込み入った話の流れで私のところへ来るのですか？」

三人は、レストランを出た後、勝負だ勝負だといひながら内装中のダイスの店にヒサギを引きずりながら駆け込んだ。

「なぜお二人の揉め事に私を巻き込むのです！？」

「だって、こういう話は全員でしたほうがいいじゃない？」

主人は当然、という風に言った。

ダイスはため息をつく。

「どうせ理由もなしにここまで来たのでしょうか？バレバレです・・・というか、そのあなた！」

ダイスはクレアを指差す。

「あなたはなぜ我が物顔で新しいテーブルと椅子に座っているのです！？」

「男がそんな細かいこと気にしないの！このクレア・ホームスが直々に来てやってるんだから、酒の一杯でも出したらどうなの？」

「あなたね・・・」

ダイスはその後に関わらずの肉のひとも言おうかと思っていたが、ハツ、としてクレアの顔を見る。

「あなた、いまクレア・ホームスとおっしゃいましたか？」

「それが何？」

「あの『ホームス・カンパニー』の？」

「ホームス・カンパニー？」

ヒサギは首をかしげた。

「聞いたことあるような・・・」

「当たり前でしょう。ホームス・カンパニーと言ったら、この国のみならず、世界にも活動の手を広げている大手ファッション会社の名です」

「・・・マジ？」

「マジです」

ヒサギはいまさらながらにして戦慄（？）した。うわっ、私はそんな相手と喋ってた・・・いや、昼食をおごられていたのか？

「現在ホームス・カンパニーは、インテリアやデザインのほうにも手を広げているとか」

「うん、確かにクレアはホームス・カンパニーの社長を母に持つ」
ダイスの言葉を受けて、主人が補足を加えた。ダイスは眼鏡を押し上げながら驚き混じりの声で聞く。

「主人、なぜそんな大物と知り合いなのです？」

「・・・腐れ縁？」

「いやよ、こんなやつと腐れ縁なんて！あ、ヒサギさんとなら大歓迎だけ」

そう言つて、クレアはヒサギの腕をギュウ、と掴んだ。腐れ縁というのはいい意味ではないのだが、クレアはお構いなしだ。

「ねえ、私のことなんかより、今から私の家に来ない？いろいろな話を聞きたいわ」

「え」

なぜかヒサギではなく主人が声を上げる。

「こんな性別不明と眼鏡君は放っておいて、ね？」

「『ね』じゃないぞ、クレア！」

「め、眼鏡君・・・？」

「そこ、静かに！」

ヒサギは目を光らせて二人に鋭く叫ぶ。そして・・・。

「さあ、ヒサギさん！いまから私のいえにレッツゴーよ！」

「待つんだクレア！僕との勝負はどうしたんだい！？」

「そんなの無視　　！」

そういったクレアの語尾はすでに小さくなりつつある。クレアは問答無用でヒサギを引きずって店から出たのである。

「なんて逃げ足の速い・・・クラウド、追うよ！」

主人は作業中のダイスンを無理やり引っ張った。

「ちよ、ちよと待ってください！私はまだ準備が」

「そんなの無視　　！」

・・・似たもの同士の二人である。

裏探偵、ショートストーリー2 ㄱかの女性、最強につき(3)ㄱ(前書き)

この回でショートストーリー2が完結です。

「あの、ク、クレア・・・さん？これがあんたの家？」

ヒサギはあいた口がふさがらなかった。まさか、これが・・・？

「ええ、そうよ」

クレアはさも当然、といった風に答えながら、その家を眺めた。

クレアの家はかなり小さかった。その理由は 門から家までがとても遠くにあるからである。

「・・・家というレベルじゃないな、城だ・・・城」

ヒサギは長時間眺めていると首が痛くなりそうな高さの門をくぐりながら言った。

「やあねえ、母さんの家の三分の一の大きさしかないのにー」

「三分の一！？」

母親の城はこの三倍！？ただでさえ庭は端から端まで歩くのに何時間もありそうで、この広大な敷地は、大学のひとつでも入ってしまうのではないかという広さなのに、これの三倍・・・。ヒサギの想像力では表すことが出来ない。

「ほうほう、これがホームス君の邸宅かい」

後ろから唐突に声が聞こえた。その瞬間、クレアの目つきが変わる。

「あんた、またついてきたの？ストーカーもいいとこだわ」

クレアは振り返って、ついてきた主人を睨んだ。その後ろには全力で走って追ってきたらしい方を激しく上下しながら息を整えているダイスンがいた。主人と一緒にいると大変らしい。

「丁度いい。君との勝負もこの邸宅のなかですかい？」

主人は不敵に笑った。どうやらそれが目的でついてきたらしい。クレアは肩を落とす。

「まったく、しょうがないわね・・・あんたをここから追い出すに

は、勝負に勝たなきゃだめってことね」

クレアは主人の言葉を聞いて、しゅしゅ三人を数ある部屋のうちの
一部屋に案内した。その部屋は。

「カジノ？」

主人は啞然として聞いた。その部屋は、ダーツ、ビリヤード、スロ
ットマシン、ボードゲーム用のテーブルなどが広々とした空間に敷
き詰められていた。

「ふん、ここならあんたの満足するような勝負が出来るでしょう。
何か文句ある？」

「ふぉー！ルールットだ！」

主人はクレアを無視してルールット台にかじりつく。

「聞いてないし・・・」

クレアがあきれている横で主人はビリヤード台を眺めて。

「よし、勝負はこれでやろう！」

「ビリヤード？別にいいけど」

「クラウド、審判！」

「はい？」

「審判やって！」

「・・・」

ダイスは主人のわがままぶりに、眼鏡を押し上げながらため息を
ついた。

「では、勝負をはじめようと思いますが・・・」

ダイスは一度言葉を区切り、二人を見る。

「ちなみにお二人、ビリヤードの経験は？」

二人はにっこりと笑ってダイスのほうを見て・・・。

「「ううん、全然」」

「・・・」

せりふの内容も無いようだが、ここまで一緒のタイミングで自信たっぷりに言われると、呆れを通り越して感心してしまう。

「なぜこの種目にしたのです・・・？」

そうつぶやくダイスンに、ヒサギがあつさりと「どうせまた面白いからだろ」といった。

「一通りルールを説明すると、ピンをキューを使ってポケットに入れる。それだけです」

主人はダイスンを見る。

「説明いい加減じゃない？面倒くさいの？」

「当たり前です。こっちは誰かさんの相手で疲れているのですから誰かさんは聞こえないふりをした。」

「では、どちらからはじめます？」

「じゃ、レディーファーストってことで」

「は！？」

主人がさつとそんなことを言うので、クレアはすかさず反応した。

「あんた、『まず隗より始めよ』って言う言葉を知らないの？あんなからはじめなさいよ！」

「まったく、僕がやるところを見ないと出来ないんだから、君は」

「私が先にやるわ」

クレアは、主人の挑発に一瞬で翻った。

キューを持ち、ビリヤード台に立つ。キューを構える。キューの先には三角形に並べられた九個にピン。

「私のヒサギさんへの愛は、誰にも負けない・・・」

クレアは、一瞬間を置き・・・。

「わっ！」

ピンを打つ。

カン、とキューに当たった白いピンは、三角形に並べられたピンの先端に見事に当たり、九個のピンはそれぞれのポケットへと吸い込

まれるように落ちた。白いピンだけがテーブルの上に残る。

「・・・あなた、先ほどビリヤード経験は皆無、おっしやいませんでしたか？」

「そうだけど？」

「なぜはじめから全てのピンをポケットに入れられるのです？」

ダイスンの問いに、クレアはにっこりと笑って・・・。

「愛」

と答えた。

「・・・それは、誰に対する？」

「もちろん、ヒサギさん！」

漫画ならいまの彼女のせりふのふきだしにハートマークがついてい
るような口調だ。

「次は主人の番、どうぞ」

ダイスンの言葉に、主人はキューを手取る。

「ふん、クレア。君の愛がどれだけ強くとも・・・」

主人はキューを構える。

「僕の信頼に勝ては・・・」

言葉と同時にピンを打つ。

「しないっ！」

放たれた白いピンは、九つのピンに当たり、それらは綺麗に分散さ
れ転がる。そして全てのピンが全てのポケットへ、カコン！

主人は得意そうにクレアを見た。彼女のほうも主人を見てフツ、と
笑う。

「さあ、どっちが先に転ぶか勝負よ！」キューをビシッ、と主人に
突きつけるクレア。

「望むところだ！」

二人の間に火花が散る。それを見たヒサギとダイスンは、二人で（
キョーレツだなあ・・・）と思った。

その後、しれつな戦いは二時間にもおよび・・・。

「次、九十六巡目です。あの・・・」

ダイスは二人を眺める。二人はキューを持ちながらも、すでに息は絶え絶えだった。

「お二人・・・まだやりますか？」

「当たり前だっ！」

「当たり前よっ！」

二人は同時にクワツ、とした表情でダイスを睨んで叫んだ。

「ここまで来ると異常だな・・・」

一方城で諸ファに座っているヒサギがぼそつ、とつぶやいた。

「ひとつ提案なのですが・・・」

ダイスは眼鏡を押し上げる。

「種目を変えませんか？ビリヤード（これ）では決着がつきません。

「・・・」

二人はダイスの言葉を受けて、顔を見合わせる。そして・・・。

「祖、そうね・・・これじゃ埒が明かないわ・・・」

「種目変えようか・・・」

「お、これなんかどうだい？」

主人がそんな声を上げたので、三人がそのほうを見てみると、主人がダーツの的を指していた。

「うん、ダーツね。悪くないわ」

クレアは腕を組んで唸った。

「決まり！次はこれで勝負だ」

「今度こそ決着をつけるわよ」

そういったクレアに、主人は神妙にうなずいて言った。

「うん、彼が」

「はい？」

ダイスは、急に主人から肩を叩かれてビクツと反応する。

「『彼が』とは誰です？」

「YOU！」

主人はキザにダイスを指す。

「全力でお断りします！」

ダイスは叫んだ。

「いやいや、大丈夫でしょ、君なら。ダーツだし。君投擲のジャンルならなんでもござれでしょー？」

「そういう問題ではありません！」

「うるさいわねえ」

二人の言い合いに、クレアは間延びした声で言った。

「男ならグダグダ言わずに・・・」

クレアは、服に引っ掛けていた眼鏡を装着した。

「さっさと勝負しましょ？」

その言葉に、ダイスのプライドに火がついた。

二人はダーツの的に立った。その後ろで、主人がダーツを持ってくる。

「ゲームはエンドレスでもいいよね。さっきみたいに」

「かまいませんよ」

「同じく」

二人はうなずく。

「じゃあ、まずトップバッターは・・・」

主人の言葉に、ダイスが一步前に出て行った。

「では、私が先手になりましょう」

ダイスは足を肩幅まで広げて自然に立った。ダーツは手に持っているが、まだ構えていない。

彼はクレアのほうを向く。

「一つ申し上げたいことがあるのですが・・・」

「何？」

クレアがそういうと、ダイスは唐突にダーツを的に向かって投擲

した。

ヒュッ、とダーツはど真ん中に命中。そして、彼は言った。

「あなたが眼鏡をかけると、キャラが被るのですが」

「余計なお世話よっ！私は元々目が悪いんだから」

クレアはそういいながら主人からダーツをひったくった。

「あなたこそ・・・」

ダーツの的の前に立ち、構えを取った。

「伊達でやってるんじゃないの!？」

といいながら撃った。放たれたダーツはど真ん中に命中する。

「誰が伊達ですか、誰が！私は眼鏡を取ったら、一メートル先もまなりません！」

そしてまた、ダイスはダーツを投擲、命中。

「そんなにキャラが被るのが嫌なら、コンタクトにしたらどうなの!？」

そういつて、クレアが投擲、命中。

こんな勢いで二人のしれつな戦いが続いた。

「眼鏡同士がぶつかるとそういうことになるのか・・・」

ヒサギは小さくつぶやいた。

命中、命中、また命中……。二人の投げたダーツは、ひとつもらすことなく全体的の中心に当たった。

そして、勝負は六十七巡目で動いた。

「あれ」

クレアが投げたダーツがわずかに中心をそれたところに当たってしまった。

「これは、次に私が命中させれば勝ちですね」

ダイスは目を細めた。それを見てクレアは悔しそうな表情になる。

「頑張れー！」

主人が背後から声援を送る。ダイスはすかさず、

「主人は黙っていてください！」

ぴしゃりといった。

ダイスは肩幅に立ち、ダーツを構える。しかし……。

「ちよつとタイム！」

そういったのはクレアだった。

「どうしましたか？ミス・ホームズ？」

ダイスは、皮肉ではなく本当に訝しげな口調で聞いた。

「五分だけ休憩してやりましょう。なんだか疲れちゃったわ」

「？」

ダイスと主人は顔を見合わせた。

五分後。

「さて、再開しましょうか、眼鏡君」

クレアはドアから部屋の中に入ってきたが言った。ダイスの眉がピクツと動く。

「めが……家、ミス・ホームズ、あなたいままでどこに？」

「どこだってかまわないでしょ？ほら、さっさと投げた投げた！」

クレアはダイスの背を押してダーツの的の前に立たせた。

「では……」

ダイスは目を細めて狙いを定める。

「あ、眼鏡君、ちよつといい？」

「その呼び方やめてくれませんか？」

ダイスはうんざりした様子で言っ、クレアのほうを見る。

「これなーんだ？」

クレアは、やけにかわいい口調で言っ。彼女はビリヤード台の上にあるものを置いた。それは……。

ワインのボトル。

ダイスはそのボトルを、ダーツを構えている位置から注意深く眺める。その表情が驚愕の色に染まった。

「こ、これはまさか……！」

ダイスはワインに歩み寄る。

「ロマネ・コンディ!?」

そう叫んでボトルを取ろうとするも、すんでのところでクレアがさっとそれを取り上げる。

「おっと、そう簡単に触らせはしないわよ?」

「本当に、ロマネ・コンディなのですか!？」

「ええ、しかも?一九八五年のヴィンテージ」

「な、なんですって・・・!?」

ダイスンの全思考回路が停止。漫画にしたら、背景に『ドーン』とか『ガーン』といった効果音がつくに違いない。

「ろまね・こんでい?」

ソファでくつろいでいるヒサギが暗号を言うような口調で言った。

主人がその横ですかさず説明する。

「ロマネ・コンディ。安物でも二千五百ドル(約二十万円)、高価なものなら一万ドル(約百万円)の値がつく幻のワインだね。しかも、一九八五年代ものといったら、一本で二万ドル(約百六十万円)もするプレミアもの・・・『飲むより語られるほうが多いワイン』といわれるほどで、めったにお目にかかれない代物だね」

「ふーん」

「しかし、なぜクレアはいまこんなものをちらつかせるんだ・・・?」
クレアは、ボトルを持って言う。

「これ、このゲームの戦利品にしようかしら」

「ぜひともそうしてもらいたいものです!」

すかさずダイスンは食いつく。それもそのはず、ダイスンが次のダイスを命中させたらそれは彼のものになるはずなのだから。

「じゃあ、さつさと投げちゃいなさいよ」

「では・・・」

ダイスンがダイスを構える。

「なーんか、嫌な予感がするな・・・」

主人はあごに手を当てて、目を細める。

「行きます」

ダイスンがそう言つて、ダーツを投擲しようとした、その時。
クレアは、何の前触れも無く、持っていたワインのボトルを・・・

投げた。

「!!!!」

ダイスは驚愕した。ワインボトルはくるくる回りながら、見事な放射線を描き、重力の法則にしたがつてどんどん床に迫る。

ダイスは動いた。ダーツが手を離れる瞬間に靴を踏み鳴らしてワインに向かって飛ぶ。

ヘッドスライディングの要領で頭からワインを掴む体勢へ、そして思いつきり手を伸ばし、ワインが床に着くぎりぎりのところでダイスはボトルをダイビングキャッチした。

その間の動きは、全てスローモーションに見えた。

「・・・・」

「・・・・」

「・・・・」

全員が沈黙、そのなかで主人は顔を引きつらせて・・・。

「・・・・ナイスキャッチ」

といった。主人は彼の執念にたじたじだった。

当の本人は、ロマネ・コンデイが割れるかもしれないという恐怖から、生きた心地が今でもしなかった。

「あ、ダーツ」

ヒサギが思い出したように言った。四人はいつせいにダーツの的を見た。

彼の射たダーツは、的の中心を大きくそれたところに刺さっていた。投げている間に姿勢を大きく変えたので、的に当たっていること自体が奇跡なのだが・・・。

「この勝負、私の勝ちね」

「え　！？」

主人が叫ぶ横で、ダイスは心臓をバクバクさせながら言った。

「なんて人です！ロマネ・コンデイを投げるなんて！いったいこれがどれだけの価値があると！？」

「ふん、ヒサギさんの愛のためなら、一億ドルだろうが十億ドルだろうが喜んで捨ててあげるわ」

「あなた、同性愛者ですか！？」

「馬鹿！そんな下賤な愛じゃないわ！！」

「どんな愛ですか」

「とにかく、勝負は私の勝ち！勝ち！勝ち！」

「ひ、卑怯な・・・！」

主人は抗議する。しかし、クレアはしれつ、とした表情で。

「そっちだつて勝負に眼鏡君を使つてたんだから、文句言えないでしょ？」

「ぐう・・・」

勝ち誇る主人と、その横でちゃっかりワインを掴んで離さないダイス。

「もう一度、もう一度だけ勝負だ！」

「うるさいわね、早く帰りなさい、二人は」

「二人？」

ヒサギは首をかしげながら言う。

「もちろん、ヒサギさんは泊まりよ！」

「「は？」」

主人とヒサギが同時声を上げる。

「ヒサギさんっ！」

クレアはヒサギの手をギュツ、と掴む。

「今日は朝まで語り明かしましょ！」

「え、ええ！？」

クレアの目がきらきらしている。断りにくい・・・。

「だめ？」

クレアは小動物のように首をかしげる。ますます断りにくい……

「う、うん……」

「やった！決まりね！」

「……」

主人は啞然。あのヒサギ君が他人の家に泊まるのをあっさり……

「ほら、男と性別不明は帰った！」

そういつてクレアは二人の背中を押して出口まで押し出す。

「ちょ、ちよつと待つんだクレア！」

「ごきげんよう！」

「ちょ、ちよつと待」

ボタン！部屋の屈強なドアが閉まった。

「日、ヒサギ君が……！」

主人がうなだれる横で、ダイスはやっと二人のわがままから解放された開放感から、こういった。

「さて、帰りますか……」

その手にはしっかりとロマネ・コンディが握られていた。

その後、ヒサギは三日間クレアのさまざまなことにつき合わされたらしい。何をしたかは、主人が質問しても答えなかった。彼女にとつては相当恐ろしいものだったらしい。

「クレアのことだから、ファッション関係だろうなあ……」

そして、その後ヒサギが聞いた話では、彼女に追い出されたその夜、主人はダイスの店で朝まで酒を飲んだらしい。

「うう……クレア、ヒサギ君を返せー！」

彼女は、裏探偵三人で挑んでもまったく歯が立たない、という伝説

の女性としてその日から三人の間でひそかに語り継がれることになる。

かの女性、最強につき。

裏探偵、ショートストーリー2 くの女性、最強につき(3) (後書き)

かの女性、最強につき。

どうでしたか？

ここでちよつと、クレアの説明を・・・。

かの女性、クレア・ホームスは、実はモデルが存在します。

それは誰かというと、私、ものかきの・・・おっと、これ以上は言うのはやめましょう。

ええ、確かに最強ですよ、彼女は。いえ、クレアのようにあんなに過激ではありませんが。あくまでモデルですよ。

確かに彼女は恐れを知らないというか、わが道を行くというか・・・。

しかしながらとても相手をよく見ていて、気遣いがものすごいです。そんな彼女を想像して書いていたら、なぜか金持ちで、ヒサギ君LOVEで、あんなに傍若無人になってしまいましたね・・・作者の手を離れて。

基本登場人物は作者であるものかきの手を離れつつあります。ええ、言うことを聞かないのです。

もし、気に食わないことがあるものなら、勝手にぺらぺら喋りだし、真剣を振り回し、リボルバーを暴発させます。もちろん、ロマネ・コンデイも投げます。

そんな彼らを、どうか温かい目で見守ってくださいまし！！

新たな依頼（前書き）

裏探偵、新章突入！！

下書き原稿も手元に集まり、とんとんと更新開始です！

裏探偵一同はいままで以上に暴走します！

新たな依頼

「さあさあ！！よい子に楽しいジャグリングを見せる裏道化^{バックラウン}が来てあげたよ！」

ポカポカと暖かい日差しが降り注ぐある広場で、赤鼻の道化師が高らかに声を上げると、そこらで遊んでいた子供たちが一瞬でわつ、と群がってきた。

・・・子供というのは全員地獄耳なのか、到底声の届かない場所と考えるとところからもこちら側の声に気づいて近づいている。

「今日はみんなにワインボトルのジャグリングを見せてあげよう！」
そういつて、道化師はケースの中から空のワインボトルを取り出す。このワインボトルはどこぞのワインバーからくすねてきたものである。そのうち、まず二本を手に取り・・・。

「はっ！ほっ！」

声を上げながら器用にジャグリング。そして徐々に三本、四本、五本・・・と数をだんだんと増やしていき、最終的にボトルの数は八本になった。

「わー！！！」

子供たちはきらきらとした瞳を精一杯、放射線を描くボトルを追い、喜んでいる。うん、素直が一番だ。

どこかのスタントマンは攻撃的だし、はたまたどこかのソムリエは皮肉屋だ。相手をするのに一苦労である。やはり人間、ひねくれるのはよくない。素直が一番だ。

「さあ、ここでフィニッシュー！」

道化師は高らかに叫んで、ジャグリングをしていた八本のボトルを高く投げる。そして、落ちてきたボトルを両手、片足、最後に頭で受け止めて 頭を打ち付けた痛みに耐えながら ポーズ。

「はい！！！」

拍手！歓声！道化師は最高にいい気分だった。うん、悪くない。副

業にしておくにはもつたいない……。

「さあ、今日はこれにて閉幕！またのお越しをお待ちしております！」

そういつた道化師の赤い鼻が揺れる。

「ええー！？つまらない！」「もつとやって」とせがむ子供たちをうまくなだめて、道化師は帰りの支度をしようとした。そのとき……。

「うん？あれは……」

道化師は広場の人々の中に懐かしい顔を見つけた。確か、あれは……。

「トミー？トミーじゃないか！？」

その顔と自分が考えている人物が同じかどうかもつとよく確かめる前に、道化師は声が出ていた。

呼ばれた人物は振り返る。金髪に少し白髪が混じり、いい意味で貫禄のあるぶつちやけると太り気味な丸っこい体つきに、人懐っこいような顔……。間違いない、トミーだ。道化師は確信していた。

「やあ、トミー。久しぶりじゃないか！」

トミーのほうは、いきなり道化師に声をかけられて一歩下がった。

「……だ、誰でしょう？」

いきなり道化師に話しかけられてたじろがない人間はあまりいない。

ああ、そうか、今時分は道化師だったんだ……。

「僕だよ、僕主人^{オナ}」

自分の顔を指差してそう名乗った道化師 主人をトミーは思案顔になって見つめた。どうやら本当に覚えていないらしい。

「僕だよ、僕！裏探偵！先代と仲がよかった……」

「ああ……！！！」

トミーはいきなり叫ぶ。

「主人！久しぶりです！」

トミーは主人のことを思い出したかと思うと、いきなり両手で握手、主人の両手をぶんぶん振り回した。

「や、やあ・・・元気だったかい？」

いきなりのことにとじろぐ主人。

「主人！」

トミーは再開を喜ぶときとはいくらか違った声音で叫ぶ。

「ど、どうしたんだい・・・？」

面食らった道化師の顔で言った主人に、トミーは切実な様子でこう叫んだ。

「助けてください！」

「・・・はい？」

裏探偵 それは、普通の探偵のように不可解な事件を鋭い推理力で解く過程で、相手に姿をあらわさず、全てを『裏』で解決する探偵である。

なんだかんだで某国の女王の暗殺計画を阻止し、無理やり助手と部下を連れてきた裏探偵の主人が挑む次の事件は・・・？

「いやー・・・久しぶりだなあ・・・ここも」

主人はトミーと共に訪れたレストランの看板を見上げて感慨深く呟いた。

掲げられた看板には『フレッシュFRESH』と書かれていた。主人の知り合いが先代をした老舗レストランである。

トミー・エンベルトはその先代の一人息子で、今は彼がこのレストランを切り盛りしている。

「それで、助けて欲しいというのは・・・？」

主人はいまだに道化師の変装を解かずにトミーに聞く。トミーは主人が顔を近づけるとやんわりと視線をそらした。

一度ならずあのミシユランガイドに載り、客からの信頼も厚いフレツシュの二代目店長・トミーの『助けて欲しい』ことというのは、いったいどういうことなのか？

「そ、それは・・・とにかく中に入って説明しますよ」

「うん？・・・うん」

トミーの声のトーンに、主人は探偵の鋭い勘から、何かとてつもなく嫌な予感を感じ取った。

「何だ、これはー！？」

道化師姿の主人は、店に入った途端、ものすごい叫び声をあげた。店内はひどい有様だった。それはもう、主人の記憶の中での店内とあまりにもかけ離れている。見る影も無いとはこのことだ。

まずおかしいのは、客が一人もないということだった。あのミシユランに載った『フレツシュ』が、だ。閑古鳥を飼うような店ではないはずだったのだが・・・。

しかし、店内の曇りが一点も無かった外張りのガラスは、汚れで向こう側が見えない。内装は手入れが行き届いていなさすぎる。一番最近に掃除をしたのはいつだと問い詰めたくなる。

レストランの核ともいえるキッチン・・・とても料理が作れる状態ではなかった。シンクは垢だらけだし、三角コーナーはごみ、生ごみの山だ。

「・・・」

あいた口がふさがらない。どうしたら店内がこんなビフォー・アフターに・・・？

主人はトミーを見た、というか睨んだ。彼はさつと目をそらす。

「どういうことだい、トミー・・・？先代の頃とまるで違うじゃないかー・・・？」

道化師は笑ってトミーに詰め寄った。そのメイクで笑いながら迫る

となんともいえない迫力がある。意外と怖い。

「こ、これには理由がありまして・・・」

「りゅー・・・？もちろん。ちゃんとした理由だろうねえ・・・？」

「ひい！その顔を近づけるのは勘弁してください！」

道化師の姿で笑う主人にすくみ上がるトミー。彼の特徴は、仮にも中年男性であるのに、大人の貫禄とプライドがあまり無いことだ。問い詰められたらいまのような始末である。

「先代の頃はごひいきにしてただけど・・・目を離れた隙にこれかい？」

「聞いてください！主人！私は先代である父親の代をついで、最初はもちろん客の要望にこたえていたんです！」

「『最初は』？じゃあ、なんでいまはこういう状態なんだい？」

「誰かが、私の店に邪魔をしているみたいで・・・」

「は？邪魔？」

「ええ・・・なんだか、変な噂を流されたり・・・そうだと思ったら急にパタツと客が遠のいたり・・・ろくに収入が得られないんですよ」「悪い噂が流れたから客が遠のいたんですよ、トミー。普通に考えて」

主人は冷静にトミーの言葉に突っ込んだ。彼は続ける。

「まったく心当たりが無いんですよ！」

「どんな噂が流れたんだい？」

「・・・『ここで食事をしたものは死ぬ』とか・・・」

「もつとましな嘘をつかんかいっ！」

主人はテーブルをバンツと叩く。埃が舞った。

「嘘じゃありません！」

トミーが反論する横で、主人はあきれ返っていた。

仮にもミシュランのレストランが、それぐらいの風評で客が遠のくだろうか？しかも、噂の程度がジュニア・ハイスクールに通う子供並みに幼稚だ。

「それで・・・一応聞いてあげるけど、助けて欲しいというのは？」
「見ての通りです。噂の出所を突き止めて、店の復興に手を貸してください！」

トミーは手を合わせて懇願した。

「ええ・・・？」

主人は困惑する。この僕が？店の復興を手伝う？

「君・・・僕は裏探偵だよ？」

主人は不満そうに言う。

「知っています」

「別に事件、では無いよね？警察沙汰？これって」

「重々承知しています！」

「・・・」

主人は思いつきりいやそうな顔をした。推理なんてしないじゃない。復興なんて、探偵じゃなくても出来るじゃない？

「どうか、先代の息子の頼みを！」

そんな主人の不満を読み取ったのか、トミーはさらに説得する。

「・・・まあ、確かに先代の店とあっちゃあ・・・」

道化師は思案顔になった。さて、どうしたものか・・・。

「とりあえず、僕にこの状況になったのは料理の味が落ちたせいじゃないということを証明してもらおうかな？」

「はい、それはもう！今すぐ料理を作ります！」

トミーは急にパツ、と年甲斐も無く瞳をきらきらさせてキッチンへと向かった。

「ちょっと待て、まさか、このキッチンで作るつもり・・・？」

道化師姿の主人のその呟きは、閑古鳥の鳴った店内に響き渡っただけだった。

君たちって、僕の友達だよな？

「・・・というわけで、クラウド、手伝って？」

「お断りします！」

場所は変わってワインバー・『BACHUS』^{バックス}。レストランからダイレクトでそこへ訪れた主人は先ほどの依頼の説明をした。しかし、相手の返事はあまりにも早すぎた。

相手、つまりここ『バックス』の店長、クラウド・ダイソンは、数ヶ月前の某国で起きた事件で、主人に無理やり仲間として引きずり込まれたかわいそうな被害者の一人である。

彼自身は、元暗殺者という輝かしい（この表現には疑問符がつくが）前職を持っていたのだが、その仕事を主人に簡単に妨害された上に、成り行きでなぜかワインバーを開いているという、波乱万丈という名の人生を絶賛迷走中の人物だ。

そしていまは、主人のとばっちりを受けた後、紆余曲折^{うよきよくせつ}を繰り返しているダイソンのことから、とばっちりの原因である主人の『頼み』などというものの答えには0・1秒ものためらいも必要ない。答えはNOである。

「ええ！？頼むよ！店の料理の味自体は先代の料理と同じぐらい良かったんだよ！理由は別のところに・・・」

ダイソンに即答された主人はカウンターに身を乗り出して叫ぶ。しかし、最後まで言う前に彼は主人の言葉を遮った。

「そういうことではなく、どこかの店の軌道修正になぜ私が手を貸す必要があるかという話なのです」

「だって、僕のたくさんの友達の中で料理に詳しい人物は君しかないんだよ？」

「・・・私は、そのたくさんの友達のうちの一人になった覚えは無いのですが？」

ダイソンは『たくさんの』を強調していった。主人はダイソンの言

葉に衝撃を受けた。漫画なら主人の背後にガーン、という効果音が付くに違いない。

「ひどいっ！僕は君を友達だと思ってたのに！ひどい子だよ君は！」
「お褒めに預かり以下略！それより、『子』とはなんですか！私はガキでしょうか？」

外見よりいくらか低い声で悲痛に叫ぶ主人に、ダイスはすかさず反論。しかし、主人も攻撃の手を緩めない。

「困っている人を助けようとは思わないのかね？」いくらかジェントルマンな声音で、ストレート攻撃。

「今現在、私は主人のせいあなたで困っているのですが？」と、ここでダイスは主人のストレートを難なくかわし、カウンターを繰り出した。

「僕が何かしたかい？」

と、主人はここで攻撃の仕方を変え、説得という変則的なジャブを繰り出した。

するとダイスは「あなたの存在にほとんど困り果てています」と、主人のジャブも皮肉で全て打ち返すという始末。

「うわ　！あんまりだ　！」

後が無い主人。最後には捨て身の泣き落として突進したが・・・。

「こんなところでぐずらないでください」

「・・・」

主人の耳にゴングの残響が響いた。勝負あり。主人の完封負け。完全KOだ。それもそのはず、主人の渾身の攻め、説得、泣き落として全てダイスの皮肉によって砕け散ったのだから。そして、勝者ダイスの最後の一言。

「私には私の店での仕事があるので、残念ですがほかを当たってください・・・ほかに友達がいればですが」

「・・・くそっ！見てろよ、絶対に協力させてやる！」

主人は脱いでいた鹿打ち帽を被り、店の出口に向かいながら叫んだ。
「どうぞ、ご勝手に」

ダイスンは涼しい顔で答えた。

「覚えてろー！」

主人はそう叫んでドアを乱暴に閉めた。あまりのドアの音にダイスンは一瞬顔をしかめたのだった。

「ヒサギ君、おなかすいてない？」

「・・・・・・は？」

『バツカス』にてK Oを食らった主人は、次の『友達』を当てにするために、某映画撮影スタジオへ訪れていた。

主人に話を振られた人物 ヒサギは、いきなりのこと思わず声を上げた。

「・・・・・・どこから現れた？」

彼女は鳩が豆鉄砲を食らったような（といっても、彼女を何かにたとえるには、鳩では役不足）顔をしてサングラス越しに主人を見た。そのときに小さく舌打ちをしたことは、主人は聞かなかったことにする。

「ここは関係者以外立ち入り禁止だったはずだが？」

「大丈夫。僕の副業のひとつが映画監督だということを忘れたのかい、ヒサギ君？」

「あんたの存在をもう少しで忘れられそうだったのに」

「・・・・・・」

聞かなかったことにする。

なかなか高度な『ぐさりと来る言葉』を巧みに操る女性 ヒサギは、スタントマンである。銀髪を伸ばし、瞳は澄んだ青い色をしている。容姿のほうはというと、完璧な輪郭のライン、モデル並みの九頭身

どうして女優ではなくスタントマンを職業にしているのか謎で仕方ない、と映画制作スタッフの中で噂される女性である。

問題の中身のほうは・・・・。

「また私に仕事の依頼でもしに來たのか？」

「違うよ。いまお昼ごろじゃない？だからおなかすいてるかなーと思つて」

「またやぶから棒に・・・そりゃ、昼ご飯を食べる時間になったら、腹減るだろうに」

「じゃあさあ、僕とレストラン行かない？」

「別にいいけど。おごり？」

「・・・うん」

主人の返事までに若干の間があつた。うん、一緒にレストランに來てくれそうだけど、それを聞くつて事は、大事なものは、その・・・ヒサギは主人の返事までの若干の間を気にする様子も無く、さらに主人に容赦なく聞く。

「まともなところだろうな？」

「・・・うん」

返事までの間がさつきより伸びる。そして、こつ小声でばそつとつぶやいた。

「掃除すればね」

「は？」

主人のつぶやきはしっかりとヒサギに聞こえていた。くそ、地獄耳め・・・。

「・・・主人、何か隠してるな？」

「いえいえ、別に？」

笑う主人の額には、冷や汗。

「今のうちに話しておけよ？わけもわからず厄介ごとに巻き込まれるのはご免だ」

「・・・てへ？」

とりあえず、主人は笑つてごまかした。

しかし、ヒサギの鋭すぎる眼光に、主人は今までの顛末を話さざるを得なくなつた。

「・・・というわけだね」

主人はヒサギにいままでの顛末を一通り話し終えた。いま、二人はヒサギの愛車である、うん何万\$（ドル）のカマロに乗って、『フレッシュ』まで移動している。

「また面倒くさい依頼を任されたな・・・」話を聞き終えて早々、ヒサギはそう静かに言った

「う、だって先代のレストランだし・・・」

「その先代とやらと主人はどういう関係なんだ？」

「数多い友人の中でも特に仲のいい人」

「・・・」

ヒサギはしばらく無言で運転をした。そして、いまの主人の台詞が何かの空耳だと無理やり納得した。

「僕はね、常連だったんだよ、あの店の」

「ふーん」

ヒサギは興味なさそうに相槌を打った後ふと尋ねた。

「で、あんたは私に何をさせたい？私がレストランの復興を手伝うために出来ることなんてたかが知れてる」

「いやいや。ぜひともヒサギ君には、レストラン・『フレッシュ』の常連になってくれたまえ！」

「どうして上から目線なんだ！」

ヒサギは自分を指差した主人の態度に甚だ疑問を感じたが・・・待てよ？

「常連・・・ということは、行きたびにあんたにツケてもいいってことか？」

「・・・・・・・・・・・うん」

「乗った！」

ヒサギはカマロのエンジンをさらに加速させて元気よく答えた。美しい銀髪が風になびく。

ヒサギ君、君と言う女性は・・・！

主人は店に付くまでの間、終始複雑な表情をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4514s/>

裏探偵 BackDetective

2011年10月9日00時24分発行